
灯舞 -akarimai-

孤艇 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灯舞 - a k a r i m a i -

【Nコード】

N4038D

【作者名】

孤艇 剛

【あらすじ】

車椅子の少女が一人。彼女は言葉を発する事が出来なかった。ある日出会った少年は、彼女の”声”を聴くことが出来た。口には出ない心の声を。だが彼は盲目であった。彼女は何故、そうなってしまったのか？不思議な力を持った少年の正体は？車椅子の少女と、美しい青い瞳を持った盲目の少年を繋ぐ、数奇で過酷な運命の糸車が今、回り始める…前作「流夜」続編の開始です。御楽しみ下さい。

序章

序章

柔らかな風…

肘掛けに添えた右手の甲を、ふうと撫でて遠ざかる。
手をかえして、通り過ぎた風を指先に感じてみようとした。

もう、いない…

まだ幼さが残る、端正だが寂し気な横顔がほんの少し表情を曇らせる。

病院の中庭は、よく晴れた青空に誘われたように沢山の人々が芝生の散策を楽しんでいた。

彼女の側には誰も居ない。

陽射しを避けるように木陰に車椅子を停めて、うつむくでもなく、遠くを見るでもなく、一点の絵画のように静止した彼女の姿は、他者との繋がりを一切拒んだ者の孤独が色濃く張り付いていた。

膝に載せた詩集のページを、ほっそりした指先が戯れるように捲ってゆく。

大鷲が首をさかしまにして空を見る。
空には飛びちる木の葉も無い…

高村光太郎の『苛察』を彼女は読み始めた。
淀みなく詩を朗読する彼女の脇を通り過ぎる人はだが、誰一人振り向きもしない。無関心というにはあまりに異様な光景であった。
まるでそこに誰も居ないかのような人々の反応…

彼女の声は誰にも聞こえなかった。
軽く引き結ばれた唇は少しも動いていない。

彼女は口をきけなかった。

蝉の声が響きを増す頃になると、詩を読むのに疲れた彼女は車椅子を動かして病棟の方へ戻り始めた。

ワタシの声…だれにも聞こえない…
どんなに詩を読みあげたって、だれも…
当たり前、か…

汗ばんだ小さな手でホイールを回し、ゆっくり、ゆっくり、舗装のゆき届いた路を進んでゆく。
中庭から病棟の入口に向けては緩やかなスロープになっていて、力の弱い彼女はいつも帰りに苦労していた。
リハビリを兼ねてワザと平坦にしていらないらしいのだが、患者達には不評であった。

いつもより多く外に居たせいか、入口まであと少しの所で疲れて止まってしまう。

ホイールはもうどうやって動かしそうになかった。

どうしよう…
どうでもいい…

どうしよう…

小さな葛藤が、愛らしい眉間にひとすじの皺を作った。

ガタン

いきなり車椅子が前に動く。驚いて振り向いた彼女の目に、逆光でシルエットになった人影が映った。

車椅子のグリップに両手を添えた少年がニコリと笑う。

誰？

蝉が増々やかましく鳴き盛っていた。

（続く）

第二章

第二章

ブルーアイがふたつ、彼女のほうへ向けられていた。

彫りの深い東洋系の顔立ちの中で、その目だけが明らかに異質であつた。

ハーフ？…

「（あなた、誰？）」

聞こえる筈の無い問いを発しながら、彼女は奇妙な違和感を感じていた。

暖かな波動を放つその目は、こちらへ向けられてはいても彼女を“視て”はいなかった。焦点は彼女を素通りし、何処か知らぬ遙か彼方へと結ばれていた。

「（もしかしたら…）」

次の瞬間、彼女は心臓がとび出る程驚いた。

「ウン、そうだよ。見えないんだ」

彼が答えたのだ。心の声に。

「（× ツ！…！）」

小さな体のちいさな心臓が、破裂せんばかりにバクバクと鳴り響く。

あまりの動揺に、危うく歩けない事を忘れて車椅子から走り出しそうになった彼女を彼の左手が支えた。

バランスを崩しかけた彼女の左肩を、思いがけず力強い手がしっ

かりと包む。

「ゴメン、驚かせるつもりじゃなかったんだ。その…困っているんじゃないかって…それでボク…」

ハッと気付き、彼は左肩に添えた手をあわてて離れた。顔を真っ赤にしている。

それを見て少し鼓動の収まってきた彼女は改めて彼を見た。青いＴシャツにジーンズ、スニーカーがヨレヨレだ。うなじの髪が、風になびかずピヨンと跳ねている。

「（ワタシの声、聞こえるのね）」

「そうだよ、ビックリした？」

間髪を入れず彼が答える。

「（ビックリって…それって普通じゃないよネ）」

彼女が問掛ける。

奇妙な語らいだった。傍から見れば、無表情な車椅子の少女に盲目の少年がひとり言を呟いているようにしか見えなかった。

「小さい頃から声が聞こえた。でも気がついたら誰も喋ってない…聞こえてたのはみんなの心の声だったんだ」

「（目は？その目は何時から？）」

小首を傾げて彼女が聞く。

「産まれた時から。ボクはこの世の中を自分の目で見た事は一度もないんだ…」

「（そうなんだ）」

彼女の“声”の口調が沈む。

「キミ、可愛いのかな？」

急な言葉にまた鼓動が上がりそうになる。

「（しっ 失礼ね！ナニもぅ…アナタ名前は？）」

「殉。キミは？」

「（加夏子、カナでいいよ）」

不思議な出会いの始まりだった。

（続く）

第三章

第三章

病棟に隣接する本館の三階。開け放った窓から下を眺めている医師がいた。

「何か面白いものでも見えまして、先生」

カルテを整理しながら、若い看護師が聞いてくる。

「ん…ああ、イヤ、別に何が見えるという訳じゃないんだが。チヨット、ね」

「どうせまた悪い虫が騒ぎ出したんじゃないかって。この間も先生ったら“今度B棟に入院した若奥さん、精密検査が必要だっていうからウチのほうへ来ないかな？”って今にも涎を垂らしそうだったじゃないですか」

白衣の医師が思いきり顔をしかめる。

「涎はひどいなあ、せめて涙を流して…位にならないかね？」

「余計にアヤシイです」

軽く微笑みながら、医学雑誌の束を医師に渡す。

「今月号、先生の論文が載っているんですよ？ オメデトウございます。ちゃんと御自分の目でお確かめになって下さいね」

「自分で書いた論文だぞ、何でいちいち読み返さなきゃならないんだ」

「成果の確認です」

「目出度いと思うなら、今度ふたりで御祝いしないか？ 横浜に素敵なレストランを見つけたんだ、夜は港の灯りが綺麗で…」

看護師がクスリと笑った。

「謹んで御遠慮させてもらいます」

「そんなあ！ キ又ちゃ〜ん」

「気持ち悪い声を出さないで下さい。それに、その呼び方は止めて下さいと何度も御願いましたよね？ 私の名前は衣笠恵美子、せめてエミちゃんと呼んで下さいませんか」

「呼び方変えたら朝まで付き合ってくれるかい？」

「フ・ケ・ツ」

にべもなく誘いを断った彼女が何気無く窓の外を見た。

「アラ、あの子たち」

「そうなんだ。さっきからスロープで立ち話を… しているように見える。だが、なあ」

「彼女、確か歩行障害と一緒に…」

「失語症を併発している。よほど怖い目に会ったのだろう、可哀想に。相手は通り魔だったらしいが」

「…」

「彼が話し掛けるのは珍しくないんだが、ちと相手が悪いな」

「エッ？」

恵美子が理解出来ないと言うように首を傾げる。

「不思議な少年だね。ああやって接触をもつ事で今まで何人もの患者を全快に導いてきたんだ。僕ら医者連中は密かに彼の事を“幸福の王子”と呼んでいるくらいだ。だが…」

医師が表情を曇らせる。

「彼女は無理だ」

「どうしてそう思われるのですか？」

「それは…」

医師が言い淀んだ。

（続く）

第四章

第四章

溜め息をひとつ漏らすと、医師は恵美子に向き直った。

「あの娘の場合、肉体の損傷時の状況が同時に強烈なトラウマとなってしまうている。強い自己暗示とでも言えればいいか。そのせいで現状が常態化されてしまっているんだ」

「現状の…常態化？」

「判り易く言うとね」

彼は机の上にあったジツポをとりあげ窓枠に置いた。

「車が走ってくる。たまたま道を渡っていた人が運悪く跳ねられたでしょう」

窓枠にジツポを滑らせ、二本の指で人に観立てた左の手を弾いてみせる。

「バンツ！ 車はそのまま走り去っていった」

「ヒドイ… 轢き逃げですね」

「その人は幸いにして命を拾った。目立った障害もなかったので比較的早く日常生活に戻る事が出来たんだ。でも後遺症は思わぬ形で現れたんだよ」

「？」

「その人はタクシーの運転手だったんだが、二度と元の仕事には戻れなくなってしまったんだ」

「それは… 車への恐怖心が生まれた…とかいう話なのでしょうか？」

「イヤ、そうじゃない。運転が出来なくなったんだよ。それも手足が動かなくなるなんて生易しいものじゃない。意識を失なってしまうのさ、車種、座席位置、状況や誰と一緒にかなど全くお構いなしに、乗車した途端、深い昏睡状態に陥ってしまうのだ。丁度、事故

直後にそうだったようにね」

「そんな事って… その人は健康面に問題は無かったのでしょうか？」

「脳にも躰にも異常は見つけられなかった。医学的には何の問題も無い健康体だったよ。だが、症状は100%再現された…」

ジッポをポケットにしまいながら、医師は再び窓の外に視線を移した。

「例え話かと思ってたのですが。実際にその方を診察されたのですね、先生は」

「ああ。結局は原因も治療法も、何ひとつ判らずじまいで終わってしまったがね」

医者なんて無力なモンさと自嘲気味に笑い、彼は遠くに見える二人を目で追った。

「精神科の友人がね、自己暗示の一種じゃないかとアドバイスしてくれたが、お手挙げだった事に変わりはない。強烈な経験は、その強烈さ故に身心に焼き付いてしまう… あの王子さまにどれ程の力があつたとしても、“自分はこうである”と当たり前のように信じ込んでしまっている相手に何が出来るとも思えないよ、僕には」

「でも、何か他にいい治療方法があるんじゃないですか？ ずっとこのままなんて…」

医師が首を振る。

その目は、二人をいつまでも見つめ続けていた。

（続く）

第五章

第五章

出会ってから2週間が過ぎた。

殉は、今では私の毎日に欠かせない存在になっていた。

彼には私の“声”が聴こえた。

とても不思議なことなのだけど、最初は戸惑っていた私も、今では、何もしなくても意思の疎通が出来る彼を誰よりも信頼している。

そして今日もまた：

「ヤア」

いっつも最初の一言は“ヤア”から始まる。

お気楽なんだか親しみ易いんだか。

「カナちゃん、今日は外へ出ないの？ 燕の子供達が随分と大きくなつたよ、一緒に観にいかないかい？」

まるで小さな子供を誘うような言い方。

これでも高校三年生よ、そりゃあ臆だって胸だって、標準よりホンの少し小さいかも知れないけどさ。

耳元に顔を寄せてくると、殉が囁くような声で言った。

「ムネは関係無いと思うけどなあ」

「（バカッ！ そんな事まで聴かなくてイイのっ！）」

「聴こえちゃうんだからしょうがないだろ、聴かれなくなかったら頭で想わないでよ」

照れ隠しなのか、珍しくジュンがふくれっ面で言い返した。

「（仕方無いじゃん、殉には私の考えてる事は全部お見通しなん

だから」

「そりゃそうだけど…」

ますます膨れ上がる顔を観るのが愉しくて、もう少しダダをこねてみる事にした加夏子は片方のホイールを押して彼に背を向けた。

「ゴメン… 怒った？」

「（知らない）」

……

「僕は…いつも嫌われてた。この力のせいで」

「（えっ？）」

彼の口調が急に重苦しいものになり、今度は加夏子の方がドキマギしてしまう。

暗く沈んだ声は、いつも明るく話し掛けてくれる殉からは想像出来ないものだった。

「親からも親戚からもバケモノ扱いされていたんだ。サトリっていう妖怪なんだそうだよ。そうやって指差され、怖がられ、みんなから放り出された僕を面倒見てくれたのは兄さんだけだった」

思いがけない話に、加夏子は返す言葉が見つからなかった。

声とは裏腹の乾いた横顔が、逆に深刻な内面の懊悩を表しているように痛ましく見えた。

「（お兄さんは、いまどこにいるの？）」

「判らない。でもきつと帰ってくる… きつと」

彼が呟いた。

彼女が運命の皮肉に気付くまでは、まだまだ時間が必要であった。

（続く）

第六章

第六章

リハビリは日課だったが、周囲の熱意とは無関係な世界に彼女は居た。

両脇から支えるトレーナー、動かない足を両手で引きずり前へ…
前へ…

3 m程の練習路を行っては戻りを繰り返す、単調でつまらない時間。

アンヨがじょうず…アンヨがじょうず…

不思議だ

歩けないのに

歩かないのに

どうしてこんな事するんだろ

どうしてみんな、こんなに熱心なんだろ

赤ん坊じゃないんだよ私

車椅子は不便だけど、今はなんとも思わない。

静かな場所と詩と、いっぱい緑と、少しのお陽さまがあれば私は幸せ。

ジュンもいるし。

今でも充分、贅沢過ぎてはちがあたっちゃう。

私は幸せ

ワタシハシアワセ

ワタシハ…ワタシ…ハ…

私はどうしてここにいるの!?

世界が凍りついた。

臍も心も、呼吸さえ止まった。

真っ暗な視界の中で光る刃。

笑う男が心臓を握り潰す。

いや…イヤだ…やだよ…

イヤアアアアアアアアーツ!!!!!!

突然、棒のように倒れた彼女をトレーナーが抱え起こした。

「いかんっ！ 発作だ、先生を呼べ！」

「はっ、ハイ！」

「クッション持ってこい！ 頸の下に…気道を確保するんだ」

「銀さん、呼吸が止まってます」

「緊急蘇生だ、人工呼吸始めろ！」

「はい、人工呼吸始めます！」

若いトレーナーが呼吸を吹き込む脇で、銀さんと呼ばれた中年のトレーナーが心臓マッサージを開始した。

「一、二、三… バイタルサインは？」

「ありません」

その時、騒ぎを聞き付けた看護師が一人、リハビリルームに飛込んできた。

「銀さんっ！」

「エミちゃんか。まただ、AED（簡易除細動器）を持ってきてくれ、早く！」

「わかった！」

全自動化され、医師以外の者でも扱いが容易かつ認められているAEDは、大病院や空港などの大施設には至る所に設置されており、医師や救命士の到着を待てないような一刻を争う緊急事態に備えてあった。

オレンジ色のケースを持って恵美子が戻ってきた。

「自発呼吸は？」

「駄目だ、やろう」

「ハイ」

着衣の前をはだけ、恵美子が胸と脇腹に電極を張り付ける。

「いきます、離れて！」

トレーナーの二人は、加夏子から離れると同時に両手を上に挙げた。

「接触なし」

「スイッチいれます！」

低いチャージ音が響き始める。

逝くな、嬢ちゃん。

ボソリと銀さんが呟いた。

（続く）

第七章

第七章

また風が吹いてる…

ゆっくり目を開けると、病室の白い天井にシミがあるのが見えた。開け放った窓から、カーテンを微かに巻く風が部屋の中へと流れ込んできていた。

また何かあったんだ、わたし

初めてではなかった。

こうやって、気がつくとベットに横になっている事がしばしばあった。

深い眠りから覚めた時のように、動かない足はおろか、腕や躰まで物憂気にだるく、すぐには言うことを聞いてくれない。息をするにもユツクリやらないと咳込んでしまうのだ。

「お目覚めね、気分はどう？」

ここしばらく私を担当している年配の看護師が、食事を載せたトレイを持って入ってきた。

「大変だったわね、いつもアナタは突然だから、みんな大騒ぎだったのよ」

何がタイヘンで、何が突然なのか、そんなコト判る訳無いじゃない。

いつもこの部屋で目覚める。

いつも誰かが言う、大変だったと。

そしていつも…

何ひとつ覚えていないのだった。

「そうそう、貴方の担当は今日から違う人になるから。後で紹介するわね」

顔はにこやかだが、どこかホツとしたような気配がにじみ出ていた。

自分が好かれていないのは知っていたが、他人のあからさまな感情は加夏子をいつも不安にさせた。それすら人には判る筈も無かったのだが。

「コンニチハ、もう起きているのね」

開いていた病室のドアから見知らぬ看護師が入ってきた。

歳は二十代半ば位であろうか、潔癖そうな光の強い目が加夏子を真正面から覗き込んできた。

「やだ、もう来ちゃったの。今あなたの話をしていた所なのに…」

「和田さん、申し送りはもう済んでいますよね。手伝って頂いたのは感謝します」

睨みつけるような視線のまま、若い看護師が深々と頭を下げる。

「あとは私が」

「おおヤダ、年寄りをそんなに早く追い出したいのかねえ」

相変わらず笑顔だが、さつきよりも露骨に不快感を見せた中年の看護師は、アト宜しくと言い捨てて部屋を出ていった。

このヒトも、同僚達から決して好かれてはいないのだと加夏子は思った。

「夏は好き？」

唐突に若い看護師が話し掛けてきた。

「私は嫌い。ついでに言っておくけど、今の貴方も嫌い。傷付い

た自分を“歩けない”と思い込んでる貴方も、ね」

覗き込む目が光を増していた。

（続く）

第八章

第八章

たゆたうだけの日々に変化が生じていた。

それは加夏子にとって心地良い変化ではなく、どちらかと言えば苦痛を伴うものだった。

「オハヨウ！　いつまでもベットのことでグズグズしてちゃ駄目よ。食事をとったら遅れているリハビリのメニューを沢山こなさなきゃならないんだから。人参残したら、銀さんに言ってトレーニングを倍にしてもらいますからね、ちゃんと食べるのよ」

衣笠恵美子と名乗ったその看護師は、初対面で加夏子のことを嫌いだと言つてのけた。

反発や嫌悪感を抱くより先に、余りにアッサリキッパリした態度に彼女は毒気を抜かれてしまっていた。

むしろ逆に、年下の加夏子のほうが「（この人、こんな調子じゃスグにクビになっちゃうんじゃないかしら…）」と心配してしまう位であった。

変わった人だ。

そのままズルズルと彼女のペースに乗せられて数日が過ぎてしまった。否応無くペースアップしてゆくリハビリメニューに嫌気が差し、何度か反抗を試みてはみたが、まるで石仏にあられをぶつけるように跳ね返されてしまう。

そしてシブシブ、普段に倍したメニューをこなす事になってしまった。

要は加夏子は、完全に恵美子にペースを握られているのだった。

何でこんな目に会わなきゃならないの！？
今日は大好きな詩を読みたいのにつ！

不意に強い怒りが湧いてきて、加夏子は朝食をトレイごと恵美子の顔めがけて投げつけた。

ガシャアー……ッン！！！！

病室中に食器と内容物が飛び散った。

食器をぶつけられた恵美子は、顔を押さえて前屈みになったまま動かない。

自分のしてしまった事の重大さに、加夏子は漸く気がついた。

ゆっくりと軀を起こした恵美子の額がパツクリと切れ、白い肌に太い鮮血の条が幾つも流れていたからだ。

顔から血の気が音を立てて引いていくのがわかった。

その時……

「今までで一番のヒットね、それだけ元気なら病人扱いしなくていいかな」

血まみれのまま、恵美子がニツコリと笑ったのだ。

血の涙を流す聖母マリア

フトそんな言葉が、加夏子の脳裏に浮かんだ。

（続く）

第九章

第九章

恵美子との間の葛藤は、この前の事件があつてからは小康状態となつていた。

額の傷は出血の割に大したことはなく、恵美子自身も何事もなかったかのように振る舞っているのだが、当の加夏子本人がすっかりしよげかえってしまったのだ。

恵美子の額に貼つてある、やや大振りの絆創膏を目にするたびに心の何処かがチクリと痛み、バツの悪さから言われる事に素直に従つてしまう。

もとより活発であつたが、誰かを憎んだり傷付けたりという感情とは無縁のまま育つてきた加夏子にとって、今度の出来事はショックであつたのだ。

ワタシ、かわつちやつたんだ

歩けないからじゃない

喋れないからじゃない

もう戻れない

想いの蔦が絡みつき、捻れ、やがてまたひとつ心の牢獄を造り出す。

今日も、ひとつ

明日も、たぶんひとつ

病院生活が始まって以来、彼女が編み続けてきた蔦の牢獄の数がどれ程のものか、恵美子はもとより周囲の誰一人として知る術は無

かった。

もし、加夏子の闇を理解する者がいるとしたら、それは…

いつにも増して憂いの色を濃く宿した顔をふと上げて加夏子が恵美子をじつと見た。

「ん？ なに」

彼女の視線に気がついた恵美子がクリップボードにペンを添えて差し出すと、細い指がさらっと短い文字をしるす。

最近筆談すら億劫になりがちな加夏子にしては珍しく急いた様子に興味をそそられ、恵美子はボードに目をおとした。

ジュンはどこにいるの

そのひとことだけ。

ボードの向こうに、訴えかけるようなまなざしをひたと据えた加夏子が静かに座っていた。

この娘には、ここは牢屋なのだと恵美子は瞬時に理解した。

ただ仲良しに会いたくなっただんじやない、

あの王子サマは、彼女の閉じ込められている部屋の鍵を確かに持っているのだと。

看護師としてのプロ意識が、恵美子にしらを切らせた。

「ジュンって… ああ、堀川殉クンね。彼なら居ないわよ。一時退院で帰宅中ね」

事務的に返答すると、加夏子は酷く落胆したように車椅子を窓の外へと向けた。

外は晴れてはいなかった。

（続く）

第十章

第十章

昨日の陰鬱な空が嘘のような快晴であった。

湿度も低く、肌に触れる空気がサラサラと心地よい。

天気の良い日はいつもそうしているように、加夏子は詩集を膝に、中庭の木陰へ車椅子を停めていつものように朗読を始めようとしていた。

そういえば

ジュンと初めて会った日も、こんな気持ちのいい風が吹いていたっけ

たったの1週間、それっぽっちの空白がひどくもどかしく、腹立たしくもあつた。

一時帰宅って、ジュンの家には誰もいない筈じゃない、ひとりぼっちの家に帰って何があるっていうの？　ここならワタシだっているというのに…

理不尽な想いであるのは判っていた。彼にだって家に、病院ではなく自分の家に帰りたいという気持ち位あっても当たり前だと頭では理解していた。

それでも今はジュンに会いたい…　会ってワタシの“声”を聞いて欲しい…　話を聞いて欲しい…　いっぱい、ウンとイッパイ…

背後から草を踏む音がした時、彼女は何故か願いが聞き届けられたと思ってしまった。

ジュン

車椅子のホイールを勢いよく回し、期待を込めて後ろを振り向いた。膝の上から中原中也の詩集が落ちる。

「よう！ いい天気だな、嬢ちゃん」

笑いながら近付いてきたのは、いつもリハビリの訓練に付き添っている中年のトレーナーだった。

近くまで歩いてくると、彼は加夏子の足許に落ちた詩集を拾い、軽く叩いて土を落とした。

「中也か、若いのに随分屈折した詩を読むんだな」

屈託なく話すその男が皆から銀さんと呼ばれていた事を加夏子は思い出した。

「“在りし日の歌”なら俺も読んだ事がある… もっとも嬢ちゃんと違って、初めて読んだのは四十を過ぎてからだけど、な」

かなしい心に夜が明けた
うれしい心に夜が明けた

野太い声が、ゆっくりと一編の詩を詠う。

加夏子がハッと表情を変えた。

その詩の題名は、

『青い瞳』

「嬢ちゃんが誰を待ってるか、見当はつくよ。俺達は軀を直す手伝いは出来るが、それ以外はサッパリだ、悔しいがああ坊やにや敵

わん」

銀さんの指さす方へ目を向けると、人影が一つ、陽炎に揺られながら近付いてくるのが見え」。

「ヤア」

1週間ぶりの、あたたかい笑顔がそこにあつた。

（続く）

第十一章

第十一章

どうかしてしまったんじゃないかしら

自分でもそう思う程、次から次へと頭の中に言葉が浮かんできた。経緯も脈絡も時間軸もすっ飛ばして、止めようのない想いの洪水が溢れてくる。

さすがのジュンが、チョット待ってよと苦笑しながら諭す程、加夏子の想念の奔流はケタ違いであった。

「カナちゃん、もうチョットゆっくり話してよ、ちゃんと全部聞いているからさ」

「(ダメ、ジュンが黙って家に戻っちゃったのが悪いんだからね！)」

ピシヤリと言い放ち、増々脈絡の無い、いつ終わるでもない話に没頭してゆくのだった。

薄く開いたドアの隙間から、二人の奇妙な会話を覗き見る者がいた。

「銀さん…どう？ あの二人。ワタシにはどう見ても、あのコ達がちゃんと意思の疎通をしているようには見えない。でもなにかしら、あの愉しそうな姿は」

恵美子の後ろでは、難しい顔をした銀さんが腕を組んで立っていた。

「フムウ…」

「ンもうつ！ さっきからそうやって唸ってばかりなんだから。おかしいとは思わないんですか？ 彼女、話せないんですよ。さっ

きから彼が一人で赤くなったり青くなったりしてるだけ。でも見て下さい、あんなに表情をコロコロ変えて…あんなに愉しそうに…初めて見た」

小声であつたが、恵美子は興奮を隠せなかった。

「彼は絶対！ 彼女と直接コミュニケーションを取っています。

この様子が何よりの証拠ですよ！」

「エミちゃん…」

「これが彼の“幸福の王子”である秘密なんですよ！ 彼さえ居れば、自閉症の子だつて心を開けるかも知れない！ 治療の道のない人達にも光が差すんですよ！ うまくいけば…」

「エミちゃん！！！」

銀さんが怖い顔で恵美子の両肩をわし掴みにした。

！？

「あの坊やは俺達の道具なんかじゃない。あの子はな、ああやって誰に頼まれた訳でもないのに、毎日病室を回つて、淋しそうなコ、哀しそうなコ、退屈で壊れてしまひそうなコの話聞いてやってるんだ。自分だつて目が見えないくせにな。俺達はいつも、そつと坊やを見守つてる、坊やが手に負えなくなつた時だけ何食わぬ顔して助けてあげられるように、な」

哀しそうな顔をして、銀さんが言った。

「放つておいてやろうや、ナア…」

銀さんの言葉が、恵美子の胸の奥深くに染み渡つていった。

(続く)

第十二章

第十二章

外出許可が出たのは、殉が病院に戻った翌週の事だった。

入院してから初めての外の世界…

加夏子はずっと拒否していた。

何故だか判らない、でもこの病院の外にはとてつもない怪物が待ち構えていて、一步でも門を出ればひとくちでワタシを頬張り、噛み砕き、骨も肉も無いグチャグチャの塊になるまで味わって、ゴクンと飲み込んでしまうに違いないんだ

理由も無くそう思い続けてきた。

そうじゃない

何かがひどく間違っている

そんな風に思えるようになったのは、ジュンと話すようになってからだ。

自分では一度も世の中を視た事の無い彼の言葉…

そこには“真実”があった。まともに見開いているというだけの目には決して映る事の無い、ありきたりな、何処にでもある、でも絶対に偽りではない光と温もりが、まるで目前にあるかのようにありと感じられるようになったのだ。

「（…チョット、いつてくる、ね…）」

病院の正門で迎えを待つ間、加夏子はずっと黙っていた。

“声”を出すのがひどく久し振りのような気がしながら、彼女は

おずおずと隣りに立つ殉に話しかけた。

「（ひと晩だけだから、すぐ帰ってくる。荷物だってそんなに持っていないし……）」

加夏子は車椅子の手摺を睨んでうつむいたままだった。

「言い訳してるみたいに聞こえるよ」

殉が笑いながら答えた。

「僕だってこの間は帰ってきたんだ。カナちゃんだって帰ってあげなきゃ。お父さんやお母さんも待つてる筈だよ」

「……」

「もしかしてカナちゃん、『この前は散々、一時帰宅したジューン君をなじっておいで今度は自分が帰っちゃったりしたら格好がつかない』なんて思っちゃったりしてるの？」

「……」

加夏子は沈黙を続けていた。

「ねえカナちゃん……」

「（そんなのじゃないっ！……）」

殉の言葉を覆い隠すように、烈しい想いがほと走る。

「（私……ワタシ怖いのに、どうしてだか知らないけど怖いのに！ 凄く怖いのに！！ 行きたくないっ！！！！）」

加夏子が車椅子から身を乗り出して殉にしがみ着いてきた。

「（やだやダッ、やっぱりやダァ……！！）」

幼な子のように泣きじゃくる加夏子の背中をさすりながら、殉が優しく囁いた。

「大丈夫。君には家族がいるから」

近付いてくる白いクラウンに、彼は手を振ってみせた。

（続く）

第十三章

第十三章

エアコンが程良く効いた車内は快適だった。

加夏子は後部座席で身を反らせ、遠ざかる病院の建物をいつまでも見つめていた。

「カナちゃん、やっと病院の外に… ううん、家に帰ろうって気になってくれたのね。病院から連絡があったとき私、嬉しかった」
助手席で加夏子の母、清水紗季子が白いハンカチを膝の上で握りしめながら呟きかけた。

品の良い藍色の和服が、小さな軀と小さな声を包んでいる。

「…この一年、どれだけこの日を待ったか。ねえアナタ」
ハンドルを握る男は、加夏子の母とは対照的に威丈夫の巨漢だった。

加夏子の父、清水恒彦はそのいかつい体軀からは想像出来ない優しく弾んだ声で言った。

「ああ、パパはなあ、もう嬉しくってウレシクって、昨日の夜なんか口々に眠れなかったんだぞ！ 今夜はカナの大好きなカルボナーラだ、ママが腕によりをかけて作ってくれるからな」

後ろを振り向きはしなかったが、彼の声は喜びを隠そうともしていなかった。

加夏子はまだ後ろを向いたままだ。

「カナちゃん、ずっと病院の方を見てるのね。さつき見送りに来てくれてたコ、仲良しなの？ もしかしてボーイフレンドなのかしら？」

「よさないかサキ、カナだつて年頃なんだ、ボーイフレンドの一人や二人いたつて不思議じゃないだろ、ましてや長い病院生活だ、色々話したりする同い歳の友達だつて出来るさ、ナァ」

前席で両親が話し続ける間も、加夏子は一度たりとも前を見ようともしなかった。

まるでそこには誰も居ないかのよう。

まるで世界が自分一人の呼吸しか許していないかのよう。

まるで…

蛇にいざなわれ、楽園を追われたイブのよう。

それでも彼女の両親は話し続けた。

絶え間無く、途切れることなく。

やがて完全に病院が見えなくなると、加夏子は初めてゆっくりと前を向いた。

車内を沈黙が包み込む。

加夏子は静かに、静かに微笑んでいた。

（続く）

第十四章

第十四章

どこにでもいる、当たり前前の家族の姿だった。

人影のまばらなアウトレットモールを散策し、隣接するヨットハーバーから吹く潮風の中を仲良く三人で進む。

大柄な父親はよく喋りよく笑った。娘も、娘に寄り添う母親もその様子に釣られて笑顔をこぼす。

普通と違うのは、車椅子に座った娘が一言も言葉を発していない事だった。

板張りの栈橋で、買ってきたパンをちぎっては群飛ぶカモメに放って飽きる事の無い娘の姿を、少し離れた所から両親が見守っていた。

「あのコつたら、あんなに愉しそうに……病院を出る時はまるで死刑台に引きずり出されそうな顔をしてたから心配だったけど、とても良くなってそう。まるで今にも歩きだしそうじゃないですか」

眩しそうに手をかざしながら、紗季子が傍らの夫に話し掛けた。

だが恒彦は先程までとうって変わり、厳しい顔で推し黙っていた。

「アナタ……」

「昨日、あの子の担当医と話した。リハビリトレーナーも交えてジックリとな」

「それで、先生は何て？」

紗季子の声が今までに輪をかけて低く小さくなった。

「背中の傷はこの一年では回復したそうだ。元々、重要な部分には殆んど傷は無かったし、神経束を圧迫していた骨片も三回の手

術のお陰ではば除去する事に成功した。にも関わらず加夏子の足は一向に動く兆しすら無い。言葉も戻ってこない。それに」

「あの事は…まだ、なのね」

「ああ、何も思い出さないそうだ。あの日の記憶は、一年経った今も何一つ戻ってきていない」

太い溜め息が恒彦の口から漏れた。

「交通事故…か。そう信じ込む事であの日の恐怖を封じてしまったのだらうと医者と言っていたよ。その力が強過ぎて、自分が歩けたことも、喋れたことも、一緒に忘れてしまったんじゃないかな」

胸のポケットからマルボロの箱を取り出しながら、どこかすがるような目で恒彦が紗季子を見た。

「なあ」

「？」

「もしかしたら、あの子は今のままのほづが幸せなんじゃないだろうか」

「そんな！ アナタったら…」

紗季子が絶句した。

「歩く事、口をきく事を思い出すのが加夏子の忘れてしまいたい恐怖を呼び起こす事になるというなら、いっそのままの方が…」

タバコの火はつかなかった。

太い指の間でライターが震えていた。

（続く）

第十五章

第十五章

久し振りの一家団欒の食事。

忘れかけていた父と母の暖かさ。

手作りのカルボナーラはひどく懐かしい味がした。

パパもママも、本当にワタシの帰りを待っていてくれたんだ

加夏子の想いは複雑であつた。

今日まで病院で過ごしてきた一年間がすごく遠回りだったような

… 実体の無い脅迫観念に縛りつけられ続けてきたような… そんな気分であつたのだ。

事故の怪我だってもうだいぶ良くなったって先生も言っていたし、そろそろ家に帰ってくる事を考えなきゃダメかも知れないな

ワタシ、何であんなに病院から外へ出る事を怖がっていたのかしら

こうして自分の家に戻り、父や母の変わらぬ笑顔に触れていると、今までの自分が不思議に思えてくる。

歩けない事、喋れない事を除けば以前と何一つ変わらないのだから。

加夏子の中で、その二つはさして重大な事では無かった。普通ならとてつもなく大変なハンデであり、人によつてはそれだけで生きる希望を根こそぎ奪われてしまつても不思議ではない事であるにも関わらず気にもならない、そのこと自体が異常な心の働きののだと言つ自覚が彼女の中からはスッポリと抜け落ちていたのだ。

病院食と違いボリューム豊かな夕食にお腹が少し苦しくなった加夏子は、腹ごなしにリビング脇のスロープから庭へ出てみた。

潮の匂いがする夜風に髪がなびくに任せていると、庭に面した路上に人影が動いた。

全身の毛が逆立つ。

「もしかして… カナちゃん、なのか？」

「（憲一…クン？）」

海外留学へ出たつきりずっと会っていなかった隣家の幼馴染みが、二年前より大人になった姿でそこに立っていた。

ケンちゃん…

ケンちゃんだ！

夢中で車椅子のホイールを回し庭の端まで来ると、加夏子は柵越しに身を乗り出してひしとしがみついた。

ケンちゃん、会いたかった… 会いたかったよ…

声を出さずただただ涙を流して抱きついている加夏子の背を、彼…速水憲一は優しく撫でた。

「帰国したばかりなんだ。ゴメンよ、ずっと連絡もしないで」
加夏子が激しく首を振る。

「君の事、ずっと知らなかったんだ。もしかしてと思って来てみたんだけど、会えて良かった」

加夏子はただ嬉しかった。

だが…

「大変だったね、相手は通り魔なんだろう」

…えっ？

（続く）

第十六章

第十六章

父さんがロンドンまで国際電話をかけてきたんだ
カナちゃんが大変だと

予備校の帰りに通り魔に襲われて切られたって
重傷で命の危険もあるって

飛んで帰りがかった
でも飛行機の席がなかなか取れなくて

そのうちにまた連絡があって
命は助かったけど足が動かないと伝えてきた
御見舞いには必ず行くからお前はしっかり勉強を続ける
そんな事言ってきた

何度もなんども帰ってこようとしたんだ
その度に止められて、挙げ句学費は出さないぞって
まったく何考えてんだか
やっと帰国したら今度は病院の名前も教えてくれないんだ
おかしいよ

でもやつと会えた：
ヨカッタ

憲一の話を書く加夏子の思考は止まっていた。

なに、それ

ワタシ事故で入院してたんだよ

パパやママだって怪我しちゃって、救急車だって来て、おまわり
サンがたくさんいて…いて…運ばれて…ストレッチャー…

警官…

会話…

無線の…

………

「被害者は女性、えー、学生証から確認、 高校の二年生、え
ー、氏名は清水 加夏子サン、17歳。鋭利な刀状の凶器と思われ
ます、背後から斜めにキズあり、えー、只今から搬送します。重傷
です。…はい、はい、事情聴取は出来ません、は？ 無理です、今
すぐ運ばないと危ないと隊員が… だから！無理だと言ってるだろ
う！！ 犯人？ そんなモノとつくに逃げてるよ！ 非常線の配置
はどうなってるんだ！！」

喫茶店の前の暗い路地、見上げた所に立つ警官が一人、無線に向
かって叫んでいた。

「搬送先は 病院です、警察も同行しますか？」

救急隊員が息せき切って警官に問う。

「アア、俺が行こう。他の者は現場保存と事情聴取だ」

「では早く乗って！」

…見知らぬ映像が焦点を結んだ、その時…

バシッ！ と頭の中で音がした。

同時に、失なわれた記憶の奔流が凄まじい勢いで溢れ出て加夏子

を押し流した。

ダメ、駄目、そこを開けちゃだめっ！

思い出しちゃダメだって… それ以上喋らないで、ワタシに見せないで、アレを… あれだけは駄目っ！！

背中に激痛が走った。

そして。

倒れ込む視線の隅をかすめる黒づくめの男の顔。
切長の冷たい目が…

笑った

ニヤリ

憲一を突き飛ばした拍子に車椅子からころげ落ちた加夏子は、白目を剥いて失神していた。

悪夢が、蘇った。

（続く）

第十七章

第十七章

夜の病院には不自然な静けさがある。

広大な敷地に反比例して、そこには人間の生活する音、それにつきまとうように沸き起こる種々雑多な背景音が欠け落ちている。

墓地の不気味なまでの静寂とも違う人工的な沈黙が、毎夜繰り返されるのだ。

秋の訪れと共に首筋を撫でるようになった、少し冷たさを感じさせる夜風に襟を立てながら通用口を出てきた男がいた。

警備員に挨拶を交すと表門を目指して歩き出す。

もう三年か…

何年通っても、このビョウウインのフンイキって奴には慣れやしない
ヤレヤレ…

帰りに一杯やる店を頭に思い描きながら、銀さんは足を早めようとした。

「ん？」

表門に続くエントランスの途中、中庭の芝生に立つ街灯の下に人影がひとつ。

真っ直ぐに立ったまま動かない。

顔を天に向け、星を見ているようにも見える。たがその表情は厳

しく険しい。

「ヨウ坊や、今夜はこんな時間に天体観測かい？」

空など見える筈が無いのは百も承知で、銀さんはその少年…殉に話し掛けた。

「判ってましたよ、銀さん。今から飲みに行くんでしょ？ “声”が聞こえたから」

ゆっくりと顔を降ろし殉が銀さんの方へと向き直った。

この坊やはいつもそうだと銀さんは思った。目が見えなくとも、相手に向かい話すのが礼儀だとチャンと知ってやがる…

「ホメてくれるのは嬉しいけど、飲み仲間が待ってるんじゃないですか？」

殉が微笑みながら言う。

「そんな事まで“聞く”こたあないぜ」

彼は、殉の持つ特殊な力にはもう慣れていた。照れながら問い返した。

「坊やこそ、こんな時間に何してんだ？ 随分キツイ顔をしてたぜ」

殉の顔から笑みが消える。

「イヤな… 嫌な感じがするんだ。何だか判らないんだけど」

銀さんの表情も曇った。殉の予感はずいと言っている程当たるのを彼は知っていた。

その時だった。

「っ！！」

殉が耳を押さえて蹲った。

「おいっ！ どうした？」

銀さんは慌てて駆け寄った。

「声が…悲鳴が…聴こえる…ヒドい！」

突然の出来事にうろたえながらも、頭を振って苦しむジユンを彼はしっかりと抱きかかえた。

「しっかりしろ！ オイツ！」

「…壊れた…カナちゃんが壊れた…」

小さく痙攣を始めた殉を肩に担ぎ、銀さんは病院に向けとって返した。

必死の形相であつた。

（続く）

第十八章

第十八章

何も見えぬ、聞こえぬ漆黒の路を加夏子は歩いていた。

灯り一つささない。

そのくせ、時々ボウと何かが視界の隅をかすめ消えてゆく。

風景であつたような

人か獣の姿であつたような

恐ろしい孤独が彼女を押し包む。

助けを呼びたくとも、ここには誰も居ない事を彼女は知っていた。
ここは彼女のよく知る場所、永き間つむぎ続けてきた蔦の牢獄だ
つたのだ。

意識する事無く封印してきた忌まわしい記憶、その扉が開かれた
時、加夏子は逃げ出したのだ。

誰も追つてこない、それ故に誰一人居ないこの場所へ。

絶対の安全があつた。

それは同時に完全な孤絶をも意味した。

夢中で心の牢獄に逃げ込んだ彼女がそれを理解するには、その心
は余りに幼く、繊細に過ぎていた。

だれか…

誰かいらないの？

ワタシはここよ

パパ、ママッ！

センセイ、衣笠さん、銀さん！

ジュン！

ケンちゃん！

どうして誰も返事してくれないのっ！！

出して！　ワタシを此処からだしてえー！

.....

叫び声が虚空に木霊する。

正真正銘のひとりぼっちだった。

あてどなく歩き出した。

足許だけが鮮明に見えた。

重く厚く積もった枯葉が、泥田のように続いている。

少しずつ沈み始めていた。

足首から脛、やがて膝までズブズブと枯葉の中に沈み込んでゆく。

もう歩く事すら出来なかった。

やがて胸から首まで埋まってしまうと、自由になることは二つしかなくなった。

見る事と、考える事。

加夏子は必死に思いを巡らせた。

大事な何かをつまく思い出せなかった。思考が定まらない。

.....

人がひとり、こっちに来るのが見えた。
ゆっくりとズームのように、その姿が大きく鮮明になる。

ジュン！

その名前を口にした瞬間、何事も無かったかのように加夏子は路の上に立っていた。

しっかりと堅い路面を、うつ向いて立つ殉に向かって駆け寄った。

ジュン

来てくれたんだね

ワタシ…わたしね…

彼が顔を上げる。

細い目がニヤリと笑った。

あの男の顔をした殉は、絶叫する加夏子をメッタ斬りに刻んでいた…

急遽、病院に搬送された加夏子はICUでの集中監視下にあった。
命の灯が、消えかけていた。

（続く）

第十九章

第十九章

「僕が余計な事を言わなければ、彼女は…」

「いい、済んだ事だ。君は知らなかったんだからな」

「しかし…」

「遅かれ早かれ、カナは思い出さねばならなかったんだ。いつまでも偽りの平穏の中で暮らすのはカナ自身の為にならない、それは判っていた事なんだ」

沈みきつた顔で傍らに立つ憲一を振り返ることもせず、恒彦はICUに横たわる娘の姿を凝視していた。

固く握られた拳がミシミシと音を立てる。

「私は… このままでもいいんじゃないかと何度も思ったよ。加夏子があ的事件を忘れているなら、不自由な軀のままでも、私や紗季子が一生、あの子の支えになってやればそれでいいと… だがな、ひとり生きてゆかねばならないんだ。あの子の一生が終るその日まで、私達が付き添っていてやる訳にはいかないんだよ。いつかは先に逝かねばならないんだ」

ゴンツ！

右の拳がICUのぶ厚いガラスを叩いた。

「それでも、これ程の結果を招くとは…。君の帰国は速水君から聞いて知っていた。止めるべきだった。甘かった…」

後悔と懺悔の入り混じった、血を吐くようなひと言だった。

暫くして医師が一人、ICUから出てきてマスクを外した。

「先生、娘は…」

感情を押し殺した声で、恒彦は医師に尋ねた。

「既に三回、蘇生処置を施しています。残念ですが、この様なケースは現代医学では対処し切れません。最悪の事態も覚悟しておいて下さい」

沈痛そうな顔に、お手上げの四文字を張り付けた医師が告げる。

「オマエ！　それが医者言うセリフかあ！　何とかせんか、娘を助ける！　助けるんだあ！！」

抑えていた感情が一気に爆発した。

絞め殺さんばかりの勢いで恒彦が白衣の襟を絞め上げる。

止めに入った憲一を跳ね飛ばした彼はまさに鬼の形相であった。

ヤメテッ！

うつ向き、待ち合いのソファに座ったままだった紗季子が叫んだ。

「止めてください、アナタ…」

幽鬼のような顔のまま、ジッと恒彦の顔を見る。

彼の動きが止まった。

その時、恒彦の背後から銀さんに支えられた殉が現れた。

「僕に…　ボクにやらせて下さい」

全員が殉を見た。

そうではなかった。

紗季子の虚ろな目が大きく見開かれた。

殉の隣りで、銀さんもまた凍りついたように立ちすくんでいた。

(続
く)

第二十章

第二十章

ベツトに横たわる加夏子。

その横に置かれた椅子に、膝を揃えて背をピンと伸ばした殉が瞑目して座っている。

既に15分が経過していた。

「叔父さん、彼は一体何なんですか？ いきなり現れて“任せてくれ”って… 彼も患者じゃないんですか？ 顔色だって酷く悪いし…」

そう問掛ける憲一自身も、今は藁にもすがりたい気持ちであつた。「医者がさじを投げたんだ、例え死神が目の前に現れて取引しようと言ったとしても、私は受けるさ」

恒彦もまた、憲一と同じような気持ちであつた。困惑した表情の中に、微かな望みにしがみつくと必死さが見え隠れしていた。

「彼は何をしようとしているんだ」

「多分、お嬢さんの心の中に入ろうとしてるんじゃないかと思う」先程から妙に緊張した表情のままの銀さんが答えた。

「そんな事が出来るのかね？ あの半病人のような少年に」

「判らねえ。確かにあの坊やには不思議な力がある。現場で何度もそう感じる場面を目にしてきた。だか死にそうな子を蘇らせたなんて事は無かつた」

「サイコダイブ…か」

憲一が呟いた。

「何だね？ そのサイコなんとかというのは」

「大学で以前、心理学の教授が特殊事例の一つとして講義した事がありました。他人と同調し、そこからなにがしかを引き出す人間

がいる。現象としては様々ですが、彼等の行いを総称して心理潜行、サイコダイブと呼ぶそうです」

「スプーン曲げみたいなもんか」

落胆した様子で恒彦が言った。

「超能力とは違うそうです。その教授が言っていました、ある意味では『常能力』である、と」

「…コーヒー、買ってきますね」

紗季子がゆらりと立ち上がると、精気の無い足取りで自販機コーナーへ歩き出した。

「叔母さん、僕の間も御願ひします」

憲一の声に、彼女は振り返らなかった。

「俺も一度、当直の所へ行きます。清水さん、坊やを…彼を信じて、ここは任せてやって下さい」

一礼すると、銀さんは暗い廊下を歩き去っていった。

残された恒彦と憲一は、ただ祈るしかなかった。

廊下の角を曲がった銀さんの前に、小柄な和服の女性が立っていた。

紗季子だった。

「貴方とこんな所で会うとは思わなかったわ… 久我サン」

「サキ…」

時が、鈍く凍っていた。

(続く)

第二十一章

第二十一章

一分にも満たないであろう時間がまるで永遠に続くかのように、その一角の沈黙は重く息苦しいものであった。

銀さんと紗季子。

どちらも、相手の目を底まで覗き込むように見つめ合ったままジツと動かない。

先に口を開いたのは銀さんだった。

「…元気、だったか？」

紗季子が固い表情のまま微笑む。

「おかげさまで…っていうのはおかしいわね、勝手に居なくなっただけには」

「…」

「6年、かしら」

「7年だ」

「そう」

感心無さげに目をそらすと、ハンドバックから細いメンソールの煙草を取り出し火をつけた。

先程までの脆く崩れ落ちてしまいそうな佇まいの下から、何処か下卑たふてぶてしさのようなものが姿を現していた。

「まだ、タバコ吸ってるのか」

「余計な御世話。7年で、変わるものもあれば変わらないものもあるのよ」

「俺は……」

言い淀む銀さんに構わず、紗季子が言葉を続けた。

「あの日、貴方は死んだと思った。ビールでも買いにいくようにフラリと部屋から出ていって、それっきり。店にも来ない。電話も何も繋がりにやしない。夜が怖かった……真っ暗な部屋で枕を抱えて、帰らないかも知れない男を待つ女の気持ちなんて判らないでしょうね」

フウ……と煙を吐き出す。

「そして翌朝の新聞。『中華街で発砲事件。死者、負傷者合わせて9人』 私がどんな気持ちでそれを読んだか、貴方に判る？」

紗季子の目の光が強くなった。

「俺は確かに死んだよ。今ここに居るのは生まれ変わるか、死にそこないなのか、今も判らねえ」

非常灯が照らす銀さんの横顔には、疲れ切った老人のように深い皺が刻まれていた。

「結婚……したんだな。まさかあの嬢ちゃんの母親がサキだとは思わなかったよ」

「一年も入院してたのに気付かないなんて、おかしい話ね。主人はお店の常連だった。奥さんを病気で無くして……男を無くした私と関係が出来るまで、それ程時間はかからなかった」

短くもない煙草を灰皿に捻り消し、紗季子は背を向けた。

「突然、10歳の子の親になっちゃったのよ、おかしいでしょ？ あの子、とてもいい娘だった。後妻の私を実の親のように慕ってくれた。それなのに……それなのに……どうしてこんな事に……」

ぽっん。

ぽっん、ぽっん。

暗い廊下に、雨粒のような染みがふたつ、みっつ。

気がつくと、銀さんは彼女を背後から抱きしめていた。

大丈夫

大丈夫だって…

（続く）

第二十二章

第二十二章

それは殉にとつても未知の経験だった。

生まれてから今日まで、他人の心の声を遠く近く聴き続けてきた彼ではあったが、そこから一歩進んで心の中にまで入り込もうなどというのは考えた事すら無かった。

彼にとつて心の声とは、いわば通りすがりの道に面した家々から漏れ聞こえてくる団欒や喧騒の音と同じものであった。時に関心を持ち聞き耳を立てる事はあつても、門をくぐり、家の壁や窓に耳を押し当ててむさぼり聞くものでは決して無かった。

ましてやそれ以上の事をすると、もはや敷地に入り込むどころの騒ぎではなく勝手に玄関から奥に上がり込むに等しい。

だが今、彼は加夏子の内なる迷宮を進みつつあった。

遠く離れた加夏子の悲鳴が鮮烈に脳裏に響き渡った時、自分と加夏子が強くシンクロしているという確信が殉の中に芽生えていたのだ。

それが皮肉な運命から生じたものだという自覚は、まだなかったにせよ。

まるで密林だった。

幹の見えぬ程、蔦の絡まり合った木々の密集は、それが加夏子の内面を彼が視覚化したイメージだと判つていても邪魔で、前進を阻む障害物に違いなかった。蔦の棘は、日本刀の切っ先の形をしていた。

背筋に冷たいものを感じながら殉は先を急いだ。

この先にカナちゃんが居る

傷だらけになりながら夢中で蔦の森を進んでゆくうちに、いきなり何も無い空間に出た。

いた

ポツンと独り、加夏子が立っている。学生服が簾のようにズタズタだ。白い肌に張り付いた服の残骸が奇妙なコントラストを描いている。

殉は加夏子の肩を掴むと強く揺さぶった。

「カナちゃん、カナちゃん！僕だ、ジュンだよ、助けに来た、帰るんだ！こんな所にいちゃいけない！！」

加夏子の虚ろな目が落ちる程見開かれる。

「イヤア！もう許して、私を斬らないで！お願いだから来ないでえええ！」

「なに言ってるんだ、僕だよ、ジュンだ、忘れちゃったのか？！」
激しく軀を揺さぶる加夏子を殉は強く抱き締める。

抵抗が止んだ。

血の気が失せた加夏子の腕がゆっくりと持ち上がると、あらぬ方向を指差した。

「アレハ、アナタ」

ゆっくりと顔をあげ、指差す方を見る。

血まみれの刀を持つ長身の男が立っていた。

喉の奥が凍りついた。

兄や？...ユウツト...

(続く)

第二十三章

第二十三章

風などないのに、微かに揺らいているように見えた。

加夏子の記憶が造り出したその男は、

痩せた長身

黒衣

切長の目

酷薄な唇

手に提げた刀

それ以外の細部は全てぼやけ、周囲の闇と交わるかのようにディテールがはつきりしなかった。

時折、男の周囲が光る。

青、赤、黄…

花火のような殺奈の光の中に、幾つもの光景が浮かんで消える。全てが、目の前に立つ男の映像だった。

喉にわだかまる呼気の塊を殉は飲み込んだ。

彼は盲目のままこの世に生を受けた。生身の目で世界を見た事が無いと加夏子に語ったのは嘘ではない。

だが彼は、この世界を全く“視た”事が無い訳ではなかった。ごく稀に、“声”と同じく他人の視覚から情報を得る事があったのだ。

勿論、当たり前前の風景では無い。

自分のものではない目： 他人の意識やその状態： 視覚以外の五感から流れ込んでくる様々な情報： それらが幾重にも重なり混じり合った、歪んだ世界像だ。

何の前触れも無しに頭に浮かぶ世界の姿を、幼い頃から今日まで、彼は嫌悪してきたと言ってもいい。

こんなに醜く歪んだ世界を直視しなくてよい自分の境遇に、密かに感謝すらしていた。

そんな中で、殉が鮮明に覚えている数少ない映像の一つが、唯一の庇護者であった兄の姿だった。

弟に見せるべく、鏡の前に立ち微動だにせず自らを凝視する兄の姿を、彼は尊敬と羨望と共に心の奥深くに刻み込んでいたのだった。

今、目の前に立つ男の姿は、細部こそはつきりしていないものの彼の兄の姿に余りにも酷似していた。

何よりも切長の目に宿る強烈な意思の光が、それが長らく会っていないたった一人の彼の肉親である事を殉に確信させていた。

判らない… あれは確かに兄さんだ
でも… でも…

嘘だ

「兄さんが… 兄さんがカナちゃんをこんな目にあわせたっていうのか… 嘘だっ！」

男が薄く笑う。

それは殉の知る、孤独と慈愛を背負った優しい兄の笑みでは決してなかった。

乾いた、狼の目。

「お前は居ない、此処にも、この外にも！ お前は僕の兄さんなんじゃない！ お前はカナちゃんのなかに潜んで、心を… 魂を食い尽そうとしている… 食人鬼だ！！」

男の姿が一瞬、大きく揺らいだ。

（続く）

第二十四章

第二十四章

消えろ

きえろ！

消えてしまえ

消えろ消えろきえろキエロキエロ、きえてしまえ！！

ロウソクの炎を吹き消すのに似て、殉の思念が男の姿を大きく揺らす。

兄と似たその姿を「嘘だ！」と否定した時、その姿が一瞬揺らいだ。

それで判ったのだ。

ここはカナちゃんの心の中、そして彼女は、無意識にせよ僕がここまで入り込む事を許した。二人の意識が強く同調していなければ、こんな事は出来なかった筈だ。

なら、僕の意識や思考が直接、彼女の意識に影響を与える事も出来るのではないか。

ユラユラと右に左に揺れる男を、殉はありつただけの思念で否定し続けた。

悪夢の形が、陽炎のように薄らいできた。

あと、少し。

ここへたどり着く途中で見た、鳶の模様にしか見えなかった加夏子の断片的な記憶。

それが、これから殉が向かおうとしている場所がどんな所なのか教えてくれた。

ここは恐らく、加夏子にとって最後の避難所だったのだろう。

長い、長い間彼女は、ここへ逃げ込む事でおぞましい過去からの迫害を逃れてきたのだ。

だがその記憶が何かの拍子に戻ってしまい、同時にあの男は、彼女の最も中心となるこの場所に居座ってしまったのだ。

もうここは避難所では無い。

屠殺場だ。

際限無く切り刻まれ、殺され続ける地獄から逃れる為、彼女の肉体は最期的手段… 生命活動の停止を選ぼうとしている。

そんな事はさせない

あと、あと少し…

渾身の念を殉が放つ。

朧になった男の姿が、その力で霧散する。

やった！

…薄明るくなった闇の中、じっと動かない加夏子を抱いて殉は立っていた。

「もう大丈夫。怖いものなんて、もう何もないんだ。帰っておいで。みんな待ってる」

優しい声で、腕の中の加夏子に話しかけた。

身じろぎもしなかった加夏子が、糸に引かれたように顔を上げた。

ゾクツと戦慄が走る。

「イルジャン、ココニ」

加夏子の右手が短刀と化して殉の水月に突き刺さっていた。

「か…カナ…ちゃん？」

気がつくと殉は、黒衣を着て手に刀を提げていた。

「違う… 僕はあいつじゃない！ アイツは僕の兄さんなんかじゃない！ 違う、ちがうんだああ！」

…ヒ、ヒヤ／＼ハハハハハ…

（続く）

第二十五章

第二十五章

安らかな寝顔だった。

あの夜から、もう三日が過ぎていた。

ベットの脇に腰掛けた紗季子は、目を醒まさぬ娘の髪を指で撫でてみた。

艶やかな黒髪が指先をくすぐる。

よく判りもしない原因で死にかかっていたというのに、何をもつて助かったと言えるのか…

峠を越えたようだと言った医師の言葉も、彼女の不安を拭ってはくれなかった。

あの時、加夏子の隣に座り、一心不乱に祈りを捧げる司祭のように全身を汗まみれにして、あげく大量の血を吐いて別の病室に運ばれていった少年がいた。彼が何をしたのか、憲一の説明を聞いたところで紗季子にはよく判らなかった。

判らなかったが…

あの夜、彼が加夏子を瀕死の状態から救ってくれたという事を、紗季子は疑っていなかった。

お願い、目を開けて
力ナ…

髪を撫で続ける紗季子の後ろでドアの開く音がした。

「お嬢さんの様子はいかがですか、清水さん」

看護師が一人、検査セットを手に紗季子の脇へ来た。

「御主人が戻られたら一度、御休みになられた方がいいのでは？
もうずっと付き添っていらっしやいますし、軀がもちませんよ」

「ありがとうございます。私は大丈夫」

そう答えた紗季子の目の下には、ファンデーションでは隠し切れない程ハッキリと隈が出ていた。

疲れ切っている…

しっかりと背筋を張ってはいるが、いつ過労と心労で倒れてもおかしくはないと恵美子は冷静に判断した。

空きのベットがひとつ必要になりそう

点滴のブドウ糖が1パッケージ、いえもう一つ…

私情を押し退ける自分が、恵美子は時々嫌になる。看護師としては有用な資質なのだろう、でもこんな時、励ましてあげるような言葉の一つも掛けてあげたっていいではないかと恵美子と思う。

だが彼女は、それをしなかった。

「無理は禁物ですからね」

殊更に事務的な口調で言い、恵美子は手を伸ばして体温計を差し込もうとした。

その腕を、思いもかけず強い力で紗季子が握った。

「えっ？」

「今、動いた、動いたんです！」

興奮して恵美子の手を握り締める紗季子の後ろで、ゆっくりと加夏子が目を開けた。

アイツ、ヤッツケタ…

声が聞こえた。

（続く）

第二十六章

第二十六章

ゆつたりと広い部屋。総木目張の内装にマホガニーの机と豪華なソファが一組。

相応の金がかかっているのが一目で判る作りだった。

机の向こうから、病院長がまだ若い医師に向かい尋ねた。

「足のほうはマダ駄目なのかね？」

「ええ、言語機能には全く障害は残っていません、テストでの受け答えもすっかりしています。脚部の痛覚検査も低数値ですが正常な反応を見せていますし、医学的な見地からは健康体と言っても差し支え無いと思われませんが…」

「動かん、か」

フウと大きく溜め息をついて、病院長はシガーボックスに手を伸ばし、葉巻を一本取り出すとカッターで吸い口を切りながら言った。

「あの娘の入院も一年を越えた。一定の治療成果を出せたのは喜ばしい事だが、そろそろ次の段階について考えた方が良いのではないかね」

「次の…段階、とは？」

言葉の意図をはかりかねた医師が、困惑気味に病院長に聞き返す。葉巻特有のトロリとした煙を吐き、茫々とした目で病院長が医師を見る。

「外科療法から心理療法に重点を移すという事だよ。精神科の十九君は確か君の同期だったな。今後は彼をあの娘の担当医にしようと思う。ご苦労だったな」

「待つて下さい！」

医師が慌てて病院長の言葉を遮る。

「覚醒後の様子が以前と異なります。どこがどうとは言えないのですが…… 妙に感情の起伏が激しくなったと言うか、攻撃的になったと言うか……」

「だからそういった精神的なケアこそ必要だと言ってるのだ。君は一体、何を聞いていたんだ？ 医学的には健康体だとさっき口にしたのも君じゃないか」

「『見なしでも構わない』と言ったのです。何か見落している可能性もあります。大脳器質の損傷かも知れません。精神科よりも脳神経科に預けるのが先でしょう」

「これは決定事項だ」

「しかし院長……」

「清水氏はこの一年、入院費用の他にも多額の寄付を当病院に寄越してきた。我々としては、氏の期待に沿えるよう最大限の努力をもつて治療にあたらねばならん。心理療法は時間がかかる、早く始めるに越した事はないだろう」

院長室を後にした医師は、白衣のポケットに手をつ突っ込むと長い廊下を歩きだした。

強欲ジジイめ、まだむしり取るつもりだ

あの娘は患者じゃなく金ズルか

彼は擦れ違った恵美子にも気が付かなかった。

（続く）

第二十七章

第二十七章

「何だよ、その辛気臭い顔はあゝ。まあ座れ」

ズイと診察用の椅子が目の前に押し出された。

「お前、判ってるのか？ 今この段階で彼女の主治医になるのが
どういう意味を持つのか……」

「ナニナニ、もしかしてキミ、院長の銭勘定に想いを巡らし
ちゃったりしてる訳かなあ……？？」

腰を下ろそうとした医師はギクリとし、目の前の友人の顔をまじ
まじと見た。

「つたく、お前つて奴は…… スツとぼけているようで、一体いつ
そんな情報を仕込んでくるんだ？」

「だあゝて、そんなの見てれば判るじゃん、心理学引つ張り出す
までもないよあゝ」

まるでベートーベンのようにクシャクシャの頭をボリボリとかい
て、九十九医師は机の上の封筒を指差した。

「こんなのどおゝするのよあゝてカンジ？ 成果があつたつて言
つてもさ、アレじゃん、俺らなんにもしてないのと同じじゃん」

「……なあ長官、前にもお前からアドバイスを貰った事はあつたが、
今の彼女の状態、お前ならどう見る？」

それまではチャラチャラと軽薄な人物に見えていた九十九が、カ
ルテを手にした途端、別人に変貌した。

黒縁のメガネの奥から鋭い眼光が溢れ出し、顔付きも厳しくなる。

納豆が一流フランス料理にいきなり変身したかのようであった。

「この所見が正確だとして、自閉症ライクな状態から長時間のコーマ（昏睡状態）を経て到った現状は、統合失調症のクランケに見られる症状によく似ている」

検査結果の報告書をめくる手が忙しく左右に動く。

「統合失調症の原因が様々なのは君も知つての通りだ、多くは精神疾患だが、極く希に肉体的欠陥に起因するものがある。君が危惧しているのはそのケースだろう」

バサリと書類を机に投げ出し、彼は医師に向き直った。

「自閉症から統合失調症への移行、か。考え難いケースだ」

「だがな長官」

「いい加減、そのアダナは止めてくれないか。五十六なんて名前、頼んでつけてもらった訳じゃない」

父親が旧日本帝国海軍ファンで、子供にまで司令長官の名前をつけたという話を学生時代、彼は九十九から散々聞かされていた。

それで、ついたアダナが『長官』。

「今から診察に行く。自分の目で確かめたい」

険しい表情のままで、九十九が椅子から立ち上がった。

（続く）

第二十八章

第二十八章

二人が病室に入ると、少女の髪をとかしていた看護師が気配に気付いて振り返った。

「あら先生、診察には少し早いではありませんか？九十九先生まで御一緒なんて……」

衣笠恵美子が若い医師を少しだけ睨むように見ながら言った。

「キヌ……いやエミ……あ、いや衣笠君、今日から清水さんの主治医は彼が務める事になった。しっかりサポートしてくれたまえ」

わざとらしく咳払いをして、彼は傍らに立つ九十九を紹介した。

「確か先生は精神科……では、今後はメンタルケアが主体になるのですか？彼女にはまだフィジカルケアの方が多く必要だと思うのですが」

「エ……ミちゃん！そんなに堅苦しく考えちゃだめだって、リハビリはこれまで通りやってくからさあ……、よろしく頼むよ」

「コラッ、九十九！少しは場所つてものをわきまえる、患者の前だぞ！」

「ハイハイ、気をつけますよ」

漂々とした足取りで病室の窓際まで進むと、どこかおどけたステップでクルリと振り向いた九十九が、背を向け続けていた加夏子の顔を正面から覗き込んだ。

「君がウワサのお姫サマかい？」

うつ向いて髪をとかせるに任せていた加夏子がゆっくりと顔をあげた。

「…清水 加夏子です…」

しつかりとした口調。

険のある、だがどこか戸惑いを含んだ端正な顔。
瞬かない瞳。

九十九が加夏子を凝視する。

一秒の何分の一に満たない時間、二人の対峙は病室の空気を凍り
つかせた。

「…ウン、なかなかの美人ちゃんだな。僕が今日から君の担当だ。
ヨロシクねっ」

軽く加夏子の肩を叩いて車椅子の脇をすり抜ける。

先程かいま見せた緊張はみじんも感じさせなかった。

「かるいヒト…でも嘘。心の中にメスを持ってる。ワタシ嘘つき
は嫌い」

加夏子が言った。

病室の入口で、九十九が足を停めた。

暫くの間じつと立っていると、背を向けたまま彼は加夏子に言っ
た。

「長官と呼んでくれ。長い付き合いの者は皆、僕をそう呼んでい
る」

若い医師が顔をしかめた。

「長官？」

加夏子も首を傾げて聞き返す。

「君とは長い付き合いになりそうだからね、じゃ」

そのまま九十九は病室を後にした。

真剣勝負になるな…

九十九はもう笑ってはいなかった。

（続く）

第二十九章

第二十九章

今日のリハビリも終わった
いつもと変わらず、滞り無く

清水加夏子のリハビリメニューは今まで通りに続けていた
主治医が変わろうが、物理療法を続ける限り俺達トレーナーの役
割は何も変わらない

変わったのはあの娘だ

口をきけるようになったのは結構な事なのだが、まるで何かが抜
け落ちてしまったかのように、虚ろでいる時間が増えた感じがする
聞かれた事にはちゃんと返事もするし、メニューも以前より積極
的にこなしているように見える、見掛け上は

だが何故か手応えを感じない

口もきけず、一見して無表情・無感動だった頃の方が、拒否にせ
よ諦めにせよ内面の葛藤って奴をどこかに感じとる事が出来た
それが今じゃ、まるでじゃじゃ馬がイイコちゃんを装って周囲を
欺いているかのような印象ばかりが強い

いや、それも違う

悪意や作為は感じられない
強いて言うなら…

目が、冷めているのだ

まるで何もかもお見通しだと言わんばかりの、冷たくて乾いた目
そして時折見せる、年齢に不相応な虚ろな表情…

あの娘はあんなじゃなかった筈だ。一体、何がどうなっちまったんだ

それとも、変わっちまったのは俺の方なのか…

トレーニング室の器具を片付けながら、銀さんは物想いに耽っていた。

仲間のトレーナー達は、珍しく寡黙な彼を気遣ったのか、パラパラと声を掛け、そっとその場を後にしていた。

あの晩、俺は紗季子を抱き締めた

見ちゃいらなかった。あの気丈な紗季子があんなに泣いて、今にもポツキリと折れてしまいそうで、そうせずにはいらなかった抑え、隠し続けてきた色々な想いが、あの晩を境にして俺の中に帰ってきてしまったような気がする

だがアイツは、今じゃ他人の女房だ

そして俺には、アイツに想いを抱く資格は無い

あの娘… 加夏子の視線に、俺は自分の中身を見抜かれているような気分になっちまったんじゃないか
それで変だなんて感じたんじゃないのか

マットの上にあぐらをかいて、銀さんはとめどなく考え続けた。

「聞こえましたよ、銀さんの声。酷く悲しそうだった」

「もういいのか？」

「ええ。どうにか、ね」

少しやつれ、寂し気に微笑んだ殉の姿が、いつの間にか戸口の脇にあった。

(続
く)

第三十章

第三十章

ひとしきり強く吹いた冷たい風が、まだ幾らかは残っていた木々の葉を散らす。

斜めに降りしきる赤茶色の落葉が、車椅子の少女を覆い包んでいた。

薄い毛布のかかった膝には詩集が一冊。

ページは閉じられたままだ。

彼女の目もまた開く気配は無かった。

舞い散る落葉以外、静止した世界に足を踏み入れてくる者がいた。

「ヤア」

穏やかな声に、微かな緊張が隠れている。

「なんだか、ひさしぶりに会ったみたいだな。おかしいよね、ずっとおなじ病院に居るのにさ」

劇場の幕があくように、少女の瞳がゆっくりと開いた。

詩集の上に重ねられていた両の手がスウーと車椅子のホイールにかかる、落葉を踏む音も立てぬかのように、ゆるりと彼のほうへ向きを変えた。

「…ひさしぶりよ、殉君。ここであなたと会うのは」

少女… 清水加夏子が低く答える。

「……………」

言葉は、そこで途切れてしまう。

向かい合ったまま、気まずさとも緊張ともつかぬ時間が流れていた。

風がまたひとつ、二人の間を抜けてゆく。

「ワタシ知ってる。あの夜、あなたがワタシを助けてくれたこと。良くは覚えていないけど、たぶんワタシ死んでた、あなたが来なかったら。感謝してる」

淡々と、事実だけを読みあげるように加夏子が言った。

「感謝だなんて」

殉は何と言っていていいか判らなかった。

加夏子は変わってしまった。

それは判っていた事だったが、改めて触れる現実は止めどない脱力感を殉にもたらした。

「ステキな声だ。初めて聞いたよ、カナちゃんの声。やっぱり耳で聴く声はいいな、ボクは……」

「信じられない、あなたが」

会話を繋ごうとする殉の言葉を、加夏子は断固とした口調で遮った。

「あなたは隠している。多分、ワタシをこんな目に合わせたあの男と、あなたは関係がある。それだけはハッキリ判る、覚えていなくても判る」

「カナちゃん」

「お願い、もう気安く呼ばないで。私も辛い、でも……でも……」

駄目なの！ 私の中の何かがあなたを拒むの！ 近寄るなって叫ぶのよ！ だから来ないでっ……！」

「カナちゃん!!」

殉は思わず加夏子の肩を掴んだ。
その時…

「…ッルセエ、殺すぞこの糞ガキいゝ!」

変貌は一瞬だった。

(続く)

第三十一章

第三十一章

殉は自分の耳を疑った。

加夏子の口から、こんな下品で強烈な言葉が発せられた事が俄かには信じられなかった。

彼の目がもし見えていたなら、現実には更に過酷なものであつたろう。

つぶらな瞳は裂けるが如く釣り上がり、半開きの口からは牙が生えているかのように歯がゾロリと覗いている。

目尻や口許には老婆のような皺が幾本も走り、涎まで垂らしていた。

赤味ひとつ差さない顔の白さだけが、残された彼女の痕跡だった。

耳障りな高音の叫びを喉から噴き上げ、加夏子が殉の襟首を下からわし掴みにした。

「なっ!？」

そのまま引き寄せ、顎に額を思い切り打ちつけた。

もんどりうつて吹き飛んだ彼を血走った双眼が見下ろす。

パツクリと切れた額からダラダラと血が流れていた。

仰向けに倒れていた殉がノロノロと身をよじり、落葉だらけになりながら手と膝で軀を起こした。

「……どう……して……？」

何が起こったか理解出来ぬまま、彼の手はガサガサと落葉の中を

掻き回した。

コ・レ・カ・イ・？

いつの間にか殉に手の届く所まで車椅子を動かしていた加夏子が、右手の白く長い棒をヒラヒラと振ってみせた。

殉の杖だった。

ビシッ！！

足許に蹲る殉へ向け、頭といわず躰といわず杖を降り下ろす。

狂ったように何度も何度も杖を叩きつける加夏子の目には、異常な光が爛々と灯っていた。

折り畳む事を前提に作られた盲人用の杖は加夏子の猛打にも折れず、かえって鞭のように殉の躰に食い込み、無数の打撲痕を刻んでゆく。

「やめて、止めるんだカナちゃん！　こんな…どうしちゃったんだっ！？」

遂に杖の先端が砕け散った時、殉の右手がガシッと白い凶器を掴んだ。

涎を撒き散らしながら、加夏子はその手に噛みつく。

ブシュ

くぐもった噴射音が聞こえると同時に、白眼を剥いた加夏子が車椅子に倒れ込んだ。

「エクソシストの時間は終了だよ、お姫サマ」

片手に高圧噴射式の注射器を提げた医師が、車椅子の背後に立つ

ていた。

「…だれ？」

「大変だったね、堀川くん。だいじょうぶかい？」

医師は殉に、精神科の九十九だと名乗った。

（続く）

第三十二章

第三十二章

グッタリと車椅子の背に身を預けた加夏子が運ばれてきた時、恵美子は丁度ベットを整えている所であった。

「カナちゃん……」

振り向いた恵美子が言葉を詰まらせる。

「だあゝいじょうぶだって、少しヤンチャが過ぎてたんで、コレでオネンネしてもらったただだから」

九十九は白衣のポケットから拳銃型の注射器を取り出して、フウフウと息をかけた。

「また医局に内緒で持ち出しましたね、鎮静剤は麻薬扱いなんですよ！ いい加減ちゃんと申請して頂けませんか？」

怖い目で恵美子が睨む。

「だあゝってさあゝ、ウチの病院ってメンドクサイじゃん、そういう手続きっていろいろさゝ」

「どこも同じデス」

だらしなくモジモジする九十九の姿はユーモラスを通り越し滑稽ですらあったが、恵美子は堅い表情を崩さなかった。

「兎に角、この娘をベットへ」

しぶしぶ恵美子に協力して加夏子をベットに移す九十九の動きを観るともなく恵美子は観察した。

見事だった。

抱え方。

恵美子とのタイミングの合わせ方。

横たえる際の細心の心配り。

なまなかの看護師では及ばぬ程の繊細な動きが、ダラけた所作に隠れていた。

「ホヘエ、ケツコウ重いな。ウチのお姫サマは……」
相変わらずおどけた顔をして九十九が言う。

このヒト、どういう人なんだ……

じつと睨んで動かない恵美子に気付いた九十九が声を発した。

「どしたのぉ？ エミちゃん、顔がコワイねえ」

「…注射器の事は伏せておきます」

「そりやドモ」

大袈裟に両手を広げてみせる。

「ここ暫く、先生の機転で力ナちゃんの感情の爆発から難を逃れた看護師は何人も居ます。彼女が統合失調症のような症状をみせているのは、私達の間では有名な話です」

「ホウ……」

九十九が目を細めた。

「だから、先生のなさっている事をとやかく言つつもりはありません、ただ……」

「ただ？」

「貴方の考えている事が判りません。一体、この娘を使って何をしようとしているのですか？」

普段は冷静な恵美子の声が大きくなる。

九十九が、不意にニヤリと笑った。

怖い…

首筋に鳥肌がたつのを、恵美子は抑えられなかった。

（続く）

第三十三章

第三十三章

「先生はそうやって、鎮静剤で彼女を抑えるだけ。少なくとも今まで」

首筋を伝う寒々しさを押し退け恵美子が問う。

「で？」

九十九が問い返す。

「具体的な治療はいつ始められるのでしょうか。プランについて口出し出来る立場ではないのは判っています。しかし此れでは、この娘はまるで晒しものではありませんか？ 勝手気ままに暴走を繰り返し、それ以外の時は冷たく醒めた目で他人を見透かす。この娘は本来、そんな人間ではありません。以前、感情的になって私に食事のトレイをぶつけた時だって、運悪く切れてしまった私の額の傷を見て蒼くなっていた位なのですから」

「…治療ならもう始まつてるよ」

「エッ？」

「何故、彼女は唐突に狂暴な振る舞いをするようになったと思う？」

「それは… やはりあの晩、この娘を変えてしまうような何かがあつて…」

恵美子が言葉を濁す。

「棚上げにお手挙げ。僕達の置かれた状況さ。判るかい？」

「ハア…」

とつさに言葉が見付からず、恵美子は曖昧な返事を返した。九十九の言っている意味がよく判らなかった。

「痛覚検査の結果を知ってるかい？ 足だけでなく腕や躰の一部にも行われているんだが、パスこそしているものの結果は全て最低値を示していたよ」

手近にあったパイプ椅子を引き寄せ、背もたれに両肘を置いて、九十九は恵美子と向かい合った。

「これが何を意味するか、エミちゃんに判るかい？」

「判りません」

一見、こちらを小馬鹿にしたような態度に内心、腹を立てながら恵美子は答えた。

何やら納得したような口調で九十九が断言した。

「情緒麻痺だよ。しかも飛びきり歪な形の、な」

人間はねえ……と、九十九が続ける。

大きな衝撃や外的なトラウマを受けると、心の働きを自動的に抑え込む事でダメージを避けるのさと、教師のようなもの言いと目前の恵美子に言って聞かせた。

本来は情動そのものを抑制しダメージの蓄積を回避するのが情緒麻痺の筈なのに、患者がこれ程の凶暴性を示すというのは、暴れる事自体が患者自身を守っているという事に他ならないのだ……と。

「外見では判らない。唯一、判断する方法は痛覚検査だけだ。情緒麻痺に陥った人間は痛みに対して極端に鈍感になる。思い当たるフシがあるんじゃないかい」

そう言えば、あれ程注射を嫌っていた加夏子が、最近は顔色一つ変えずにそれを受けるさまに酷い違和感を覚えた事があった。

「だとしても、それが先生の治療とどう関係あるのですか？」

挑みかかるように、恵美子も九十九の顔を覗き込んだ。

(続
く)

第三十四章

第三十四章

中庭に置かれたベンチに腰を降ろし、恵美子は足許の落葉を靴の先で軽くつついてみた。

乾いた音を立て、枯葉が形を崩す。

戸惑いと、それとは別の感情が彼女の中で複雑に絡みあっていた。九十九との会話が耳から離れない。

「統合失調症と判断しがちな彼女の症状は、フェイクだ」

「フェイク？」

「我々を袋小路に誘い込む罠さ。勿論、あのお姫サマが意図的にやっているという意味じゃあない。こっちが勝手にミスジャッジを下しているに過ぎないんだがね」

パイプ椅子を木馬のように前後に揺すりながら、九十九はまるで恵美子を説得でもするかのように熱の籠った口調で言葉を続けた。

「ある日突然、訳も判らずこうなってしまったんじゃない。少なくとも始まりはハッキリしている…あの夜、だ。そしてそれに関わった人間…」

九十九が指を一つ立て、ユツクリと恵美子に向ける。

「ワタシ？」

「まゝさかあゝ、でもエミちゃんには判ってるんじゃない？」

いきなり調に戻った九十九が崩れた笑顔で笑った。

「君は知ってるよね？ それが何か…誰なのかを」

九十九の顔の中で、目だけが全く笑っていないかった。

そう… ワタシは知ってる…
でもそれを口にする事は出来なかった。

返答をしない恵美子に九十九は告げた。

「『棚上げ』というのはね、彼女があ之夜、心的なショックから自らの心を封じた事を言ってるんだ。僕らはそれを診ながらお手拳げ…滑稽だと思わないかい？ エミちゃん」

「…」

「人の心は容易に正体を見せない。誰もが、自分を隠す事については巧まざる一流詐欺師なんだよ。だが僕は騙せない。全ての鍵を握るのはあの少年だ、違うかい？」

「……」

「彼女を野放しにしてるのは、奇形化したトラウマが噴出するに任せて、心理的な障壁の弱まる時期を待ってるからさ。ガードが下がった頃を見計らい、彼を彼女にぶつける。面白いものが見られるかも知れないよ」

「先生… 先生はまるでゲームでも楽しんでおられるようですね。それは医師として、あつてはならない姿勢ではないですか！」

烈しく反論する恵美子に、九十九は言つてのけた。
仕事を楽しんで何が悪いんだい、と。

「医者だね… 仕事を趣味にしてもいいんだよ」

（続く）

第三十五章

第三十五章

「…趣味、ですって？」

恵美子は耳を疑った。

「それじゃ先生は、彼女を趣味で治療してると言うのですか！
自分の利益だけ考えて主治医を引き受けたとおっしゃるのですか？
！？」

椅子を揺らすのを止め、九十九がユラリと立ち上がる。

ゆつくりと両手を白衣のポケットに入れた彼は、もう欠片も笑っていなかった。

「許されるんだよ、衣笠くん。それが患者の利害と一致する場合は、ね。長い長い医療の歴史がそれを証明している」

厳かに、だが少しの人間味も見せず九十九は恵美子に宣告した。

「今はまだその時期では無い。今日の有り様を見れば明白だ。衣笠くん、君には大事な役を演じてもらう。二人を監視し、来るべき日まで二人を引き離し、その時が来たら接触させる。二人きりでだ」

瞬きもせず恵美子の目を覗き込んで喋る九十九の前に、彼女は射すくめられた蛙のように身動きがとれなかった。

へビに睨まれた蛙…

いや、九十九はまるでメフィストフェレスのようだ

地獄の知恵を授ける悪魔の王…

「ど、どうしてワタシが?...」

唾を飲み込もうとしたが、口の中がカラカラに乾いていた。

「キミも知りたいんだろ？ あの子の『力の秘密』を。もしかすると君の恋人も回復する望みがあるかも知れないからねえ」

九十九が唇の両端を引き上げてニイ〜と笑う。

V字を描く悪魔の笑みだった。

今度こそ恵美子は驚愕した。

どうして...？

「君の経歴はとくに調査済みだ。君がどうして看護師を志したか、どうやって彼女の担当になったか。そして彼... 堀川殉の能力に尋常でない興味をしめすのか。助けたいんだろ？ 若年性アルツハイマーの彼氏を」

全てを見抜かれていた恵美子には、九十九の申し出を受け入れるしか残された道は無かった。

ベンチに座ったまま、恵美子は空を仰いだ。

寒さの強い冬の空は、雲一つなく澄み渡っている。

「こんな所でたそがれてるなんて、らしくないぜ、エミちゃん」

聞き慣れた声がすぐ近くから響いた。

視線を下ろした恵美子の目に、見慣れた男の姿が映った。

「銀...さん...」

立ち上がった恵美子は、銀さんに抱きつくと人目もはばからず泣き始めた。

まるで幼ない子供のように。

（続く）

第三十六章

第三十六章

恵美子が九十九の言葉に従うと決めた日から一ヶ月が過ぎた。

清水加夏子と堀川殉、二人が近付く事のないよう病院内での患者の動きをそれとなく見張り、常に距離を保たせる。

広い施設とは言え、限られた範囲でそれを実行するには恵美子一人では難しかった。

あの日、ひとしきり泣きじゃくった彼女は、事情を話して銀さんに協力を頼んだのだった。

「…気が乗らねえよ、いくらエミちゃんの頼みでも、そいつあちヨットなあ…」

「駄目、ですか？」

泣き腫らした目で恵美子が銀さんを見上げた。

「そんな目で見るなって。ただでさえこんな所でオイオイ泣かれて抱きつかれて、オマケにそんなすがりつく目で御願いなんかされてるのを誰かが見たら、絶対にオレたち何かあったんじゃないかって誤解されちまうじゃないか」

むず痒い顔をして銀さんが言った。

「意外だな、銀さんってそんな事、あんまり気にしないかと思ってた。私、無理な御願いしてるって判ってます。でも、こんなこと話せるの銀さんしか居なくって」

「そりゃあな、『患者を見張れ、気付かれないように隔離？しろ』なんて、エミちゃんにしたら嫌だったろうよ。いつも誰に対し

ても一所懸命だからな。治療の為とはいえ、九十九先生も酷な事を言いつけやがる」

恵美子は全てを打ち明けた訳ではなかった。

この密約に、彼女自身の意志もまた加わっている事を。そしてそれが、看護師としての矜持と責めぎ合っている事を。

「気は進まねえ、進まねえが… 今日のような出来事がこの先も続くなら、さしもの王子サマただでは済むまい。それでも諦めるような奴じゃないし。ここは先生の言う通りにするべきなのかも知れないな」

ハアとひとつ溜め息をつき、銀さんは恵美子の肩をポンと叩いた。「協力するよ。どれだけの事が出来るかは判らんがね」

「…アリガトウ、銀さん」

両手を揃え、恵美子は深々と頭を下げた。

よせやいと頭を掻いて、銀さんがヒラヒラと手を振りながら言った。

自分も正直、あの子たちとどう接していいのか判らないんだと。

クリスマスも近くなったそんなある日、小児病棟に入院してきた少女がいた。

この子の存在が、凍りついた殉と加夏子の歯車を再び回し始めるとは、まだ誰も気付いていなかった。

（続く）

第三十七章

第三十七章

年が暮れ、年が明けた。

清水加夏子は、彼女を取り巻く環境ともども何一つ変わらぬまま、冷たい春のただ中に居た。

相変わらず突発的な暴力を振るう彼女を医者も看護師も忌避し、今では誰も積極的に接触を持つとはしない。

主治医の九十九と担当看護師の恵美子、そしてリハビリトレーナーの銀さんだけが彼女と接し続けていた。

それぞれが異なる動機から… 異なる思惑から…
彼らに共通しているのは、

それが加夏子の為でなく、自分の、もしくは自分の大事な人間の為に行動している

それだけ。

加夏子は孤立無縁だった。

例えばそれが、自ら招いた事態であつたとしても。

「フウ〜…」

夕日が朱々と染め上げた病院の中庭、人影の途絶えたエントランス脇のベンチに長々と軀を伸ばした銀さんは煙草の煙を夕暮れの空に向かって吹き上げた。

ここ暫くの間に、澱のような疲労が軀の底に溜まってきているのを感じていた。

こんな事をしているからだ、茜空にボヤクかのように銀さんはひとりごちた。

恵美子の涙にほだされて、加夏子と殉をさりげなく遠ざけるよう腐心しながら今日まで来たが、これが本当に治療になっているのだろうか？

殉だって馬鹿ではない。ましてやあの子には他人の心の声を聞き取る特別な力がある。俺達の考えている事など、とうの昔に知っているだろう。

それでも尚、アイツはあのお嬢に自分が何をしてやれるのかを必死で探していやがるんだ。

俺は何をしている？

何をしてやれる？

わからねえよ

袋小路だ

萎え切った心を抱えた銀さんには、今の状況と自分自身を呪うしか術が無かった。

九十九… あの時、いったい何を企んでやがる…

その時、唄が聞こえてきた。

わらべ唄だった。

とろりやんせ とろりやんせ…

ベンチから身を起こした銀さんの目に、小さな女の子の姿が映った。

毬の替わりだろうか、サッカーボールを右手でつく少女の影が長く長く伸びている。

左手の袖には中身が無い。

去年、入院してきた娘だった。

名前は確か…

「みーちゃん」

銀さんはその子の呼び名を口にした。

無心にサッカーボールをついていた少女がこちらを向くと、満面の笑みで応える。

勘のいい子だ、もしかするとこの子も。

そんな事を考えながら、銀さんはベンチから身を起こした。

（続く）

第三十八章

第三十八章

「こんにちは、おじちゃん」

歩いてくる銀さんに、少女はペコリと頭を下げた。

「もう暗くなるぞ、そろそろ病室に帰らなきゃなあ」

「でも、もうちよつとだけ… 一緒にやろうよ」

銀さんの頬が崩れた。

「あのなあ、日が暮れると怖あゝい鬼がうるつきだすんだぞ。俺はまだ鬼に食われたくねえよ」

ガシガシとショートカットの頭を乱暴に撫でる。

「へいきだよ、ウチ、ひとより食べるとこ少ないモン」

銀さんの手が止まった。

「ねえ遊ぼう、もうチヨットだけ。ネッ」

銀さんの戸惑いを、少女の無邪気な笑顔が遮る。

「……よし、遊ぶか」

「やったあ!!」

「いいか、チヨットだけだからな」

「うんっ」

器用に片腕でボールを拾う姿を眺めながら、銀さんは少女がここへ来た時の事を思い出していた。

名前は佐野 碧。

確か10歳くらいだったか。

小学校4年生だと聞いていたから、それ位であろう。随分、回復

したものだ。

年の瀬も近い都心の私鉄線で昨年起こった大規模な脱線・転覆事故。

死者約130名、重軽傷者300名以上という大事故の、彼女は被災者の一人だった。

頭部打撲、片腕切断の重傷患者として救急搬送されてきたのだったが、助からなかった被災者も数多くいた。

この娘はまだ運がいい方だ、腕一本無くすだけで済んだのだから…

彼が直接関わったのは僅かな時間でしかなかったのだが、気にかけていた時間はそれよりも多かった。

両親は二人とも、その時に亡くなっている。

こんな小さな子がこれから、たった一人でどうやって生きてゆくのだろうか…

その時、彼は街灯の下にたたずむ人影に気がついた。
暴れ出す前の、アノ怖い顔をした…加夏子だった。

マズイぞ…

「みーちゃん、戻る時間だ」

「えゝもうゝ」

「ホラ、あのおねえちゃん怖い顔してるだろう？ 約束守らない悪い子がいるとね、あのおねえちゃん、ホントに鬼みたいに怒っちゃうんだぞ」

碧がくるりと振り向き加夏子を見る。

不思議そうな顔で言った。

「…あのおねえちゃん…泣いてる…」

銀さんはギクリと身を強ばらせた。

（続く）

第三十九章

第三十九章

「泣いて…いるって？」

半端な中腰のまま、銀さんは加夏子の姿に釘づけとなっていた。

背を伸ばし、ジッとこちらを見つめている加夏子の額には、深い一筋の皺が刻まれている。

険を宿す眼差し。

両の手がゆつくりと車椅子のホイールを回す。

狂的な力を秘めているとはいえ所詮は女の子の腕力、暴れたとしても抑え込めない事はない。

今までも何度か、彼女の暴発を止めた事はあった。

でも銀さんは、加夏子にこれ以上騒ぎを起こして欲しくはなかったし、何より彼女のあんな姿を見たくはなかったのだ。

だが今、碧が言った『泣いている』とは一体…

ゆつくりと、車椅子が二人の方へ近寄る。

銀さんは加夏子の視界から碧を覆い隠すようにして二人の間に立ちただかった。

「よう、詩集を読むにはチト遅い時間だな、嬢ちゃん」

「…こんばんは、久我さん」

加夏子の口調が、あの夜の紗季子…加夏子の母親のそれに酷似しているような気がして、銀さんは言葉が続かなくなってしまった。彼女が知る筈の無い、彼と彼女の母親の過去を見透かされたような、そんな気分になってしまったのだ。

ワタシは知ってるの
あなたが隠していること
あなたがやってきたこと
何もかも

考え過ぎだとは判っていたが…
瞬かぬ眼差しを受け、額から汗が浮き出るのを感じていた。

「こんな時間に、そんな怪我人を遊ばせておいていいのかしら？」
「……………」

「いい加減ね、あなたも。この病院も。胸が悪くなる」
「おねえちゃん、おじちゃんを叱らないで。ウチが遊ぼっていったんだよ」

碧が銀さんの後ろから顔を覗かせて言った。
加夏子の目がつり上がる。

「ガキは黙ってる！」

いきなり膝の詩集を投げつけた。
凄まじい勢いで宙を飛んだ詩集は銀さんに命中し、バラバラにちぎれ飛んだ。

「おいっ、よせ！」

銀さんが加夏子を押さえつけようとした時だった。

「おねえちゃんだって、あんな暗い所でエンエン泣いてたじゃん！
おとなのくせにカッコわるいよ！　ウチちゃんと聞こえたんだからね！！」

「ワタシが…泣いて…？」

加夏子の動きが止まった。

(続
く)

第四十章

第四十章

私が、泣いてた？

「そうだよ、ウチ聞こえたもん」

銀さんの後ろに隠れたままの碧が言う。

「うるさい位えゝんえゝんで、すごく気になったよ」

「嘘よ」

「ホントだもん」

「うそっ！」

「ホントだもんっ！！」

むきになって碧にくっつかかる加夏子。

これまたむきになって言い返す碧。

妙な展開に、銀さん一人が置いてけぼりとなっていた。二人の女の子に挟まれた形の彼は、出した手のやり場に困ったあげく、両手で頭をかきながら顔をしかめる位しかやる事がなかった。

どうなってるんだい、こりゃあ

だが彼は二人の間を離れなかった。

確かに、先程の殺気じみた険しさは加夏子の表情から消えていた。今はそう…まるで姉妹の口喧嘩といったところであろうか。

油断は出来ない。いつまた彼女が爆発するか、彼女自身ですら判りはしないのだ。それでも、銀さんは加夏子の様子が今までと何か違うようで、それが何処とはなく好ましいと感じ、二人が喚き合う

に任せておいたのだった。

そういえば、前はよくあの坊やと一緒にいる時、こんな風にふくれっ面になったりしてたよな…

殉の事に思い当たった瞬間、目の前の光景に寸時忘れていた疑問が再び銀さんの脳裏に浮かび上がった。

聞こえた…って、言ってたよな？

俺には何にも聞こえなかったぞ

あの時、加夏子はキレそうな顔でジッとこちらを見ていた。俺も気が付いたが…

泣いてたって？

声ひとつあげていなかったぜ

もしかして、この娘…本当に…

「なによこのコ！ もうっ！」

「へーんだ、イジっぱり！」

「なんですって!？」

いつの間にか銀さんの前に回り込んでいた碧に向かい、加夏子が勢いよく右手を振り上げた。

しまった！

ぺしっ。

加夏子の掌が、髪がめくれた碧のおでこを弾いた。

「なまいき言うつ子はおしおきだからねっ」

「いったあ…」

大袈裟に額を両手で押さえてみせた碧が、指の間から加夏子を覗いてペロリと舌を出す。

つられて加夏子が微笑み、やがて声を上げて笑いだした。碧もケラケラと笑い出す。

加夏子が笑っている…

痺れるような想いで銀さんは彼女の声を聴いた。
銀さんが初めて聞く、加夏子の笑い声だった。

（続く）

第四十一章

第四十一章

「笑っていた？ 彼女が」

「はい」

デスクに向かい忙しくカルテに目を通していた九十九医師が椅子ごと恵美子に振り返った。

思い切り背中を丸め、猫科の動物のように恵美子の顔を視線で舐めあげる。

嫌悪感が蟻の大群となって背筋を這い上ってくるのを感じ、恵美子は小さく身震いをした。

「フフウーン…なかなか面白い。子供、か。そう来たか」

ネットリと笑う九十九の顔は、恵美子でなくとも酷くいやらしいと感じたであろう。

「やけに楽しそうですね、先生。子供との交流が心を開くきっかけになるなんて、ありふれた話なのではないですか？」

皮肉を込めて恵美子は聞いた。

「ありふれた経緯じゃつまあゝんないかな、エミちゃんはさあゝ」

黄色がかった眼球が容赦無く視線をまわりつかせてくる。何となく変質者じみていた。

「そんなつもりじゃ…」

「まあいいって、君が感心あるのはあの娘じゃなくって、彼女のボーイフレンドの方なんだからさあ」

恵美子は顔が怒気をはらむのを感じた。

看護師としての彼女のプライドは、九十九の一言で酷く傷付けられ怒りを感じていた。

だがその指摘は正しかった。

「それにしても早かったな」

「何が、ですか」

「ガードを下げ始める時期がだよ、決まってるじゃん！」

まだ判っていないのかと言わんばかりの九十九の言い種であった。

清水加夏子が自ら封印した心：九十九は『棚上げ』と表現していた：を再び開け放つそのタイミングを、彼と恵美子は息を殺すように待ち続けてきたのだ。

納得出来ない点はあるが、チャンスだ

もう少し様子を見て、アレを仕掛けてみよう

九十九の目の澱みが硬玉の鋭い光に変わる。

猫から虎へ。

獲物を得た虎の目：

ゴクリと唾を飲み、恵美子が頷く。

彼女もまた、自分の成すべき事を想い描いていた。

（続く）

第四十二章

第四十二章

銀さんの“声”が聞こえた。

昼休み

病院裏の雑木林

通用口から小道が続いてる

話したい事があるんだ

来てくれ

ここは小児病棟。

トレーニング室は敷地の反対側にある。銀さんはそこに居る筈だ。随分と離れているが、殉の能力を知った上で、よほど強く“叫んで”いるようであつた。繰り返し繰り返し、野太いダミ声が殉の脳裏に響き渡る。

こちらから返事は出来ないから仕方ない事ではあるが、幾度も続く木霊のような声に、彼は少し閉口していた。

トランシーバーじゃないんだから、後で話しに来てくれればいいのに…

ひとしきり“声”は続き、やがてピタリと聞こえなくなった。

後にはノイズのような種々雑多な呟きが聞こえてくるだけ。

他愛ないお喋りを続ける殉の顔に、僅かな憂いの表情が浮かんできたのに気付く子供はいなかった。

普通じゃなかった、さっきの“声”は

訴えるような…誰にも聞かれないような…切実な想いに彩られた“声”

何かあったんだ、きっと

殉は抱えていた子供をそつと降ろすと、ちよつとだけ微笑んで病室を出ようとした。

その時だった。

「（おじちゃん、おにいちゃんを呼んでたんだよ！ あんなにおっきな声で！ 聞こえてたんでしょ？ おにいちゃんの声もちゃんと聞こえたもん！）」

女の子の声がキンキンと頭の中に鳴り響いた。

ドキリとして思わず振り返る。盲目の殉にはその子の顔など判る筈も無いのだが、反射的に振り返ってしまったのだ。

「ウチだよ。おにいちゃん」

今度は生身の声が聞こえた。

下の方から、柔らかな小さい手が殉の右手を引っ張った。

「君は…」

「やだなあ、さっき一緒に折り紙したよ」

「確か…碧…ちゃん？」

「うん、みーちゃん দিয়েよ」

少しずつ、少しずつ胸が熱くなってくる。

殉にとって初めての、同じ力を持つ者との出会いであった。

（続く）

第四十三章

第四十三章

三本目の煙草を携帯灰皿にねじ込んだ所で、ゆつくりと歩み寄る人影に気付いた銀さんは、もたれかかっていた木から軀を起こした。

「こつちだ、坊や」

「こんな風に呼び出すなんて、銀さんらしくないですね」

「悪いな、人に知られず坊やを呼ぶのに、こんな方法しか思いつかなかつたんだ。ちゃんと聞こえてたみたいだな」

「凄いダミ声で、ね」

笑いながら殉が言った。

「あれか… 心の声ってのは、普段の声とおんなじに聞こえるものなのか？」

「ええ、モチロン」

「そつかあ…」

白衣のポケットに両手を突っ込んで、ブラブラと殉の周りを銀さんは歩き始めた。

「こつちやつて二人きりで話すのは久しぶりだな」

「あの夜以来ですよ」

「大事な話がある。誰にも聞かせられない話かな」

いつも飄々とした風情の銀さんに似合わぬ、重く沈んだ声だった。

「衣笠さんや九十九先生に、でしょ？」

「… やっぱり知ってやがったか。俺が何で坊やとお嬢を会わせなようにしてたか。とつくにお見通しだったんだろ」

銀さんの声が沈み込んでいた。殉に対して明らかに負い目を感じている、そんな声であった。

少しの沈黙の後、殉が口を開いた。

「カナちゃんの治療に必要なだったんですよ。僕は超能力者じゃない、みんなの『声』を少しだけ聞くだけ…。だからそれ位しか知りません」

「すまねえ」

見えぬと判っていないながら、銀さんは殉へ向かい深々と頭を下げた。

この子はみんな知っている、知ってて知らぬ振りをしている
このむくつけき年上の友人を傷付けないように

それが銀さんには痛い程判った。

こんな少年に気を遣わせている自分が恥ずかしかった。

情けねえ…

「そんなことないですよ、銀サン」

殉が微笑みながら銀さんの手を握った。

「あなたが僕を、いつでも見守っていてくれた事… 知ってました。お礼をいうなら僕の方ですって。情けないなんて思わないで下さい」

頭を下げたままの銀さんの背を、殉は何度も撫で続けた。

すまねえ

すまねえ…

二人の目の端に、高く昇った太陽が光の欠片を照り映した。

（続く）

第四十四章

第四十四章

杖を手にしたらずむ殉の脇で、枯れ木の根に腰を下ろした銀さんが訥々と話し始めた。

「お嬢があんなになって、俺は戸惑ってた。口はばつたいが、これでもニンゲンって奴は色々と見てきたつもりだった、だがありやあいけねえ」

パッケージのひと振りで煙草を出すと、軽くくわえて火をつけた。澄んだ金属音がジツポから響く。

「正直、お手上げだった。坊やもそうだろう？ 俺に出来る事と言えば、おとなしくしている時にさっさとリハビリを終える事と、暴れたらとり抑える事、それ位だ。前のように、口がきけなくても何かを話しかけようとしていたあの娘は、どこか知らない所へいつちまった」

「それは… 僕のせいです。多分」

「なあ、あの夜いつたい何があったんだ？ 今まで何度も、お前は曖昧に笑って答えようとしなかった。聞きてえ、いや聞かせてもらうぜ、今日こそ」

「話があるといって呼び出したのは銀さんじゃないんですか、ヤダなあもう」

今度は笑って逃げられなかった。

殉を斜め下から真っ直ぐに睨む銀さんの目からは、盲目の殉ですら感じとれる程凄まじい気が放たれていたのだ。

曖昧な返事を許さない、有無を言わせぬ気迫。

無言のまま時間が過ぎ、殉が折れた。

「…まるで蔦の密林みたいでした、彼女の心の中は…」
ゆっくりと殉が話し始める。

そこで傷だらけの加夏子を見つけたこと
彼女を苦しめていたものを見つけたこと
それが彼女を襲った者の姿をした彼女自身のトラウマであったこと
そして…

それが彼の兄とური二つの姿形をしていたこと

銀さんが目を見開き、唾を飲んだ。

「カナちゃんは結局、あの男と僕を同一視して、僕を刺す事で恐怖を克服したんです。でもその代わりに誰も信じなくなってしまう。それは多分…あの時の恐怖の裏返しなんじゃないかと思います。あの暴れようも同じでしょう」

「あの夜、血を吐いて倒れたのは…」

「彼女の中で刺されたから。心と軀って、嫌になる程結びついてますからね」

僕のせいなんですと、自嘲気味な笑いを浮かべて話す殉の横顔は何ともいえず淋しそうであった。

僕があの時、動揺さえしなければ…
僕のせいなんです…

「なあ。そいつは本当にお前の兄さんだったのか？」
少しの間を置いて、銀さんが聞いた。

(続
く)

第四十五章

第四十五章

殉はその時に見た男の特徴を、一つ一つ挙げていった。

切れ長の、意思の強そうな目

V字に釣り上がった唇

風になびく痩せた長身

黒ずくめの衣服

握られた刀

「似ていたんです、兄さんに」

「でもよ、確かお前の目は生まれつき…」

「兄さんの目で、兄さん自身を見た事があるんです。随分と昔ですが」

「そんな事も出来るのか」

驚いた声で銀さんが聞いた。

「めつたにありませんし、やろうと思っても出来ませんよ」

「フム。そんなものかね。俺にはよく判らねえな」

溜め息と一緒に煙を吐き出す。

「カナちゃんは辛いと言ってた、辛いから近寄るなど。彼女にあの夜の記憶はないと聞きました。きっと心のどこかで、あの男…兄さんに似たアイツと僕に何か関係があると判っているんです。だから…」

「お前を避ける、と？」

殉が頷く。

「お嬢、泣いてたそうだ」

「え？」

「俺には聞こえなかったが、泣いてたらしい。ある子が教えてくれたよ。もしかすると、お嬢はずっと心の中で泣き続けていたのかも知れねえな」

「銀さん、それって…」

「その後笑ったのさ、屈託無く。俺は初めて見たよ、お嬢の笑顔を。それで決まったんだ、九十九先生がお前とお嬢を…」

「それって、みーちゃんの事じゃないですか?!」

杖を放り出した殉が屈み込んで銀さんの肩をガツシと掴んだ。

「イテッ！ おい、何だいきなり?!」

「みーちゃんが、碧ちゃんが銀さんにそう言っただんじやないですか?!」

「そうだ、そうだよ！ お前あの子を知ってたのか？」

「あの子は普通じゃない、あの子は… 僕と同じなんです！ 仲間なんですよ！ 心の声が聞こえる仲間なんです!!」

「判った、わかったから手を離せっつて」

興奮した殉の手を肩から引き剥がすと、その手を握り締めたまま銀さんが言った。

「俺ももしかやと思っただが、やっぱりそうなんだな。いいか坊や、この事は誰にも言っくんじゃねえぞ。九十九先生はな、お前とお嬢を使って実験をしてるんだ」

「実験？ 実験って…」

殉の顔に戸惑いが浮かんだ。

「サイコダイブ能力者を使った実験的治療。俺もエミちゃんも、そのチームの一員という訳さ」

これが話したかった事なのかと殉は思った。

(続
く)

第四十六章

第四十六章

「おはよう、殉クン」

白く長い病院の廊下で、恵美子が声をかけてきた。殉の背中が一瞬、ピクリと反応する。

「おはようございます、衣笠さん」

ゆつくりと振り返る殉の顔は、いつもと変わらぬ微笑を浮かべていた。

「ちょっと、いいかな？」

「ええ、何ですか」

きた…

銀さんの言った通りだ

恵美子の言葉に備え、殉は心の中で身構えた。

「今度の月曜日なんだけど、リハビリの後、彼女… 清水加夏子さんに会ってくれないかな」

「カナちゃんに？ でも今彼女は…」

「そう、手のつけられない暴力癖で誰からも敬遠されてる。貴方自身も被害者の一人よね」

「被害者だなんて… あの時九十九先生に助けてもらいました
が」

「彼女に変化が現れたの。ついこの間の話よ。笑ったの、あの娘
が」

「笑ったんですか？ カナちゃんが」

「そうなの、笑ったのよ。それでね…」

恵美子が少しの間、言い淀むような仕草を見せた。

「今なら、貴方と加夏子ちゃんを会わせる事が出来るわ。今まで貴方の身を案じて、彼女を貴方に近付けないようにしてきたけど、今ならきつと…」

「気のせいかな。僕から会いに行くのも出来なかったような気がするのですが。検査だとか何だとか、その都度色々な事があって」

「それは…知らない。偶然じゃない？ 私達は加夏子ちゃんの方だけを見てたから」

「わたし、たち？」

恵美子の顔がスウィットと白くなる。

「それはともかく。月曜日はマズいな、僕、また一時帰宅しようと思うんです」

「そ、そう。じゃあ月曜日は無理よね。いつなら大丈夫？」

「その一週間後なら、たぶん」

「なら、その頃にお願ひする。頼むわね。加夏子ちゃんの回復は、恐らくあなたにかかっているとと思う」

「判りました、衣笠さん」

歩き去る恵美子の足音を見送りながら、殉は銀さんの言葉を思い出していた。

お嬢と会うなら、誰にも知られず、誰も居ない所がいい

病院は駄目だ。恐らく途中で邪魔が入る

それはお前達の為にならねえ事だ

坊やもそんな事は望むまい

それから…

みーちゃんの事、あの二人に勘づかれるな

一人きりの廊下で、殉はゆっくりと頷いた。

(続
く)

第四十七章

第四十七章

父親としては当然の困惑であつた。

原因不明のまま死にかかった一人娘が昏睡状態から目覚め、同時に失語症からも回復したと喜んだのもつかの間、相對した彼女は何処か薄ら寒い目をして自分を睨みつける、彼の知らない別人のような存在になつてしまつていた。

それでも暫くの間はよかつた。

違和感を残しながらも、少なくとも外見上は従順な反応しかみせなかつたから。

そのうちに……始まつた。

何の予兆もなく、見境いも無く、誰かれ構わず暴力を振るうようになつたのだ。それも尋常な暴れ方ではない。

殴る叩く、それだけでは済まない。

手近な物はすべて凶器に変わり、止めようと近づく者には頭突きに掻きむしり、あげく噛みついた。

恒彦の両手にも、既に幾つもの噛み跡が深々と刻まれていた。

左の頬には爪で抉られた三条の筋がピンク色の傷跡として残っている。身を反らすのがあと少し遅ければ、左目をやられていただろう。

それでも週に三回は見舞いを欠かさなかつた。

こんな状態だからこそ、他の者に娘を任せ切る事は彼には出来なかつたのだ。

「今日は良い知らせがありますよ、清水さん」

院長室のソファーに座った恒彦に、ピシリと糊の利いた白衣を纏った病院長が葉巻を勧めた。

「イヤ、私はけっこう。それよりも良い知らせとは何でしょう。」

『今日は機嫌もよく一度も暴れませんでした』などという話はいい加減聞き飽きましたぞ」

「いやいや、これは手厳しいですな」

悪びれた様子もなく、彼の向かいに腰を降ろした病院長はカッターで吸い口を挟みながら言った。

「笑いましたよ、お嬢さんが」

「わらった…加夏子が…それは本当か？」

「はい。そのように報告を受けております。お嬢さんの状態は当院の治療チームの尽力により着実に改善へと向かっておりますよ、御喜び下さい」

病院長が人を呼び、清水氏を病室までご案内なさいといいつける。

院長室を後にしながら、恒彦は走りだしてしまいそんな自分を抑えるのに必死だった。

加夏子

カナコ

やっただ

これで紗季子も呼べる…

「…清水さん、お話があります…」

先に立って歩いていた男が振り返り、恒彦の顔をじっと覗き込んだ。

銀さんだった。

(続
く)

第四十八章

第四十八章

「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

いつものごとく、夕暮れどきの中庭のベンチで煙草をくゆらせながら、銀さんは目の前の白衣の女性に尋ねた。

「何が、ですか？」

恵美子が小首を傾げ聞き返す。

ふんぞり返って煙を吹き上げる銀さんの表情は茫々としていたが、目は優しくはなかった。

「俺はお嬢を助けたい。エミちゃんに協力もしたい。だがそっちはチト違うようだ」

「どういう意味ですか」

「そっという意味だ」

銀さんが指で煙草をはじく。

綺麗な放物線を描いて吸いながら灰皿に飛び込んだ。

「俺が、ただエミちゃんに泣きつかれたというだけで今日まで、黙ってあの二人の監視と隔離を続けてきたと思ってたのか？ 悪いがそれ程、俺あお人よしでもマヌケでもねえぜ。狙いはあの坊やか？」

「な…何ですか急に、銀さんの言ってる事、よく判らないですよ！」

動揺と困惑の入り混じった顔で恵美子が言い返す。

「ワリイな…」

パンという衝撃を頬に感じた次の瞬間、恵美子は地面に膝をついていた。

ベンチから立ち上がった銀さんが仁王立ちして見下ろしている。

「シラあ切るのも相手次第だせ。以前から坊やの不思議な力に随分とご執心だったじゃねえか。あの若造の医者と組んで治療に利用しようとも思ってたか？ お嬢はどうでもいいのか！？ あんた看護師だろうが、答えろっ！！」

人が変わったかのような銀さんの形相だった。

頬に手をあてうずくまっていた恵美子が、ボソリと言葉を吐いた。

「…何が悪いんです」

「？」

「利用して何が悪いんですかつ！ 彼のあの力があれば、加夏子ちゃんだって昔のように戻れるかも知れないですよっ！ ほかの人だって… あのひとだって… その何処が悪いっていうんですかぁ！！」

キツと顔をあげ銀さんを睨むと、恵美子が叫んだ。

「だからワタシは九十九さんに協力した！ それで全てがいい方へ向かうと信じた！ そのドコがいけないっていうんですか！ 銀さんがワタシを責める理由が何処にあるっていうんですかぁぁぁ！！」

「…その坊やの力が、お嬢をあんなにしてしまったんだ。知ってたかい？」

ハッとした恵美子の言葉が止んだ。

（続く）

第四十九章

第四十九章

「聞いたんだ。あの晩、お嬢とあの坊やの間に何があったのか」
「……………」

ゆつくりとしゃがみ込んだ銀さんが、真正面から恵美子の目を覗き込んだ。

「知りたいかい？」

涙目の恵美子がコクンと頷く。

「確かにあの夜、お嬢を救ったのはあの坊やさ。何がきっかけかは知らないが、あの傷を負った時の事を、その時の恐怖を思い出して、そこから命ごと逃げ出そうとしたらしい。よほど怖かったんだろうな、可哀想に」

痛ましい表情のまま銀さんが続けた。

「だがな、よりもよつてお嬢は、自分を助けにきた坊やとキチガイ野郎を混同しちまったんだよ」

「えっ？」

「何でそんな事になっちまったかは判らねえ… ヒトの心の奥底のことなんて俺には想像もつかねえし、坊やにだってあんな経験は初めてだったらしいからな」

銀さんは、あえて殉から聞いた事実を伏せた。

「そんな… そんなことって…」

恵美子の目線が激しく揺れる。

「なあエミちゃん、よく考えてみな。坊やのあの力は治療なんぞに使える代物じゃねえ、それどころかひとつ間違えれば他人を破壊させるトンでもねえ爆弾になりかねないんだ」

銀さんの言葉が熱を帯びる。

「もうよさないか、こんな風にあの二人をイジくり回すのは。もう止めようぜ」

「でも…でも…あの子が接した患者はみんな嘘みたいに戻して…そうよ、回復したじゃない！あのコやつぱり出来るのよ！そうでしょ銀さん?!」

まだわかんねえのか！

両肩をガツシリと掴んだ銀さんが、目を覚ませと言わんばかりに恵美子の体を激しく揺さぶった。

「みんなが治ったのは坊やの“あの力”のせいなんかじゃねえ！誰もかれもみんな愛おしくて、助けたり支えたりしなきゃいられねえあのオセツカイでトンでもなく優しい坊やの心根に触れたからなんだ！みんな自分で立ち直ったんだよ！それが判んねえのか!!」

鬼瓦のような顔のまま、いつか銀さんは泣きながら恵美子を揺さぶっていた。

少しずつ、少しずつ銀さんの動きが遅くなり、やがて止まった。顔を上げた恵美子は、今度は真っ直ぐに銀さんを見つめていた。

(続く)

第五十章

第五十章

恵美子達が並んで歩く廊下の向こう、西日の差し込む明かりとりの大きな窓に、腕を組んで寄りかかった九十九の姿があった。

「やあお二人さん、手に手をとってお散歩ですか？」

固い表情のまま歩いてきた二人に、薄笑いの九十九が話し掛けた。

「つまらない冗談ですね、先生」

「おや？ 今日随分とつつけんどんですねえ」

笑い顔はそのままだが、九十九はいつものようなく調になる事無く、交互に二人を見つめていた。

「丁度いい。先生に話しておきたい事があるんだ、清水加夏子の件で」

銀さんが挑みかかるように口を開いた。

「それと堀川君の事について、ですね」

「察しがいいな、なら話が早い。あの二人にこれ以上……」

「『干渉するな、二人に任せておけ、治療に堀川殉を利用するな、彼の能力を試すな』久我さんのおっしゃりたいのは、だいたいそんなところでしょう」

一気に押し切ろうとしていた銀さんは、九十九に機先を制され言葉に詰まってしまう。

「危惧はもつともです、久我さん。ただ貴方も衣笠君も、ひとつ大変な誤解をしている。私は彼：堀川殉のサイコダイブ能力には何の興味も無い」

恵美子の顔色が変わった。

てめえ…聞いてやがったのか!!

怒気を張らんでグツと一回り大きくなった銀さんの軀が一步前へと踏み出そうとした刹那、九十九の手からメガネが床に落ち砕け散った。

カッシャアアーン!

銀さんの足が止まった。

「盗み聞きは趣味じゃありません、偶然ですよ」

屈み込んでガラスの破片を拾い集めながら九十九が言った。

「僕の興味はただ一つ… 人間の心、それだけです」

「こころ?」

「アアゝア、このロイドお気に入りだったんだけどなあ」

破片をハンカチに包み、フレームだけになった丸眼鏡を片手に立ち上がった九十九はゆっくりと二人に向き直った。

「僕は彼女、清水加夏子の”心”と戦っているんです。戦争と言ってもいい。今まで私達の診療チームは負け続けてきた。これは総力戦なんです。使える武器は多い程いい。僕にとって堀川君はそれだけの存在です、だが衣笠君にとっては違うですよ」

視線を回しながらレンズの無い眼鏡をかけた。

「どついう意味なんだ? エミちゃん」

銀さんも恵美子に向き直った。

(続く)

第五十一章

第五十一章

彼女はね、どうしても堀川君の力が必要なんですよ。彼の能力の秘密を解き明かし、自分が利用する。それが駄目なら彼自身を実験台にする事もいとわない理由があるんです。

レンズの無い眼鏡の奥で、眼光が徐々に強くなる。

「そういえばさつき『あのひと』とか言ってたよな。それが何か関係あるのか？」

俯いてしまった恵美子を銀さんが問い詰めた。

「なあエミちゃん、何か他人に言えないような事情でもあるのか？ 水臭いじゃねえか、言ってくれよ！」

僕から言いましょうか

別に秘密にする事でもないでしょうと、九十九が口を開こうとした時、恵美子が顔を上げキツパリとした口調で言った。

先生は黙っていて下さい。

これは私の問題ですから。

「…婚約していたんです、私達。今から四年程前の事でした…」
一言々々、噛み締めるようにしながら恵美子は銀さんに向かって話し出した。

「彼は古い和菓子屋さんの二代目、私はそこを贖いになっていた旅館の女将の次女。家同士も仲がよくて、私達は当然のように結婚するものだと思ってた…彼に症状が現れたあの時までには…」

「症状？ エミちゃんの彼氏が病気だったって話なのか」

「酷かった… あれ程急に症状が進むのはとても稀だと言われて、でもそんな言葉は何の慰めにもならなかった。一年も経たない内に、彼の記憶の大半は失われてしまったの」

「おい、そりゃあ…」

「激症性若年アルツハイマー、めったに起こらない病気ですよ。私も実例にお目にかかった事はありません」

九十九が脇から補足した。

「母は、跡を継ぐまでの社会勉強だと言って私が看護学校に進むのを認めてくれてた。私も最初は安っぽいヒューマニズムから看護師を志していた。でもあの時私は誓ったの。治療法を探す…一生かけても私が彼を治す！ 治してみせるって…！」

言葉を吐き出した恵美子の顔は激情で歪んでいた。

「あのひとを治す為なら何だってする！ 悪魔がいるなら取引したっていい！ 私は…私には、それが全てなの！ それしかないのよ…！ だから…」

「だから九十九先生の言いなりになったって事が」
フウと銀さんが息をついた。

西日は夕日に変わりつつあった。

（続く）

第五十二章

第五十二章

「そういう訳で、彼女には大事な役目を担ってもらっています。少なくとも私達二人の利害は一致している。貴方はどうですか？」

久我銀次さん」

ズンと斬り込む重さで、九十九が問いかけた。

「俺はあの二人にとって一番いい結果を出してやりたい、それだけだ」

「なら問題無い、一緒にやりましょう」

「断る」

「ほう、何故？」

九十九の口の端がクイツと釣り上がった。

「先生、あんたにとって今が戦争だというのは判る。精神科の医者だからな。でも俺はトレーナーだ、心って奴が切った貼ったで何とか出来るとは思っちゃいない。あの二人は自分達で答えをださなきゃならない。そういう定めなんだ」

「定め…ですか。えらく芝居がかってますね」

「そんなんじゃないやねえ、そんな生易しいもんじゃねえんだ！ あいつらはなあ！！！！」

そこから先を、銀さんは言う事が出来なかった。

言えば殉も加夏子も、今とは違う嵐の中に巻き込まれてしまうから。

「久我さん。彼女と堀川君を私達の監視下で引き会わせます。万が一、彼のサイコダイブが前回のようになれば彼女の深層意識に障害を与えそうになったとしても、コントロールされた環境にあれば被害は

最小限に抑えられる。彼女の心の障壁を突破する、これはまたないチャンスです。この事は決定事項として了承願いますよ」

「しかし…」

「堀川君が一時帰宅から戻り次第、とりかかるつもりです。協力するしないは御自由にして頂いて結構。でも何も出来ず悩みを抱えるよりは、私達と一緒にやった方がよほどいい結果を残せると思いますかね」

こいつ、俺まで見張っていたのか

この分じゃエミちゃんの事情も何もかも、全部知った上で仲間にしたんだろうな

「…好きにしたらいい。その時がきたら考えるさ」

「いいでしょう。では後程、戦場で」

二人に背を向けた九十九は、ゆっくりと廊下を遠ざかっていった。

「ワザと、だ」

「え？」

「眼鏡を割って俺の気を殺いだ。恐ろしくケンカ慣れしてやがる。一体どういう男なんだ？」

「…」

「いいぜ、エミちゃん。迷うなら迷えよ。自分のやらなきゃならない事が何なのか、よく考えな。俺は自分に出来る事をやる」

「銀さん…」

三日後の朝、殉は一時帰宅していった。

(続く)

第五十三章

第五十三章

いきなりでビックリしたわよ。

あなたのお父さんから、二日だけ家に戻したいと申し出があつて、今のあなたなら大丈夫だろうと九十九先生も外出を許可してくれたの。

ただし、家族以外の人とは接触を持つては駄目よ。

エントランスで一人、迎えの車を待ちながら加夏子は恵美子の話をボンヤリと思い返していた。

家族以外の人、ね

誰もかれも同じようなもののなに

ありきたりで薄っぺらな言葉に、少し前なら不快感が必ず大爆発していたであろう自分が、こんな所でのんびりとそれを思い出しているのが不思議であつた。

過激な情動が影を潜めた分、色々な事がどうでもよくなっていた。医者も家族も、勝手にやりたいようにやっているだけだ、そこに自分は居ない。

それが彼女の目に映る周囲の景色であつたのだ。

「おねえちゃん！」

トンツと車椅子の背を叩いたのは碧だった。

「こら、脅かそうなんて10年早いわよ」

「なーんだ、つまんなーい」

紺色のシャツに白いダウンのベストを着た碧が、後ろでニコニコ

笑っていた。

自然と笑みが沸いてくる。

不思議なコ…初めて会った時から、スルリと私の心の中に入り込んできた。でもそれが全然、不快じゃない。

むしろ暖かく懐かしいような感じがして、このコいると笑顔になっってしまう。

「おねえちゃん、退院しちゃうの？」

「ウウン、そうじゃないのよ。パパがね、ちょっとだけおうちに帰ってきてって言うてるの。それでね」

「じゃあ、また戻ってくるんだ」

「そう、すぐに」

「じゃあ帰ってきたら、ウチと折り紙しようよっ！　ウチ、カエルが折れるようになったんだよ」

「すごいじゃない、じゃ、約束ね」

左の小指を差し上げた加夏子は、慌てて右手に変えた。

碧の短い髪が、シャツの左袖と一緒に風になびいていた。

エントランスを白いクラウンがこちらに向かってるのが見えた時、強烈な既視感が加夏子を襲った。

どこかで、似たような光景を見た事があると、加夏子は碧の存在すら忘れてその時の事を思いだそうとしていた。

駄目、思い出せない…

「それ、殉にいちやんの事だよ」

小さな右手を加夏子の肩に添えた碧が言った。

「みーちゃん…あなた…」

加夏子は穴があく程、碧の顔を見つめていた。

(続
く)

第五十四章

第五十四章

久しぶりの自分の部屋だった。

明るい木目の机、小さなスタンド、座り慣れた椅子。淡い花柄の壁紙は入院前と少しも変わっていない。

変わったのはワタシね

それとも、本当のものが見えるようになったのかな

じゃあ何故、今まで判らなかつたの

本当のものって何？

ワタシって何？

一階には両親が居る筈であつたが、物音は聞こえてこない。寒さが冷たく締め上げた夜の街は、しんと静まり返つていた。夕食後、階段の簡易エスカレーターで二階に上がった加夏子を気遣い、母が顔を覗かせたのが2時間ほど前。それからずっと一人きりの部屋でスタンドの灯りを見つめ続けていた。

やる事も、やりたい事も無い。

彼女から望んだ帰宅ではなかつた。父のたつての願いで実現した今回の一時帰宅は、加夏子にとって不可解であり鬱陶しくもあつた。あれだけ切望した家族の温もりも今は白々しく感じる。

どうでもいいや

怒り狂うのにも、もう飽きちゃつた

ひとりでいらればそれで充分、そう、一人がいい…

荒野にゆきたいと、ふと加夏子は思った。

そこかしこに得体の知れない生き物の骨が転がっているような、草も生えない石ころだらけの荒野。

何の表情も見せない風がただビュビュウと吹き荒んでいるだけの荒れ野が今の自分には似合っていると、虚ろな目で乏しいスタンドの光を眺めながら、加夏子はひとつ溜息をついた。

彼女の周囲は皆、大変な間違いを犯していた。

清水加夏子の精神は、決してガードを下げた訳でも回復への緩やかな過程に ついた訳でもなかったのだ。

加夏子の冷ややかで醒めた眼差しも、いつ飛び出すか判らない暴力も、全てが自分と世界との関わりを見つめ直し再構築しようとする彼女なりの葛藤であり足掻きであったのだ。

他人がどう思おうと、その結果どれ程自分が忌避されようとも、加夏子は壊れてしまった自分と世界との繋がりを手探りしながら必死に探していたのだ。

だがその想いは、碧の出現で足場を失ってしまった。

癒される事は、張りを失う事に等しい。

残されたのは自分自身への果てしない嫌悪感だけ……

加夏子の精神は今、崩壊の危機に晒されていたのだった。

一階で電話が鳴るのが聞こえた。

（続く）

第五十五章

第五十五章

階段を登る重い足音がすると、ドアをノックして恒彦が顔を出した。

「カナ、電話だぞ。堀川君から」

「え……」

電話の子機を渡すと、恒彦は部屋に入らずドアを閉めた。

加夏子は車椅子のホイールを押して窓際まで進むと、おずおずとそれを耳に当てた。

「もし……もし？」

「やあ」

彼女とは対照的に屈託無く響く声。

「ヤアって……こんな時間になに？」

「チョット、ね。話があるんだ」

「ワタシにはないよ、別に」

戸惑いながらも、加夏子は拒否の態度を崩さなかった。

「明日、会えないかな」

「明日は病院に戻るの。他にやる事も無いけど、わざわざあなたに会いに行く理由も無い」

「君は僕と会わなきゃならない、会って、ちゃんと話をしなきゃならない。君自身の為に」

「ワタシのため？ なにそれ、あなた何様のつもり？！ なにしようっての！」

「何もしない、何もしないよ。でも君は知らなきゃならないんだ、あの夜、自分に何が起きたのかを」

「そんな必要ない、あなたは助けてくれたかも知れない、けどそれだけじゃない！ あなたはワタシに何かした、お得意の心を覗くいやらしい力で。そうよ…あなたは私を汚した！ 誰も来ない、誰の邪魔も入らない暗い洞穴みたいな場所で、あなたはワタシを犯したの！ カラダも心も覚えてる！ 虫ずが走るのよ！」

「聞いてくれカナちゃん…」

「気安く呼ばないで！ 言ったでしょう、ワタシに近づかないでって！！」

叫ぶように言うと、加夏子は電話を切った。

荒い呼吸を整え子機を膝に置くと、加夏子は薄いカーテンに覆われた窓を暫くの間、ボンヤリと眺めていた。

ふと何かを感じ、カーテンをめくってみる。

二階から見下ろす道路の街灯が、細い影を作っていた。

殉

ゆっくりと手を持ち上げる彼を、路面の影が真似る。

また電話が鳴った。

「…いたんだ、ずっと、そこに」

「みーちゃんが言ってた。おねえちゃん、淋しいんだよって。同じなんだ、あの子と僕は」

「おなじ…」

「あの子にも聞こえたんだよ、カナちゃんの“声”が」

「それじゃあワタシ…」

「みーちゃんの気持ちが届くなら、僕だって。大丈夫だから」

行くよと言って、殉は携帯を切った。

部屋の外で聞いていた恒彦が、足音を潜ませて階段を降りていった。

（続く）

第五十六章

第五十六章

「あなた、本当にいいの？」

オンザロックのグラスを差し出しながら、清水紗季子は夫の恒彦に聞いた。

ついさつき家を訪ねてきたのは、あの夜に血を吐いて運ばれていた少年であつたのだ。

その事も紗季子を驚かせたが、夫がまるで予期していたかのように彼を招き入れた事が、彼女には驚きと同時に不審でもあつた。

「お前には話していなかったが、今夜彼がここを訪ねてくるのは予定通りの事なんだ」

「予定通り、ですって？」

「ああ。この間見舞いに行った時、加夏子のリハビリ担当に相談を受けたんだ。お前も会つた事があるだろう、トレーナーの久我さんだよ」

酒のつまみを皿に盛り付けていた紗季子の背がぴくりと動いた。

「ん？　どうかしたか」

「いえ、別になにも…」

表情を変えず、紗季子は恒彦の前に皿を置いた。

「彼とじっくり話したんだ。加夏子が何故、あんな風になつてしまったのか。何故今、あの子の暴発が収まりつつあるのか…」

「それであるひと…久我さんは何て？」

「彼もあの少年から聞いたのだそうだが、要は加夏子が自分で恐怖に打ち勝つたって事らしい。その代わり他人への強烈な不審心を

抱え込んでしまったと。あの夜、堀川というあの少年が吐血したのは加夏子の『攻撃』をモロに受けてしまったのが原因らしい。そしてそれは加夏子の誤解から生じていると。それを解かねば、根本的な解決にはならないと彼は言っていた」

「でも今は良くなっているのじゃありません？ 確かに少し元気が無いみたいだけど、噛みついたり引つ掻いたり、殴ったりもしないじゃないですか」

「あの子が心を開ききつかけになったのは、同じ入院患者の女の子と出会ったかららしい。だがな、その子もあの少年と同じような力を持っているようなんだ。何と言ったかな… 確かサイコなんとかだったか…」

「サイコダイブ」

「それだ。加夏子の心の根っこの部分を治すには、どうしてもその力が必要だと。そしてそれは、あの彼でなくてはならないと、そう言っていたんだ。私はその言葉を信じた」

「そうですか… あのひとがそんなことを…」

ほっそりとした指で胸元を包むようにした紗季子が、仰ぐように二階を見た。

加夏子と殉が向かい合っているであろう部屋を。

（続く）

第五十七章

第五十七章

「みーちゃんに会ったの。パパやママが迎えにきてくれるのを待ってた時…」

殉は部屋に入ったときのまま、戸口の脇に立ち長い沈黙が終わるその時を待っていた。

「ワタシ判った気がした。あの子も殉と同じなんだって。都合良すぎるよね」

「都合がいい？」

「だってそうじゃない。口もきけずふさぎ込んでたワタシの前に現れたのがあなた、嫌われ者の暴力女になったワタシに怖がらず近づいてきたのがあの子…出来すぎてるわ。安っぽい小説みたい」

「君はみーちゃんも、僕みたいにいやらしい奴だと思うのかい？他人の心に土足で踏み込む覗き屋だと」

加夏子が小さく首を振る。

「不思議だった。何であの子といると穏やかな気分になるのか判らなかった。ワタシひとりっ子だから知らなかったけど、妹がいるってこういう事なのかなって、そんな気分だった。自分の外側にいて、当たり前のようにワタシを受け入れてくれる存在。親とも友達とも、恋人とも違う…兄弟とか姉妹って、きつとこんなものなんでしょうね」

「僕にも兄さんがいる」

「そう」

感心無さげに、加夏子は殉の言葉を流してみせた。

「あの子にも力があるなら、ワタシをそんな気分させるのなんて簡単だったでしょうね。あなたもそうだった。ワタシにいろんな夢を見させてくれた。でも全部嘘、見せかけの飾り物でしかなかった」

「それは違う！」

「どう違うってゆうのよ！！」

思わず前に踏み出した胸を、クルリと車椅子を回した加夏子が真正面から睨んだ。

「知らないって事が…知らなかったって事が、どれだけみじめで怖くて情けなくて、それから腹立たしい事か、あなたに判る？！目が覚めてからずつとよ、顔を見れば誰もかれも隠し事してる、口ではいい事ばかり言つて、目の奥に違う光がある。ワタシが睨むとみんな目線を外す、口ごもる！嘘つきだらけだった！！」

加夏子の表情が、またあの狂気の老婆に変わろうとしていた。

「だまそうつたってそうはいくか！ワタシは…アタシはもう誰にも騙されない！ダレにも傷なんかつけさせない！アタシは、アタシは！！！！」

加夏子の右手が机の鏡を掴むと、高々と振り上げた。

（続く）

第五十八章

第五十八章

バッキヤアアアーン！！！！

ガラスの碎け散る音が夜の住宅街に響き渡った。

「あなたっ！」

紗季子が叫ぶ。

恒彦の巨体がソファをに蹴り飛ばし、階段を踏み抜く勢いで二階へ駆け上がった。

ドアノブをわしづかみにして一気に部屋へ飛び込もうとした、その時……

「いいよ、やれよ！ 遠慮しないでぶつけろよ！ ちゃんと見えてるよな、覗き屋のボクなんかと違って姿も形も見えるんだろっ？！ やれよ！！」

ドア越しに聞こえてきた殉の罵声が、彼の手を止めた。

薄く開いた隙間から中の様子を伺う。

死角にいる二人の姿は見えなかったが、糸を張りつめたような緊迫感が漂ってきた。

もう1度、今度は陶器の割れるような音が響き、部屋の壁から飛び散った破片が恒彦の足下にも飛んできた。

淡い空色の欠片…… 加夏子のお気に入りペン立ての無惨な姿であつた。

「どうした？ どうしてぶつけないんだ、僕にはよけられないん

だぞ。僕が憎いんだろ？ 君を汚した僕が憎くてしょうがないんだろ！ 僕はここにいますぞ！！」

ガシャン！ ガシャンッ！！

車椅子のぶつかる音。

くぐもった殉の呻き声。

もう限界だ、止めねば。

「わからない！ わからないんだよお！！ アタシなんにも覚えてないんだ、でもアンタがいるとキモいんだ！ ムカついて自分が止められないんだ！ …何とかして…なんとかしろよおー！ 助けるよおお！！」

ドアを開けると、殉の胸ぐらを両手で握りしめ、鳩尾の辺りに額を埋めた加夏子が叫びながら泣いていた。

「カナちゃん… 君の言う通りだ、みんな僕がいけないんだ。話してあげる、あの時僕が何を見て、君になにがあったのか…」

殉がゆつくりとこちらを振り向いた。

瞬かない青い瞳から一筋、透明なしずくが滑り落ちるのを恒彦は見た。

彼はそつとドアを閉め、部屋を後にした。

階段の途中で心配そうに二階を見上げていた紗季子に、恒彦は声を掛けた。

「任そつ、彼に。大丈夫だよ… きつと」

紗季子が小さく頷いた。

(続
く)

第五十九章

第五十九章

怖かったんだね。

君の心の中は棘だらけの森みたいだったよ。ギザギザで、ひどく暗かった…

下から胸ぐらを固く握り締めたままの加夏子の肩をそつと両手で抱くと、殉は落ち着いた口調で語り始めた。

「…辿り着いたのは、大きさも判らない広い場所だった。多分、カナちゃんの心の一番奥深い所だったんだろう。そこで傷だらけの君を見つけた…初めて見たよ、カナちゃんの顔。前から想像してたんだ、どんなコなんだろうかって…」
殉が軽く微笑んでみせた。

加夏子が顔をあげ殉を見上げた。

「君はボロボロの姿で、必死に助けを求めていた。君をそんなにした奴もそこに居た。恐怖の形…それは刀を手にした男の姿をしていた。そして…」
殉が言い澀む。

そいつは、僕の兄さんそっくりだったんだ

加夏子の目が張り裂けんばかりに見開かれた。

「そんな…だって、あなた目が…」

「見えるんだ、誰かの目に映ったものを。その人の心に映った映像

を。兄さんは鏡に映った自分を僕に見せてくれた事があつた。アイツの姿は、その時の兄さんによく似ていたんだ。それで僕は動揺した」

「ジユンのお兄さんが、私を…」

「そうじゃない！そうじゃないんだ、ただ似ていたというだけなんだよ。でも僕は動揺し混乱した。他人の心に入り込める程深くシンクロした状態でそんな風になれば、必ず相手にこちらの心理状態が影響を与えてしまう。僕が一瞬でもアイツを兄さんだと思つてしまつたことで、カナちゃん、君は僕とアイツが一緒の存在か、よくて仲間だと思ひ込んでしまつたんだよ」

殉は必死に訴えた。

「信じて欲しい、カナちゃん。アイツは僕の兄さんなんかじゃない！アイツと僕は何も関係がないんだ。アイツはもう何処にもいない、もう怖がらなくていいんだ！他人を疑わなくてもいいんだ！！」

「…無理よ…」

「カナちゃん！」

「どうしろつていうの！？アタシに。自分でも抑えようがないのよ！頭でいくら思つても駄目なの！軀の奥の奥から、般若みたいなアタシがいつでも顔を覗かせてる、アタシには止められない！！」

「方法はある。僕を…もう一度カナちゃんの中に潜らせて欲しい」

信じてくれるなら…

殉の手に力が込められた。

（続く）

第六十章

第六十章

時計はじき零時を差し示そうとしていた。

カツ、カツという音だけが響く部屋の中。

向き合った二人は微動だにしない。

加夏子は、ベットの端に腰掛けた殉の前で目をつむっていた。両手は膝の上でしっかりと握られている。

殉もまた瞑目していた。殆ど暖房の効いていない部屋で、彼の額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

かれこれ3時間が過ぎていた。

あまりにも静かな様子に不安をかきたてられた恒彦達が恐る恐る部屋を覗いた時、二人は既に彫像と化していた。

加夏子も殉も、恒彦や紗季子が部屋に入ってきたことに気付いていない。意識すら無かった。瞑想で言う完全な三昧境にあったのだ。

誘ったのは殉だった。

「いいかい、これからカナちゃんとシンクロする。この前は僕自身、訳も判らないまま君の中に入っていった。君と強い絆が生じていたのを感じていたから、あんな無茶をやってしまった。でも今度は違う。君は僕を拒んでいる。そこに入ってゆくのは多分、もの凄く強い抵抗にあうと思うんだ。正直、たどり着けるかどうか自信が無い。でも僕は信じてる、カナちゃんが本当の自分を取り戻そうとしてる事を。そこには必ず僕のいる場所がある事を」

離れていていいよと言うと、殉は加夏子の車椅子を押してベット

の傍へゆき、自分は浅く腰掛けると静かに目を閉じた。

間を置かず猛烈な眠気に襲われた加夏子も、あらがう事なく瞳を閉じた。

時間は意味を成さなくなっていた。

「あなた…病院に連絡したほうが…」
生きている人間とは思えない二人を前に、不安をかき立てられた紗季子が恒彦の背を押す。

「待つんだ、サキ。久我さんが言ってた、”ギリギリまで二人に干渉しないでくれ”と。心の中の事なんて私達には判らない、だが彼は…堀川君は、前回の失敗で学んだ筈だ。だから任せよう。彼を信じよう…」

そう言う恒彦自身、強く噛んだ唇から血を滴らせていた。

このひとと戦っているんだ、カナと一緒に…

恒彦のさまを見た紗季子は、恒彦の背を押す手を放した。
私も一緒に戦う。

このひとや、血を吐いてまでカナを救おうとしてくれた彼と。

お願い

加夏子を助けて

お願い

神さま…

久我さん…

紗季子の手は真っ白になるまで握り締められていた。

（続く）

第六十一章

第六十一章

目を閉じて、頭の天辺から首、背骨に沿ってゆっくりと下に向かい沈み込んでんでいった。

自分の意識を光る球体としてイメージした殉は、徐々に徐々に、深海潜水艇が海溝に潜ってゆくように、それを軀の底の方へと沈ませてゆく。

呼吸のリズムは加夏子に合わせ、だが少しずつ遅くしてゆくと、球体が沈むに従い今度は加夏子の呼吸が殉のリズムと同調してくる。

誰に教わった方法でもなかった。

幼い頃、たらい回しにされた親戚の家で、盲目の殉には赤子をあやす位の事しか出来なかった。ぐずって泣き止まぬ赤ん坊を寝かしつけるのが、いつもの殉の役目だったのだ。

そんな日々を繰り返すうち、彼は奇妙な特技を身につけた。

どんなに癪の強い子でも、殉が添い寝してやるとピタリと泣き止んで、やがて二人ともスヤスヤと気持ち良さに眠ってしまうのだ。成長し、サトリとして親戚達に忌避されるようになるまで、殉は子守の名人として重宝されていたのだった。

無我夢中だった前回と違い、今度は始めから自分の意志で、覚醒している相手の心の中に入り込んでゆかねばならない。

どうすればそんな事が出来るのか：殉が思いついたのは、子供の頃に散々やったこの方法だった。

いや、正確にはそれしか思いつかなかったと言うべきであろう。

こんな事を日常的に行ってきた訳でもなく、ましてや専門的な訓練など受けた事も無い殉にとって、加夏子とシンクロするにはこの方法しか選択の余地が無かったのだ。

彼は知らなかったが、チベット密教において”夢見の法”とされる修行法と彼のそれは酷似したものであった。

密教僧達はこの方法を用いて、自らの夢の中に、能動的な自我を保ったまま入っていったという。異世界を自在に飛び回り、言い伝えでは現実の肉体もまた夢と共に宙を舞ったといわれている。

殉は加夏子と一緒に深い眠りに落ちた。
眠りながら、尚かつ彼は“目覚めて”いた。
暗黒の中を下降する彼の意識は、緩やかな螺旋を描きながら、それを探していた。

どこだ

どこにあるんだ

彼女の「扉」は…

永久に続く闇の底は、どこまで下っても見えてこない。
萎えそうになる自分を叱咤しながら、殉は更に深く深く、暗闇を潜っていった。

（続く）

第六十二章

第六十二章

心、とは何であるか。

古来より多くの賢者、覚者が呻吟し、今尚答えの出ない人類の永遠の命題である。

ある者はそれを神の祝福の証といい、ある者は人と獣を分かť境界であると説く。心とは魂そのものであると誰かが言えば、そんなオカルティックなものではない、もっと普遍的な人間の徳性の表れだと異を唱える者が出る。

かくして百花繚乱の議論は、確たる結論のひとつも出せぬまま現在まで続けられてきた。

最新の大脳生理学は、心が莫大な量の神経細胞網、ニューラルネットワークにより構築された高度な情報処理系の、幾つかの領域に分かれて相互に監視・干渉・補助を行う過程で生じた脳内システムの錯覚：”我思う 故に我あり”という有名な言葉を借りるならば、”我を我と認識する我は 既に我とは別の我である”とでも言い表す事が出来る：である可能性を示唆している。

肉体と脳を切り離して考えられないように、脳もまた肉体の存在を前提としなければ、その能力について説明する事は出来ない。そういう意味では、例え靈魂というものが未知の形で死後、存在するものであったとしても、肉体という自在に動くセンサー群を喪っている時点で、それは既に人間とは違うものであると言えるであろう。

極めて乱暴かつ簡単に心というものを定義するなら、それは数多くの神経細胞の発する信号の無限に近い組み合わせと言う事が出来る。

人が決して他者そのものになれないのは、一つには肉体の性能に個体差があり過ぎるという点があげられるが、生物学的に互換性があり又、通信手段は必ずしもテレパシーなどという未知の能力を必要とせず、互いの感覚器に情報を与えさえば事足りるので大きな障害にはならない。

（顔をしかめ、それを見るといった行為は立派な通信の一形態である）

問題は、互いの持つ莫大な各種信号に同期する事が事実上不可能であるという点にある。

殉のサイコダイブという能力にしても、同期出来る相手の情報：信号量は全体のほんの僅かにしか過ぎず、ただそれが常人より多いというだけに過ぎないのだ。

今、彼は加夏子という情報の一端に自分のそれを重ね、別の情報群にアクセスしようとしていた。

だがそれは、彼を頑なに拒むものであったのだ。

（続く）

第六十三章

第六十三章

ここまでではうまくいつているようだ、そう思う殉の意識は、既に光球ではなく人の形をしていた。

更に下へと目を凝らす。

…見えてきた。

黒いだけだった闇に濃淡が生じていた。変化の兆候だ。

「扉」への微かな期待を胸に、殉は頭を下げ、スカイダイビングの急降下のような姿勢をとった。グンと勢いがついた次の瞬間…

避ける間もなく突っ込んだ。

生暖かい灰色がかった極彩色が巨大なプロブとなって吹き上げてきた。目眩がする程の猛烈な悪臭と全身を覆う不快なドロドロに押し流され、もみくちゃにされ、猛烈な勢いで遙か上方に吹き飛ばされそうになる。気持ちの悪い未消化物のようなものが穴という穴から入り込んできた。抗いたくても、しがみつく物も踏ん張る足場も無い。ここはイメージの世界なのだ。

イメージの世界
そうか

「僕は逃げないぞ！」

強く念じて四肢を張り顔を上げた。

眼球の表面にまでヌルリと流れる粘液の気味悪さに吐きそうになりながら、やっぱり見えるという事はいいことないんだなあと場違いな想いを抱いてみる。

奔流がふいに消えた。

漆黒の空間に、再び一人ぼっちで取り残された殉は、手足の緊張を解いて辺りを見回してみた。

…

ふと背後に気配を感じて振り返った殉は、喉の奥から心臓が飛び出そうになった。

目だ。

全てを覆い尽くすかのような目、いや目玉が彼を見下ろしていた。巨大な虹彩が彼に向かって引き窄められる。血走った、敵意に満ちた目。

全身に立った鳥肌が皮膚を突き破って飛び散りそうになる。

びりびり、ばりばりばり

音を立てて巨大な目玉が真ん中から裂けてゆく。ばつくりとあいた。

ズラリと並んだ、出鱈目に生えた牙…

頭の皮がめくり上がる程口を開け殉は絶叫した。

おうわあああああああゝ！！！！

突然、のけぞるようにベッドへ倒れ滅茶苦茶に軀をよじり始めた殉を見た恒彦は、慌てて彼の両腕を掴み押さえつけようとした。

もの凄い力でベッドから跳ね上がろうとする殉に覆い被さりながら叫ぶ。

「サキ！病院に電話しろ！今すぐっ！！」

紗季子が駆け出そうとして止まる。

「あなた……」

加夏子が、うつすらと笑っていた。

（続く）

第六十四章

第六十四章

薄暗く笑いを浮かべている加夏子を見た紗季子は、階下へ向いかけた足を止めた。

「どうした?! 早く病院へ電話を!!」

「だめよ…あなた…だってこれじゃ…」

棒のように立ちつくしながら、紗季子は加夏子が目覚めたあの日の事を思い出していた。

アイツ、ヤッツケタ…

焦点の定まらない目で虚空を睨みながら、加夏子は今と同じ笑みを浮かべ、そう一言呟いたのだ。

あの時と同じだ。

ここで止めたら、加夏子は今までと何も変わらない。何一つよくないかなりはしない。

躊躇いがちにベットの方へ向きを変えると、紗季子は跳ね回る殉と恒彦の身体の上に覆い被さった。

夢中で夫のシャツの端を掴んでしがみつく。

「何やってんだバカ! いいから電話しろ!」

「駄目なの! 彼じゃなきゃ駄目なのよ! ここで駄目ならこの先いつまで経つてもカナはダメなままなの!! 今しかないのよぉー!!」

親子亀のロデオよろしく上下左右に揺さぶられながら、それでも紗季子は恒彦の背から落ちなかった。

カナちゃーん!

カナちゃん！
カナちゃんああーん！！！！

愛娘の名を必死になって連呼する。

殉を抑えつける手を離すに離せず、紗季子を背中から降ろす事も出来ない恒彦も、いつしか彼女と一緒に娘の名を叫んでいた。

加夏子ー！

かなこおおー！！

…少しずつ、少しずつ殉の動きが収まってくる。
やがて静かになった。

「どうにか…収まったようだ、な」

「ええ…」

肩で息をしながら、恒彦は紗季子を背から降ろした。
グチャグチャに乱れた髪をうなじに押さえつけ、紗季子は殉を見下ろした。

彼の顔からは苦悶の表情が消え、口元には微かに笑みさえ浮かんでいた。

すうっと両手が持ち上がり、宙に向かって差し出される。

加夏子の方へ向き直ると、今度は逆に彼女の額に深い皺が走っていた。

イヤイヤをするように首を左右に振る。

「なにが…起こっているのかしら」

「私も知りたいよ…」

何か飲み物を持ってきましょーうと言い、紗季子は一階へ降りるとバッグから携帯電話を取り出し、病院の番号をプッシュした。

「もしもし、夜分にすみません…その、娘の事で至急、連絡をとり

たい人がいるんです。ええ…お願いします」

名前を告げると、紗季子は電話を切った。

（続く）

第六十五章

第六十五章

長い牙

鋭い牙

曲がりくねった牙

汚れ欠けたノコギリ状の牙

ありとあらゆる牙が殉の身体を貫いていた。

ザグザグと咀嚼音が鳴る。

殉の両足は噛み砕かれ、胴体はひと噛みごとに潰れ、気味の悪い腸をはみ出させていた。

生きながら喰われる激痛に絶叫し、両腕で滅茶苦茶に”邪悪な口”を叩き続ける殉を、”魔眼”が笑いながら見下ろしていた。

精神世界で身体を傷付けられるのは、心を直接破壊されるのに等しい。殉が廃人と化すのは時間の問題でしかなかった。

だ…め…だ…

………

………

…

爪の先程残っていた殉の意識が、微かに響く音を聴いた。

人…おんなの…ヒト…の…こえ…

それは少しずつ、だが確実に大きくなっていった。

”邪悪な口”の動きが、声の広がりと共に鈍くなってくる。

やがて声はデュエットのように高く低く響き始めた。

細く通った女性の声。

野太い男性の声。

声は、名を呼んでいた。

…

…

… …… ちゃーん…

… カナちゃーん…

カナちゃああーんっ！！

…

…

… …… こおー…

… 加夏子おー…

かなこおおおー！！！！

”邪悪な口”の動きが止まった。

胸から下を挽き肉にされた殉は、牙の端に引っかかった状態でダラリと垂れ下がっていた。

生暖かい液体が顔を打ち、僅かに残った意識が戻る。

ひどくしよっぱい。氣力を振り絞り重い瞼を持ち上げた。

”魔眼”が、泣いていた。

巨大な眼球に、涙があとからあとから溢れ出しこぼれ落ちてくる。

どしゃ降りの雨に打たれるように濡れそぼちながら、殉は”魔眼”に向け両手を差し上げた。

痛みは消えている。

暖かい…

”邪悪な口”が消え去り、虚空に横たわった殉は元の姿に戻っていたが、彼はそれすら気付いていなかった。

奇妙な至福感に包まれ、ほんのりと笑みを浮かべながら、それに手を差し伸べる。

”魔眼”は、いつしか小さな光の点へと変わっていた。

小刻みに振動しながら、右へ左へ宙を漂っている。夏の夜の蛍のように、はかなくフラフラと飛び回る光。

「扉」だった。

戯れるように光を追い、殉が両の掌にそれを包み込むと、暗黒の風景に変化が生じた。

自分が遂に辿り着いた事を、彼は知った。

（続く）

第六十六章

第六十六章

奇妙な風景だった。

草木は生えている。

だが動くものは無い。

虫一匹すらない。

思慮無く作られたテーマパークのような。

砂漠に置かれた箱庭のような。

無風。乾いた空気。

コントラストばかり強い、どこか人工的な虚偽に彩られた場所…
目に優しい緑が幾らあっても、豊かな印象は一つも持てなかった。

彼女はそこにいた。

殉は慎重に足を進めた。

あの時の愚だけは避けねばならない。

三度目の正直は無いだろう、たぶん…

加夏子は地べたに座り込み、抱えた両膝に顎をのせてボンヤリと遠くを眺めていた。

あと数歩で手が届く所まで来ると、殉は足を止め、彼女のうなじの辺りを見下ろした。

「来ちゃったんだね」

わずかに顔を動かし、加夏子が肩越しに呟いた。

「うん」

「来て欲しくなかった」

「うん」

「あのまま嘔み潰してしまえばよかったかもね」

「うん」

「そのつもりだった。ホントだよ。でも出来なかった…声がしたから。パパとママの声…なんか嬉しかったな」

黒髪に半分隠れた端正な顔が淋し気に微笑んだ。

「どうでもよくなっちゃったのよ。喰い殺したいほど憎かったあなたの事も、ね」

「…」

「ホント、もういいやってカンジ。ほつといてくれないかな。ワタシここにいる。ここでこうやって、バカみたいにずうーつと死ぬまで座ってるから」

「みんな待ってるんだ、君を。どうしてそんなこと…」

「信じられないから」

加夏子がゆつくりと顔をあげた。

酷く哀しい表情で殉を見つめる。

「…悪いことなんて何もしなかった。でも本当のママは病気で死んじゃった。誰にも意地悪なんてしなかった。でも斬られた、顔も知らない男に。素敵な男の子と知り合えた。でも喋る事も歩く事も出来ない。その子は私を助けようとしてくれた。でもその子のお兄さんと、私を斬ったあの男はそっくりだった…」

「カナちゃん…」

「どうして私、こんな目に合うんだろ。たぶんこれからずっと、こんな事が繰り返されるんだ。いつまでも、ずっとずっといつまでも」

「そんなことない」

「もういいの。明日なんて信じられない……ここで骨になるまで座ってればいいの」

そんなことないっ!!

殉が叫んだ。

(続く)

第六十七章

第六十七章

「待つてるひとがいる、帰る家がある、君にはあるんだよ！居場所が…君が居てもいい場所がちゃんとあるんだっ！」

激高しそうになる声を必死に抑えつけながら、殉は加夏子に向かい言葉をぶつけ続けた。

「今までがなんだっていうんだ？君はちゃんと生きてきたじゃないか。いろんな事があって、ペシャンコに押し潰されそうになっても、君は君のままで今までやってきたんじゃないか。初めて会ったあの日…君は坂道が登れなくて困ってた。嫌になってた。でも今みたいに投げやりじゃなかった！僕が手を貸したのは偶然なんかじゃない、君が自分の”声”で呼んだんだ！一緒に坂道を進んでくれる誰かを！！」

殉は必死だった。

ここで加夏子を連れて帰れなければ、彼女の人格は確実に崩壊してしまう。

生を…生の営みを、そこに生じる他者との交わりを否定し、拒否し、この無味乾燥な世界に閉じこもるというのなら、現実世界での彼女の居場所は廃人専用のホスピスか、良くて精神病院の隔離病棟ではない。

いけないんだ

こんな所にいちゃいけない

絶対にダメだ！

「カナちゃん、かえろう。みんなの所へ。大丈夫だから」

「…嫌。あそこには何も無い。あるのは苦しみだけ…奪われた絆だけ。もういいから帰って…一人で帰って。かえってよおおー!!!」

全ての景色が、ミイラのように色褪せ朽ちてゆく。

草木は枯れ、建物は轟音と共に崩れ落ちてゆく。

地震のような地鳴りが響き、大地は滅茶苦茶に裂けてゆく。

”内面世界の崩壊”と呼ぶにふさわしい壮絶な破壊が起きていた。
立っている事すら出来ず、殉は這いずりながら加夏子に手を伸ばした。

パツクリと地面が口を開ける。

轟という響きと共に、加夏子の小さな身体が亀裂の奥へと落ちていった。

くそおおー!!!

殉はジャンプして加夏子の腕を掴んだ。

ダラリとぶら下がった加夏子。

視線は亀裂の奥、深淵を覗き込んだまま動かない。

「帰るんだ…みんなが…ボクがキミを待ってるんだ! いっちゃダメだ! カナちゃん、キミが好きなんだ!!!」

帰るぞおー!!!

かなああああー!!!

ピクリと加夏子の身体が動いた。

(続く)

じゅん

第六十八章

第六十八章

恒彦はハッキリと見た。

仰臥した殉の手首の辺りが急激に変色しドス黒い痣が浮かび上がってくるのを。

剛力で握り締められたように、痣は指の一本々々まではつきり判る人の手の形をしていた。

「これは…」

はふうっ

反りかえった殉が、肺の空気を吐き出す音を口から漏らすとバツタリとベットに沈み動かなくなる。

ガタンッ！

前のめりに倒れ込んだ加夏子が車椅子から床へと崩れ落ちた。

「カナちゃん！」

紗季子が血相を変えて加夏子を抱き起こす。

「あなた！カナちゃんが、カナちゃんが…！」

恒彦は殉の脇から飛び降り娘のそばへ駆け寄った。彼女の右手は何かを握った形のまま硬直している。

「息を…してないぞ！」

「そんな…どうすれば…カナちゃああんっ…！」

「落ち着け！人工呼吸…心臓マッサージ…とにかく何でもやるんだ

！お前は救急車を早くっ！！」

言うなり恒彦は、紗季子の腕の中から加夏子をひっぺがし、床に横たえるとマウスツーマウスで人工呼吸を始めた。

吹き込む。離す。また息を吹き込む。

チラリと横目で見上げると、狼狽しきった紗季子は呆然と立ち尽くしていた。

「電話だサキイイー！！！」

恒彦の、家をも揺るがす大喝に我を取り戻した紗季子は、狭い階段を駆け降りた。

和服の裾が足に絡まり、転んだ紗季子は数段を残して階段を真つ逆さまに落ちてしまった。

…短い間だが、気絶していたようだ。

紗季子は壁に手について起きあがろうとした。

頭が酷く痛む。額に手を当てると真つ赤に染まっていた。転落した時ぶつけたらしい。

ピンポーン

ドアチャイムが鳴った。

紗季子は立ち上がった。鉄芯を脳天から打ち込まれるような痛みに唇を噛んで堪えながら、ヨロヨロと玄関へ向かい鍵を開ける。

銀さんが立っていた。

右手にAEDを、左肩には救急キットのバッグを下げた銀さんは目を見開いて目の前の女を見つめた。

「サキ…おまえ…」

「くが…さん…カナが…」

すっと倒れ込む紗季子の小柄な身体を、銀さんの太い腕がガツシリと支えた。

「おい！しっかりしろ！二人はどこだ？！」

「…かい…二階に…息、してないの…お願い…はやく…」

銀さんは物も言わず、紗季子を横抱きにすると階段を駆け登った。

（続く）

第六十九章

第六十九章

「久我さん？どうして…」

顔を朱に染めた妻と、それを脇に抱えて部屋に入ってきた男の姿に当惑した恒彦の動きが止まった。

「説明は後で、清水さん。手を止めないで」

加夏子の足下に紗季子をそつと降ろすと、銀さんは手早く傷の状態を確かめた。

「大丈夫だ、瘤の上が切れてるから派手に血が出たが…ここを抑えて」

救急キットから取り出した止血帯で頭の半分を覆うと、紗季子の手をとって傷口の辺りに添えさせる。

虚ろな眼差しを向けた紗季子は、されるがままに頭を抑えた。

「そっちはどうですか？」

「駄目だ、呼吸が戻らん」

「これを」

AEDの箱を開きチャージャーと電極を取り出す。

「服を脱がせて…胸と脇腹に電極を貼るんです、箱の裏に絵があるからその通りにして下さい」

「わかった」

加夏子を恒彦に任せ、銀さんは殉の状態を確認した。

「こつちもバイタルが弱い。加夏子ちゃん…お嬢さんの状態と一緒にだ。いや、連動しているんだろう」

「連動？」

「深く同調しているのなら、多分。あの時もそうだった」

「それじゃあ、二人は今…」

「蘇生を急ぎましょう。恐らく彼女のバイタルに彼も引きずられている。ボタンを押して」

恒彦がAEDのスイッチを入れる。

女性のアナウンスが合成音声で流れ、高電圧のチャージが始まる。

「離れて！清水さん」

恒彦が加夏子の脇から離れた。

紗季子は横になったまま眺めている。

チャージ音が高まった。

いっかいめのせいです
ドンッ！

加夏子と殉の身体が同時に跳ね上がった。

じょうたいをみています
そのままでおまください

穏やかだが暖かみの無い合成音声が、蘇生状態を診断中だと告げる。恒彦も紗季子も、銀さんも固唾を飲んで結果を待った。

加夏子、しっかりしろ…

カナちゃん…

帰ってこい、二人とも…

三人の願いをよそに、再びチャージ音が低く鳴り始める。
銀さんは立ち上がると、ベットに横たわった殉の上から覆いかぶさ

り叩きつけるように言った。

「連れてこい！引つ張りあげろ！お前なら出来る筈だ、坊や！お嬢と一緒に帰ってこいっ！！」

にかいめのそせいです

ドンッ！！

その時、跳ね上がった殉がクワツと目を見開いた。

（続く）

第七十章

第七十章

あ…あ…

ブルブルと震える殉の腕が、天井に向かって持ち上がる。瞳孔は激しく拡大と収縮を繰り返していた。

「どうした？俺が判るか？！おい、しっかりしろ！！」

銀さんは懸命に話しかけた。

殉の腕が限界まで伸ばされる。

銀さんは見た。

腕についた痣がグニヤリとへこむのを。

その時何故、加夏子の方を振り向いたのか彼自身にも判らなかつた。鉤型に硬直していた加夏子の手が瞬間、こぶしとなって握り締められた。

がはあっ！！

吐き出すような呼吸音と共に、殉がもの凄い勢いで腕を引き降ろした。肘が手首の近くまで深々とベッドにめり込む。

…

…ピン…

…ピン、ピン…

…ピン、ピン、ピン、ピン…

AEDの電子音が、規則正しく心拍をモニターし始めた。

でんきよくをはずしてください
でんきよくをはずしてください
でんきよくを…

加夏子の脇に屈み込んで電極を外した銀さんは、ゆっくりとAEDのスイッチを切った。

「やった…のか？」

「判りません、まだ」

恒彦の問いに、彼もそう答えるしかなかった。

後ろで誰かが動く気配がして振り返った恒彦は、物憂げに身体を起こす少年の姿に思わず声をあげた。

「きみっ！大丈夫なのか？！」

紗季子も銀さんも吊られてベッドの方を見る。

「…なん、とか…カナちゃんは？」

う、うっ…

小さく唸った加夏子が目を開く。

「カナ！パパだよ、判るか！？」

「ここ…わたしの…部屋…だよね？」

「そうだ！そうだよ！！どこか痛くないか？寒くないか？もう大丈夫だからなあ！！」

ガツシリと抱きしめられ何度も何度も身体をゆさぶられながら、加夏子は父親の肩越しにベッドの殉を見ていた。

「オカエリ、お姫サマ。悪い夢は終わったよ」

「じゅん…」

大粒の涙が、後から後から溢れ出て加夏子の頬を、恒彦の肩を濡らしていた。

「やったのか、坊や？」

銀さんの言葉に、殉は晴れ晴れとした笑顔で返した。

「ええ、たぶん」

「多分だあ？そのわりにやスツキリした顔してるじゃねえか」
緊張から解かれ、銀さんもいつもの口調に戻っていた。

見えぬ目で加夏子を見る。

彼女も照れたように微笑み返した。

夜が、明けようとしていた。

（続く）

第七十一章

第七十一章

「さあ、いこうか」

器具をまとめた銀さんが声をかけた。

加夏子を車椅子に座らせていた恒彦が、ベッドの脇に戻ると殉に手を貸し立ち上がらせる。

「僕は大丈夫ですから、加夏子さんについててあげて下さい」

渡された杖を抱え、左手で壁を探りながらドアの方へと歩く。

「下で待ってて、ジュン」

「うん、待ってる」

紗季子がフラリとついてゆく。

「お二人に何か飲み物でも出してやってくれ、わたしも喉がカラカラだ。階段に気をつけてなあ！」

簡易エスカレーターの固定器具を解く恒彦の声は弾んでいた。

ソファに殉を座らせた銀さんは、思い詰めたような目でジッとこちらを見つめている紗季子に気づいた。

「どうしたサ…清水さん、何かありましたか？」

「……」

「あの…清水…さん…？」

物もいわず紗季子が銀さんの胸に飛び込んできた。

「来てくれたんだ！あの子が危なくなったらちゃんと…待ってた、アタシ待ってたんだよお！！」

銀さんのぶ厚い胸板にむしゃぶりつき、何度も顔を擦りつける。

「ちよっと！おい、どうしたんだ？よせったら、離れて…離れるよ

！」

「またアタシを置いてっちゃうの？イヤだ！連れてってよ、アタシとあの子も一緒に連れてって！！」

「バカ！」

バシッ！

紗季子の頬が鳴った。

「アタマ打って混乱してるんだ…目えさませ！ここはお前の家で、ダンナもいて、あの子はダンナとお前の子じゃないか！しっかりしろ！！」

え…

だってあたし…

アンタがいなくなつて…

けっこん…ムスメ…あのヒト…

「戻るぞ、長いは無用だ」

「銀さん」

「ナンも言つな！ほら立て」

モーター音がして、恒彦達が二階から降りてくる気配がした。

「悪いが失礼します！今夜の事はまた後日に、じゃあ！！」

殉を引きずるように玄関を飛び出した銀さんは、停めてあったワゴンに彼を押し込むと脱兎のように運転席へ駆け込みキーを回した。

「ジュン！」

「ゴメン、病院で待つてる！まってるから！！」

玄関から聞こえてきた加夏子の声に大声で答えた途端、殉は座席に背中を抑えつけられた。

派手な音を立てて急発進したワゴンは、夜明けの町並みの中みる遠ざかっていった。

（続く）

第七十二章

第七十二章

まるで夏本番じゃないか

まだ5月だってのに、冗談じゃないぞ

くたびれた背広を手に、彼は病院へ向かう長く緩やかな坂道を歩いていた。

吹き出した汗を黄色く変色したハンカチで必死に拭いながら、こんな坂の上に病院を建てた関係者全員を胸の中で呪っていた。

あの事件を担当した時から1年以上も経つというのに、この坂を登るのはこれが二度目……たったの二度だ！いくら捜査本部が異例の短期間で解散したからといっても、いくら自分が当時はペーペーだったからといっても、ガイシャに会ったのがたったの一回で、それも先輩の御供で話すらしてないなんて、これはもう刑事の仕事なんかじゃない！

形の上では継続捜査となったが、実の所は迷宮入り決定だ。今じゃ署内で話題になる事すら稀になっちまったあの事件を、俺は暇を見つけてはコツコツと調べ続けてきた。

血の滲むような思いをして、念願叶ってやっと刑事になれた、その初めての事件であんな挫折感を味わわれて黙って泣き寝入りなんぞ、俺は絶対にしないぞ。

デカ人生の始まりでけっつまずいた、この借りは必ず返してやるからな……

男の決意はそれ自体が既に呪詛と言ってもよかった。

病院というより宮殿の入り口と言った方がふさわしいような豪華な正門をくぐると、広々とした中庭には患者や見舞いの客、職員達がそれぞれ思い思いに時間を過ごしていた。

目的の病棟を探しあぐねていると、丁度あちらから白衣に身を包んだ男が歩いてきた。

ガツシリとした体躯。セパレートタイプの白衣。ひとめで医者ではなく看護師か何かだと判る姿だった。

「すみません、B棟ってのはどっちになりますかね？」

聞かれた中年男が怪訝そうな目でこちらを見る。

「ああ、怪しいモンじゃありません。ホラ」

警察手帳を見せる。

男の顔に過剰な緊張が走ったのを、彼は見逃さなかった。

「XX警察署の柴田ってモンです。今日は折り入って話を聞きたい人がいてね、久しぶりに訪ねてはみたんですが…」

「B棟ならその角を曲がって左だ。行きやあすぐ判る、じゃ」
中年男はそそくさとその場を後にした。

あの男、どこかで…

軽い引っかかりを感じながら、柴田刑事はB棟を目指して歩き始めた。

（続く）

第七十三章

第七十三章

「ねえジュン」

「なに？」

「そろそろ聞かせてくれないかなあ」

「なにを？」

「ワタシ今度はちゃんと覚えてるよ、あの時ジュンが言ってくれたこと……」

車椅子を押す殉に、少し甘えた口調で話しかけながら、加夏子は後ろを振り返った。

「いわない」

「どうして？」

「僕も覚えてる、から」

ぶっきらぼうに殉が答える。

「恥ずかしいコトはないのだよ、堀川クン。ワレワレはかなりトクシユなジョーキョーにあつたのだからして、キミのケツシのコクハクをワガハイはヒジョーにヒョーカしているのだ。ウン」

軽く顎をあげ、ちよっぴり突きだした唇から息を吹きかけるように気取った口調で加夏子が言った。

「なんだよ、それ」

「つまり、嬉しかったってこと」

「なら素直にそう言えばいいじゃん、調子狂っちゃうなあ」

まばらな人影に遠慮する事もなく、二人は陽光の差し込む廊下をじゃれあうように喋りながら進んでいた。

「ところで、どうしてあの時すぐに帰っちゃったの？まるで逃げ出したみたいだったよ」

「あ、イヤ、銀さんがね…何だか急ぎの用事だか急患だかがあったみたいで…」

「銀さんってお医者さんじゃないでしょ？急患だなんて…ヘンなの」

「僕にもよく判らないんだ、ゴメン」

殉は胸の中で手を合わせていた。

実の所、脇で聞いていた殉にはあらかた見当はついていた。

それだけに、おいそれと加夏子に話す訳にはいかなかったのだ。

「フウ〜ン、まっ、いつか」

加夏子はあっさりと引き下がった。

「キミ、清水加夏子さん、かな？」

おしゃべりに夢中だった二人は、その男が傍に来ていた事に気が付かなかった。

「…はい、そうですね。どなたですか？」

「いやあ、デート中を邪魔しちゃったかな」

男は下卑た笑いを浮かべ、懐から小さな手帳を取り出して見せた。

「××署の柴田です、お会いするのはこれで二度目ですが…覚えちゃいないでしょうねえ」

「警察のひと、ですか…」

加夏子の顔に緊張が走る。

廊下の奥の角から、銀さんが三人の方をジッと伺っていた。

その彼をまた伺う者が。

白衣のポケットに両手をつっ込んだ痩身の男…

九十九は無表情のまま、廊下の壁に寄りかかっていた。

(続
く)

第七十四章

第七十四章

「事件のあと足と記憶に障害が残ったんでしたね。ご愁傷さまで」

最後のひとことに加夏子は露骨に顔を歪めたが、柴田はお構いなしに言葉を続けた。

「先日、善意の一般市民から電話を頂いたんですよ、”あの事件の被害者に記憶が戻ったようだ”と。それで事情を伺いたいと、まあそういう訳で」

蛙のような目で加夏子を舐め回す。

「複数の目撃者がいたが犯人像は霧の中……いや闇の中か、どいつも口を開けば黒い影、黒い影ばかりだね。直接の被害者であるアンタが何も覚えていないんじゃないじゃお話にも何ものなりやしないってな具合なんで」

「わたしも見たのは黒い影、それもほんの一瞬でした」

きつい視線で加夏子が返した。

「そう言わずに、何でもいいから思い出してもらえませんか？特徴とか臭いとか……」

「あの、刑事さん」

殉が初めて口を開いた。

「ん？」

「彼女、まだ記憶が戻ったばかりなんです。多分これから少しずつ記憶も戻ってくるんじゃないかと思うんです」

「……それで」

「彼女も御両親も、犯人を捕まえて欲しい気持ちは同じです。ここは病院ですし、時間をかけて彼女の記憶が戻るのを待ってあげてく

れないでしょうか」

「名前は」

「え？」

「名前は、と聞いてるんだ」

ドスの効いた声で柴田が言った。

「堀川です、堀川 殉……」

「いい事を教えてやろう。あれからもう1年以上が経った……時間はもう充分にかかってるんだよ。こうしている間にも事件は風化してるんだ！メクラふぜいが聞いた風な口きいてる今もなあ！」

柴田は殉の胸ぐらを掴むと顔の前に引き寄せ、突き放した。

殉はよろめく身体を壁で支える。

「ちよつと！ジューンは無関係無いでしょ……！」

加夏子が車椅子から飛び出さんばかりの勢いで抗議した。

「おつといかん。癖が出ちゃった」

殉に悪かったなと頭を下げ、柴田はまた後日伺いますよと言いつつその場を後にした。

背中に怒鳴り散らす加夏子の声を聞きながら、彼はある事を思い出していた。

容疑者候補に一人、面白い男がいたのを。

自衛隊あがり

民間警備会社のOB

マシンのような殺傷術を身につけた男

完璧なアリバイ

名前は確か……

ホリカワ

柴田は振り返り、ギラリと牙を剥いた。

（続く）

第七十五章

第七十五章

いつもと変わらぬ夕暮れどき。

ベンチで一服する銀さんの隣には、珍しい人物が座っていた。

「ああいう形で私をだし抜くとは思いませんでしたよ」

九十九はずり落ちてくる丸眼鏡を押し上げながら言った。汗ばむ程の陽気に顔をしかめながらも、銀さんの方は見ようもしない。

「ケツ、よくいうぜ。おおかた遠くから俺を見張ってたんだろ
うよ」

「まさかあゝ！ボクそんなに暇人じゃあないですって」

心底驚いたような顔をしてみせた九十九は、しれっとしてその後を続けた。

「ボクが監視してたのは清水家のほうですよ」

「あの家を見張ってたのか？」

「ええ、朝までね」

「じゃあ…全部知ってて…お前は」

銀さんは絶句した。

堀川君が来るかも知れないとは思っていたんですがねと、呆氣にとられている銀さんを尻目に彼は言葉を続けた。

「まさか貴方が、あんな重装備で登場するとは。あげく血相変えて朝の街を大爆走では、咎める前に笑っちゃいました。察するに久我さん、清水家の方と個人的な繋がりでもあるようですね。で、堀川君がああのタイミングで一時帰宅したのも、清水家を訪ねたのも貴

方の差し金でしょう」

「そこまで判つて何で止めなかったんだ？簡単だろうが」

「気が変わったんです。お手並みを見たくなった」

「リスクは大きかったんだぞ。それでもか？」

「リスク無しで得られるものなぞ有りません」

「……」

「まあ、次もあるでしょうし。楽しみはとっておくと思いますが」

「次って……お嬢はあの通りピンピンしてるじゃないか」

銀さんが顔を曇らせた。

「……終わってませんよ。まだ」

ポン、ツポポン

二人の足下にボールが転がってきた。

「ボールとつてくださーい！」

「みーちゃん、また鞠つきかい？」

「サッカーだよお、やだなあ」

元気良く走り寄ってきた碧は、二人にペコリと頭を下げたボールを受け取った。

「おねえちゃんなら大丈夫だよ。そんなに先生を疑っちゃ駄目だからね！」こいつコイツ”って、もうバンバン聞こえてくるんだから」

「判ったから、あっちで遊んでな」

答えてから、銀さんはギクリとして思わず九十九の方を見た。

怖い顔が、少女の後ろ姿をジッと睨んでいる。
しまった……

(続
く)

第七十六章

第七十六章

九十九は、ボールを蹴って遊んでいる碧をジッと睨んでいた。

「なるほど。そういう事だったか…」

ややあつて九十九が口を開く。

「ガードが下がるのが思ったより早かったのは、あの子の力のせい…成る程な」

「お前：まさか坊やの時のように、みーちゃんを使って何かやろうってんじゃないだろうな？」

「あの能力自体に興味は無いと、以前にも言つた筈です。必要があれば別、ですがね」

意地の悪い笑いを浮かべて、その日初めて九十九は銀さんを正面から見た。

「坊やだつて酷い目にあつたんだ、あんな子供に耐えられる訳がねえ！」

「おちついてくださいよお、やると決まつたなんて言つてないじゃないですかあゝ」

またいつもの調に戻つた九十九が銀さんの激しい口調を丸め込む。

こいつ、コロコロ調子を変えやがつて。

いつもこれで、こっちはペースを狂わされるんだ。

「それに久我さん、心配事をあまり増やさない方がいいんじゃないですか」

「…？どういう意味だ」

「刑事が来てましたね、今日」

銀さんの顔色が変わるのを確かめてから、九十九はゆっくりと言葉を繋いだ。

「貴方に興味が出てきてね、調べてみたんですよ、過去の経歴を。履歴書は…綺麗なモンでした、まっさらで」

「それだけじゃないだろう」

「知り合いに、こういった事を調べるのが得意な人がいてね。動いてもらいました」

久我銀次 43歳

元 広域暴力団山下会系墨田組若頭

7年前に近隣組織の組長、及び組員を横浜中華街にて拳銃で射殺

自らも4発の銃弾を浴び、自首

計画性の無い偶発的事件と判断され、初犯という事もあり刑はこの手の事件としては異例な程軽かった

出所後の消息は不明…

「…もういいだろう」

乾いた声で銀さんが言った。

「刑事は苦手、って訳ですね」

「ああ…」

指の間から、煙草の灰がゴソツと落ちて道に碎けた。

午後6時58分。

成田空港到着ロビー。

長身、痩身の男がゲートから足を踏み出した。
傷跡だらけの顔にアイパッチ。

一般客は皆、男の周りを大きく迂回してそそくさと手荷物預かり所
へと急いでいた。

久しぶりだな

男は体重が無いかのように、ユラリと歩き出す。

（続く）

第七十七章

第七十七章

衣笠恵美子の変化は、今では誰の目にも明らかであった。

最近の彼女は必要以上に寡黙で、仕事の合間にもじっと思い詰めたような表情を崩さない。

「なあエミちゃん、最近疲れてるんじゃないか？他のナース達も心配してるよ」

若い医師はカルテの整理をしながら、後ろに立つ恵美子にさりげなく話し掛けてみた。

「聞き間違いでしょう、先生の」

「間違い？何が？」

「怖がっている、のね」

「あのなあ……」

回転椅子ごとクルリと振り向くと、彼は真正面から恵美子を見た。

顔の至る所に陰があつた。眼の周囲、頬、こめかみ……

顔色もすぐれない。

ろくに寝ていない、食べていないのは医者でなくとも一目で判る顔だつた。

「悩みがあるなら言ってみないか。長官に何か言われたのかい？あの娘……清水さんの様子だつてすっかり良くなつたし、以前なら自分の事のように喜んでいた筈じゃないか？今の君はまるで、たちの悪いものにもとり憑かれているみたいだぜ」

「……九十九先生は……いいんです、もう。私、見つけましたから……」

「え？見つけたって……」

恵美子は黙ったまま部屋を出ていった。
彼は腕組みしたまま、深く溜息をついてドアの方を眺めるしか
なかった。

九十九：長官よお…

お前の患者、一人増えちまったんじゃないか

「ふえつくしょんっ！！」

特大のくしゃみに顔をしかめる九十九に、ベッドに腰掛けた加夏子は思わず笑ってしまった。

「長官、風邪ですかあ？」

「おおかた悪友が噂でもしてるんだらう。僕の事はいいから、テストを続けるよ」

「ハアゝイ」

定期的に行っている心理テストを、慣れた様子で加夏子はこなし終えた。10分とかかかっていない。

「ところでボーイフレンドはどうしたんだい？昨日からまだ一度も姿を見せていないじゃないか。もゝしかしてえゝケンカしちゃったのかなあゝ？」

「また帰宅中ですよ、お兄さんが久しぶりに帰国したとかで。先生、ちよつとヤラシイ」

加夏子がふくれて見せた。

暴力癖が消えた彼女は、今は主治医の九十九とも打ち解けていた。

「そう…お兄さんがね…」

テスト用紙をまとめていた九十九の手が少しだけ止まり、またせわしなく動き出す。

(続く)

第七十八章

第七十八章

十畳のロフトは、ひとりで暮らすには広すぎた。

ここ何年かは家よりも病院にいる時間のほうがどんどん長くなってきた。

そして、一時帰宅するたびに本当に少しずつだが体力の低下を感じるようになってきている。

だだっ広い部屋に置かれた大型水槽、その中にいる数匹の金魚達が殉の姿を見つけて水面まであがってきた。

手さぐりで袋を取り、僅かに傾けて少量の餌を蒔く。

入れ過ぎは水質を悪化させるので厳禁だった。

入院中は大家に面倒を見てもらっているので、殉は水槽の汚れには人一倍敏感だった。

手を差し込み、ガラスをなぞって苔の状態を測ってみた。金魚達が甘えるように殉の指をつつく。

ふっと殉が微笑んだ。

おまえたちが元気だと、僕もうれしいよ

今、水槽に居るのはもう三世代目の魚達だった。

この子達が星になる頃、僕はまだここにいられるのだろうか：

机の上から鉤をとり上げると、薄手のニットを着て殉は部屋を後にした。

港に面した公園は、すっかり闇の底に沈んでいた。

地元では有名な観光スポットだが、平日という事もあり、人影はアベックがまばらに居る程度であった。

殉は杖をつきながら、今は碇を降ろして海上ホテルとなった客船の前までゆつくりと歩いてきた。

潮風が少し冷たい。

すぐそばに気配がした。

「（…何処から来ん 何処へか去らん…）」

懐かしい”声”。

「…おかえり、兄さん。久しぶりだね、本当に」

「殉。元気そうだな」

杖を持つのと反対の手がしっかりと握られた。力強く、カサカサと乾いた、でも暖かい手。

「今度は随分、長かったね。何処へ行っていたんだい？」

「中東…」

ボソリと殉の兄が呟いた。

兄の心の中に異国の言葉が渦巻いているのを殉は聞いた。

その多くが苦悶の叫びであることに気付いた彼は、微かに眉をしかめて言った。

「また戦いに行ってきたんだね。人が…いっぱい死んだんだ」

「今度の戦いはキツかった、色々、な」

手を持ち上げて顔を触らせる。

殉が息を呑んだ。

「右目をなくした。あと一つでお前と同じだ」

「烈にいさん…」

離れたベンチで居眠りをしていた男が、帽子の隙間から二人の方をじっと見ていた。

柴田であつた。

（続く）

第七十九章

第七十九章

駅までの道のりは、住宅街を抜けてしまつとちょっとした田園風景となる。

気恥ずかしさを引きずりながら、その道を銀さんは歩いていた。

隣を静々と進む和服の女性を見る、たったそれだけの事に氣力を振り絞らなければならぬ自分が情けなかった。

「ありがとう、送ってくれて。まだ夕暮れときだけど、ひとり歩きするにはチョットさみしい道だし。助かったわ」

「…タクシー来るまで待つてりゃいいじゃねえか、歩くなんてらしくないぜ」

「うん、なんとなく、ね」

軽く笑いながら紗季子が銀さんを見る。

顔に血が昇ってくるのを感じて、彼はますます不機嫌になった。

クソッ！中坊でもあるまいし…

「このあいだはゴメンナサイ。頭を打ったせいだと判っているけど、あの日、玄関に立っていた貴方を見た時、わたし…」

「よせよ。お前は夢中だったんだ。娘を助けたい一心で、目の前の俺にすぎりついた。それだけさ。お前は母親なんだよ。加夏子ちゃん」

クシャクシャのピースに火をつけると、大きく吸い込んで煙を空に吹き上げた。

「旦那とはちゃんと打ち合わせしたようだな。ドンピシャのタイミングだったぜ」

「え？」

紗季子が驚いて足を止めた。

「えっってお前、俺が病院に待機してるって旦那に聞いてたんじゃないのか？それであの晩……」

「あの時はとつさに……お医者前は何も出来なかったし……それでわたし、貴方の名前を……」

「それじゃあ……」

思わず銀さんも正面から紗季子を見た。

景色の一部と化したかのように静止した男と女の間を、夜の気配を含んだ風が渡ってゆく。

細い糸を手繰るように、二つの影が一步を……

チャラチャンチャン、チャララチャンチャン

安物の合成音で「唐獅子牡丹」のメロディーが鳴り響いた。

舌打ちした銀さんが携帯電話を取り出し耳に当てる。一瞬で顔つきが変わった。

「どうしたの？」

紗季子が心配そうに訊ねた。

「小児病棟の患者が一人、見当たらないそうだ。今、職員総出で捜してる。俺も行かなきゃ」

言うなり今来た道を走り出した。

「久我さん！」

「すまねえ！駅まではすぐだ、じゃあな！……」

ど^んど^ん遠^ざかる後^の姿^に、紗^さ季^き子^こは小^こさく、あ^んた…と^ひいた。

(続^つく)

第八十章

第八十章

息せき切つて門をくぐつた銀さんの目に白衣を着た仲間の姿が飛び込んできた。

「おいテツ！いなくなったのは誰なんだ！？」

「銀さん、どこほつつき歩いてたんですか？もうてんやわんやで大騒ぎ……」

「んな事あ見れば判るわ！だれだと聞いてるんじゃねえか！！」

喧嘩でも売るような勢いで、銀さんはその若者の白衣の胸倉をむんずと握り締め上げた。

「はやく言わんかい！！」

「そつそれがグエ…みどりちゃんですよ…片腕のグエエ…」

「なんだと…」

目を白黒させて半死半生の有様になっている若者の言葉を聞いた銀さんの顔色が同じ位青くなった。

あの子が勝手に何処かへ行つてしまふ訳がない。

病室でも、もつと小さな子の面倒や身の周りの世話を焼いているお姉ちゃん肌のあの子には、ハンデを負っている自分達の立場が外の世界でいかに弱く脆いものかという事が良く判つていた筈だ。

それが、あの年頃の子供にどれだけ酷な事であろうと、あの子はそこから目を背けるような子ではない。

そついう点で、堀川殉とあの子…佐野碧はとても良く似ていた。

何かがあつたのだ。何か非常な事が…

ふと思ひ立ち、銀さんは襟に食い込ませた手を離して病棟の方へ

と走りだした。

「どこ行くんですかあゝ…ゲホゲホ」

恐怖の首締めからやっと解放された若者が、ほうほうのていで声を掛けた。

ナースステーション！

銀さんの声が響き、遠ざかる。

東京駅。 17:30 発岡山行き新幹線の車内。

少し不安気な顔をした佐野碧が窓側の椅子に座っていた。

「ねえ、ほんとにいいの？病院抜け出しちゃって。いくら大人が一緒だからって、アタシやっぱりよくないと思うよ、こういうの」

「大丈夫。せんせいや病院のひとつには、おねえちゃんからちゃんと伝えてあるから。あなたは何も心配しなくていいのよ」

「でも…」

碧は隣を見上げて、その女の顔を覗き込んだ。

彼女の頭の中には、幼い碧には訳の判らない様々な”言葉”が渦を巻いていた。

あのひと…とか、病気が…とか、好き…とか、嫌とか。

「さあ、もう出るわよ」

「うん…」

淡いピンク色のスーツに身を包んだ衣笠恵美子が、碧の肩にサマ―セーターをかけて中身の無い片袖を隠した。

(続
く)

第八十一章

第八十一章

加夏子は何の迷いもなく行動に移っていた。

早朝に、看護師や医者の見回りの無い時間を見計らって病院を抜け出したのだ。

彼女にとって佐野碧は妹同然の存在だった。何もせずただ待つなんて事は考えられなかったのだ。

タクシーを使い駅まで出ると切符を買った。所持金は僅かだったが、頼りになる援軍はすぐ近くにいる筈だった。

ひとつ隣の、コンビニ位しかない駅に降りると、久しく使った事の無い携帯電話を取り出し番号をプッシュした。入院中にも使えるように恒彦が買い与えたPHSだったが、電波はちゃんと届いているようだ。

「もしもし」

「ジュン、あたしよ。カナ」

「カナちゃん？どうしたの、こんなに朝早く。僕なら明日には戻るから…」

「聞いて！みーちゃんが…碧ちゃんがなくなったの」

「なんだって!?!」

「昨日から病院じゅうが何だか騒がしくて、わたし他の患者さんとかに聞いてみたの。そしたら…」

「みーちゃんが居なくなってた、そうなんだね」

「衣笠さんは風邪でお休みだし、銀さんには怖い顔でスルーされちゃうし…お願い、協力して。一緒にみーちゃんを捜して!」

「わかった、わかったけど…探すといったって一体、どこを捜せばいい？」

「それが判れば苦労しないわ。どうすればいい？ ジュン」

「そういわれてもなあ…」

電話の向こうで殉が沈黙した。

とにかく迎えにきて。わたし、XX駅の裏手にいるから。

電話を切ると、しばらく考え込んでから加夏子は再びボタンを押した。

「…お姫サマかい。散歩にしちゃ随分と遠手したね。今どこ？」

「長官：九十九先生。わたし、碧ちゃんを捜さなきゃならないの。馬鹿な事してるって判ってる、でもお願い！ 先生なら何か知ってるんじゃないですか？ 病院の関係者だし…何でもいいんです！ 知つてたら教えて下さい！ 帰つたらいい叱つてもいいですから！」

九十九は、すぐには答えなかった。

加夏子は息を止め、電話から声がするのを待っていた。

「…君にはまだ治療が必要だ」

「えっ？」

「だがそれは、病院では出来ない類いのものかも知れない。いいだろう、行きなさい」

あの子を連れ去ったのは、衣笠君だよ

九十九の声は、どこかむなしさを含んでいた。

（続く）

第八十二章

第八十二章

「外出は私が許可しました。間接的治療の一環と御考え下さい」
院長室の一角で、九十九は病院長と対峙していた。

「これで二人目だぞ、九十九君。一体どうなつとるのかね！騒ぎが漏れないうちに早く連れ戻してきたまえ！！」

「ですから、清水氏の御令嬢については正式な許可を与えた上での外出だと申し上げます。先方には私から了解を頂くつもりです。もう一人の方については、これは私の守備範囲では…」

「もうひとり？ああ、あの片腕の子供か。そんなのは後回しでいい。清水加夏子が最優先だ！」

ロイド眼鏡の奥で、九十九の目がすつと窄む。

「入院患者に事件が起これば、当院の評判はガタ落ちですよ。病院が医者より評判で成り立っている事は、院長もよく御存知な筈ですが」

「それがどうした」

「消えたのは二名、うち一名は私の監督下にあります。搜索に力を入れねばならないのは残り一名の方ではありませんか。最近、刑事もウロウロしているようですし」

「けっけ、刑事だとお！？」

過度に血色の良い院長の巨大な頭頂部から、堰を切ったように汗が吹き出した。

「ええ。このままだと痛くもない腹を探られるんじゃないですか」
意地悪そうに九十九がニヤリと笑う。

「うむう…」

しきりに汗を拭う病院長を冷ややかに見下ろしながら、九十九は次のカードを切った。

「マスコミはセンサーシヨナルな話題に飢えていますからねえ。入院中の子供を連れ去ったのが看護士の一人だったなんて事が判つたら、とてもとても…」

「何だと！今なんと言った！？」

「看護士ですよ。衣笠恵美子。清水加夏子の担当でもありましたからね、私もよく知っていますよ」

「…何処へいったか、それも判るといのかね」

「ええ、だいたいのところは」

「よろしい。この件は君に一任する。警察より早く子供の身柄を確保したまえ」

「それだけですか？」

「…うまくいったら、それなりの待遇を約束しよう。何なら一筆書いてもいい」

「そうして頂けると助かります。それでは」

しくじるなよ、九十九

もししくじったら、判ってるだろうな！

背を向けたまま軽く手を挙げると、九十九は院長室を出た。

狸親父め…

まあいい、面白くなりそうだからな

（続く）

第八十三章

第八十三章

車窓の外を流れる見知らぬ景色。
ありふれた四人掛けのボックス席。
通路を転がる空き缶。

「こういう時、車椅子って不便ていうか邪魔よね。折り畳みだけ
どさ」

「……」
「新幹線の方が早いけど、しょうがないな。ジュンだってそんな
お金、もってる訳じゃないし」

「……」
「なんか、ちょっとイイよね。二人で電車って。駆け落ちみたいで」

「……」
「ねえ、どうしたの？ 駅出てからずっとだよ！ 難しい顔して黙り込
んで」

加夏子の声が聞こえていないかのように、殉は視線を落としたまま
黙りこくっていた。

出発する直前だった。

加夏子の乗車を手伝ってもらう為に駅員を呼びにいった際、不意に
後ろから声を掛けられた。

「殉」

「兄さん？ どうしたんだい、いきなり」

「事情は判ってる。女の子を捜しに行くんだろ」

「うん」

「遠出をするな……」と言ったところで聞くような奴じゃないよな、お

前は。昔から頑固だったし」

「兄さんだつて。僕が何と言ったって自分の道をゆくでしょ？同じだよ、兄弟だし」

「まっただ」

くつくと小さな笑い声が聞こえたと思うと、殉の手に紙幣の固まりが握らされた。

「何かあったら迷わず俺を呼べ。見かけはどうであれ、お前の身体はもう…」

「それ以上は言わないで。判ってるよ、自分のことは自分が一番、よく判ってる…」

「そうか」

兄の心に音が響いているのを殉は聞いた。

低く、哀しみに満ちたコントラバスの音：

自衛隊に入る前、兄がよく練習していたのを彼は思い出した。

「…あれがお前の連れ、か？」

聞かれて殉ははっと我に返った。

「うん、足が不自由で大変なんだけど、碧ちゃんを捜すって言ってるじゃないんだ。僕がついててやらなきゃ」

「好き、なのか？」

「…うん…僕、決めたんだ。生きてる限り彼女を、加夏子ちゃんを守るって」

かな…こ…だと…?!

コントラバスの音が、オーケストラを丸ごと押し潰したような凄まじい轟音に一瞬で変わった。

「清水…加夏子…なのか？あの車椅子の女は」

「そつだよ、兄さん知つてるの?」

棒のように立ちつくしている兄の姿が見えるようだった。
それ程に傍らの気配は硬直し、凍りついていた。

(続 く)

第八十四章

第八十四章

怒った訳でも、いじけてすねたりした訳でもない。

加夏子はただそっと、向かいの席に座った殉の頬に掌を触れただけだった。俯き続けていた顔がはっと上向く。

「何を悩んでるか知らない。聞かない。私にはジュンがいる。それで充分。でもワタシが話しかけたらこっちを向いて返事して。じゃないと寂しい…」

「カナちゃん…」

「いい加減、カナって呼び捨てにしてもいいんじゃない？そのへんのバカップルよりもウンと沢山！絆を持ってる筈でしょ、わたしたち」

殉は言葉を返せなかった。

加夏子の言葉は、彼の心から暗雲を払うかのような光を…暖かな光を照らし続けていた。

だらしないなあ、僕は

彼女を守るって決めたんだろ

カッコ悪いや

「…ごめん。色々、考え事してたんだ。もう大丈夫」

「かんがえごと？だいじょーぶ？ナァーニそれ、ジュンっぽくないぞぉ」

加夏子が屈託無く笑う。

釣られて殉も笑った。

「そうだな、らしくないね、こんなの」

「そ〜だよ〜、長官がここに居たらブンセキされちゃうぞ〜!」

包み込むように加夏子を抱きしめる。

言葉が止まった。

「…今、好きだって言ったらカナはどうする」

「…こうする…」

身体を離れた加夏子の唇だけが殉のそれに重なる。

柔らかな想いが、殉から最後の逡巡を拭い去っていった…

渋谷駅前。スクランブル交差点。

慌ただしく道を渡る人、人、人…

その中に三人の人影があった。どの影も動かない。

「久しぶりだな、鴉」

影の一つが口を開いた。

「お前か」

もう一つの影が答える。

「1年も何処をほつつき歩いていたんだ？タフな奴だ。ライオットガンは応えただろうに」

その影はくわえていた煙草を向かいの影に放る。

胸元にぶつかった煙草が火の粉を散らして路上に落ちた。

「あれ位でくたばるとは、お前も思っちゃいないだろう？」

その影は足下の煙草をにじり潰した。

「…決着をつけるか？ここで」

沈黙を守っていたもう一つの影が動く。

「止めておこう。他にやらなきゃならん事があるんでな」

「貴様に”殺し”以外の愉しみがあるのか？」

「ある。愉しみじゃないが、な」

三つの影は、信号に促されるようにその場を去っていった。

（続く）

第八十五章

第八十五章

内海に沿って広がったそこは、潮風が路地の隅まで撫で抜けるような、そんな街であった。

尾道という名の駅に降り立ち、殉は車椅子を押しながら辺りを見回してみた。

すぐ側に港。寂れた駅前から視線を上げれば、反対側はなだらかな傾斜の山間に民家や寺の類が点在するのが見てとれる。

加夏子が視線を上げると、山の手は急に勾配を増してそびえ立ち、頂上には小さな城のような建物があった。

「尾道城。昔、瀬戸内を根城にしていた海賊があそこに城を建てて、自分達の縄張りに睨みをきかせていたんだって。海賊と言っても今と違って…領主が土地を束ねたように、海賊にとっては海が自分達の領土だったのよ」

首を左右に振る殉に、加夏子が下から解説してみせた。

「へえ、物知りなんだね、カナは」

加夏子がクスリと小さく笑った。

「え？ぼく何か変なこと言った？」

「ウン、そうじゃないの。そうじゃないんだけど…」

少しずつ笑いが大きくなるのを抑えようとしながら、加夏子が殉の目を覗き込んだ。

「キスの効き目、あり過ぎかなあて…」

????

「だってジユンったら、”物知りなんだね、カナは”なんて言うんだもん。ナンカもうすっかり俺の女、みたいじゃない」

「だって君が言ったんじゃないか、”カナって呼べ”って！ボ、ぼくはだから…」

抑えきれなくなり、人目もはばからず笑いに笑った加夏子は、まだヒクヒクと引きつりながら優しく声を発した。

「いいの、とっても新鮮。ケンちゃんだってワタシを呼び捨てにした事なかったし」

「ケンちゃんって…病院に来てた大学生くらいの人？」

「そう、幼なじみなんだ。好きだった…昔」

虚を突かれ、殉が黙り込む。

「あこがれ、だったのかなあ。何時も側に居てくれるカッコいい幼なじみ。恋してると思っちゃうよね普通…」

港からの潮風に髪をなびかせながら、加夏子は呆々と島影を眺めていた。

「違うの。人が人を好きになるって、当たり前みたいに居た人とかつつく事なんかじゃない。出会って、戦って、判り合って…それでやっとスタート地点。それをワタシに教えてくれたのは貴方よ、ジユン」

「カナ…」

見つめ合う二人に、漁師姿の男が近付いてきた。

（続く）

第八十六章

第八十五章

くたびれた長靴が乾いた路面に足音を吸い込ませていた。色褪せたウィンドブレーカーの襟元に下げたタオルで汗を拭いながら、ニコニコと愛想良く話しかけてきたのは初老の男だった。

「観光ですかの、車椅子じゃあ難儀じゃろうに」
「…こんにちは」

怪訝そうな顔で、それでも礼儀正しく挨拶をした加夏子をジロジロと眺め回した男は、顔を上げて今度は殉の方を向いた。

「目が見えんのかいのう、こっちも難儀じゃ」
「…ハア…」

殉は殉で、毒気を抜かれたような声で返答する。
勿論、それだけではなかった。

「おじいさんは漁師？」
「ホウホウ、こりゃまた勘のいい子じゃのう。判るんけ？」
「聞こえるんです。ザバァンザバァンて波の音…ヒュンヒュン
いつてるのは潮風…船で鳴ってる風の音なのかな？」

殉は男の”心の音”を聴いていた。

「ホウホウ、これはこれは…」
初老の男は嬉しそうに目を細めた。幾条にも刻まれた皺の中に目が埋没してしまったようになる。
「めしいたモンには時々、わしらにゃあ見えぬもの、聞こえぬもの

を感じる奴がいるが、あんたもそうなんかのう…珍しい事もあるもんじゃて。この間はこの様な小さな子じゃったが…」

男の最後の言葉に、二人は同時に反応した。

「小さい子!？」

「ちいさな子ですって!？」

「オヤ、どうした。顔色が変わりましたぞ」

初老の男が少し驚いたように言った。

「僕たち観光なんかじゃなくて人を捜しにきたんです。小学生くらいの女の子…もしかして見かけたんじゃないですか!知ってたら教えて下さい!!」

殉は声のする方へ両手を伸ばした。

その手が空を切る。

男の身長は150cmもなかった。

思いもかけず力強い手が、殉の両手をガツシリと捉えた。
ゆっくりと肩に置く。

「随分と深刻そうじゃの。ワシでいいなら手伝っちゃるけん。あのチビちゃんを捜しとるのか？」

「あの子は…碧ちゃんは病院から連れていかれたんです。早く連れ戻さないと大変な事になる…おじいさん、知ってる事があるなら教えて下さい!」

「ワタシも…あの子は妹みたいなものなんです。御願います!」

加夏子も男に向かって頭を下げた。

男が照れくさそうに首筋を掻いた。

(続く)

第八十七章

第八十七章

何年ぶりだろう。

ここに立って、眼下に広がる海の、終わりの果てを目で追うのはいつも、いつまでもそうしていた。彼と二人、他愛もない言葉を交わしながら飽く事もなかった。いつまでも続くと思っていた幸せな日々…

小石に躓くように簡単に、それは終わった。

あの時から、私の旅は始まった。

あての無い、取り戻せるかも判らないものを探す旅が。

私が見つけたものは、この旅の終わりを見せてくれるのかしら。求めていた答えを指し示してくれるのかしら。本当に…本当に…

緩い風がふわりと髪を巻き上げる。

彼女は瞬きもせず、ただただ遠くへと視線を彷徨わせていた。

「…さん…おじょうさん…」

高台の後ろ、下へと通じる細い小道の向こうから彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「だれ？ツネさん？」

「へい。そちらにおいで」

海に背を向け林を睨む彼女の前へ、幾らかからぬうちに白い割烹着姿の男が現れた。

「やっぱりココでしたか。この坂あ、そろそろあつしにやあキツくなってきましたな」

「ツネさん、どうしたの？そろそろ調理場も忙しいんじゃない」

「へえ、まあそうですね。何やらね、捜してるんですよ、おじようさんを」

「捜してる？誰が？」

「少し前に男が来たんで。東京から来たって言っていました。おかみさんが応対してましたが…こんなモン置いてきました」

割烹着姿の男は小さな紙片を彼女に渡した。

「やたら図体のガツチリした、ブルドックみたいな顔した奴や。探偵だとかぬかしてたが、ありやあどう見ても悪人の面あだ」

何の飾りも無い白い紙に、三行だけ。

K & M探偵社

北山 謙二

03 - x x x x x - x x x x x

「この人…もう帰った？」

「へえ。」暫くこつちにいる事になりそうだから、安い宿があったら紹介してくれ”なんてぬかしやがった。ウチあ旅館ですぜ！おかみさんも御立腹でしょうに」

彼女：衣笠恵美子は黙って名刺を見ていた。

「おじようさん、東京で何かあったんけ？あつしでよけりやあ相談に…」

「何もないわ。教えてくれて有り難う、もう戻っていいから」
にべもなく答え、恵美子はまた海に見える方へと歩きだした。

急がなきゃ

細い指の間で、名刺がクシャクシャに握り潰されていた。

（続く）

第八十八章

第八十八章

やたらと横に長い土地だ。

どこもかしこも寺、寺、寺…

俺は坊さんじゃねえぞマツタク。

ぶつくさとぼやきながら、北山は山間の道を駅の方へと歩いていった。

野郎、てめえだけ美味しい所を持つてくつもりだな。俺だってあの害鳥とは因縁があるってーのに、なあゝにが”女の子の確保が最優先です”だ。優等生ぶっててもテメエが一番、アイツと遣り合いたがってんじゃねえのか？

そもそもあの会社は俺のモンだろうに、何時からあんな若造に指図されるようになったんだ。
クソッ！

共同経営者への呪いの言葉を胸の中で唱えながら、後をついてくる猫やら鳩やらに蹴りのポーズを見舞ってみせた。

よほど人に慣れているのか、猫も鳩もその程度では逃げ出さない。相変わらず北山の後ろをトコトコと付いてきた。

とうとう畜生共にもなめられたか
情けねえなあゝ

まるで北山の声が聞こえたかのように、唐突に携帯電話の着信音

が鳴り響いた。

「オウ」

「北サン、今どこですか？」

「尾道にやあ着いてるぜ。今しがた誘拐容疑者の実家にも顔を出してきた。お高くとまった女将に冷たくあしらわれて、猫やら鳩やらになくさめられてるところさ。うらやましいだろ？」

「衣笠恵美子が実家へ女の子を置くとは考えられません。どこか別の誰にも知られてない場所でしょう。そこは彼女の地元だ。顔は知られ過ぎてる」

電話の声は、北山の嫌みなど一切聞いていないかのように話を急いでいた。

「そんな初歩的なアドバイスをこの俺様にする為に、わざわざ乏しい経費を削って携帯に掛けてきたのかテメエは？俺の忍耐にも限度ってモンが…」

「どうしたんですか北サン？もしかして怒ってるんですか？」

「おお、判るか！俺は今すこぶる機嫌が悪い！！」

顔の真ん前にかざした携帯に吐き捨てるように北山が怒鳴る。

「…鴉が、消えました。所在が掴めません」

電話の向こうから冷やかな声が響いた。

「なんだと…」

「僕もそちらに合流します。奴は弟の後を追ったのかも知れない」

「…」

「今は女の子の搜索が第一です。すぐにこちらを出ます。連絡は到着後に。じゃ」

北山が言い返す暇も無く、それだけ言って電話はブツリと切られた。

(続
く)

第八十九章

第八十九章

「どのくらい離れているんですか？衣笠さんちの旅館って」

「あと坂を3つほど越えて、地藏さまの裏手を回り込んだ辺りだったかの。しんどいじやろうが辛抱しちくれ」

「3つ…坂3つですか」

大汗をかきながら車椅子を押す殉は心底しんどそうであった。

「ゴメンね、ジュン」

「なあに、これくらい…どうってこと…ないや」

「フォッホッホ、椅子を押すのは兄さんの役目らしいからのう。すまんが年寄りには道案内だけさせてもらうけ。もう昔みたいな力はないけん」

老人は口で言うより闊達な歩調でスタスタと先を歩いてゆく。

「あつ、ここ左ね…ねえジュン、衣笠さんはどうして碧ちゃんを連れていったりしたのかな？」

「ボクにも…わかんない…わかんないケド、碧ちゃんじゃなきゃいけない理由があるとしたら…」

「あるとしたら？」

「心の声。それしかない」

加夏子が一瞬、息を呑んだ。

殉の口調は断定であった。

「あのチビちゃんと会ったのも駅前だったか。酷く右膝が痛んだ日じゃった。ジツとこつちを見て、”おじいさん、足、痛いのか？”といいおった。わしゃあビックリしたぞ、ビックリしたが嬉しかった。身寄を無くしてもう何年経つか忘れたが、見も知らぬ女の子に案じてもらえるなんぞ、この歳にやあそうそうない事であらう」

背を向けて歩きながら、老人は誰に聞かせるでもなく話し続けた。

「その時、おじいさんは気が付いたんですね、あの娘の”力”に」
「そうじゃな」

つづれ折りの坂道を曲がろうとした時、上から男が一人、歩いてきた。

グレーの背広を肩にかけ、額に汗を浮かべたその男は不機嫌そうな顔で三人を一瞥すると、俯いたまますれ違い坂を下っていった。

「なんか感じわるいね、今の人」

「ダメだよカナ、聞こえちゃうじゃないか」

「大丈夫だつて。それにあの人、なんかこの辺りの人じゃないみたい」

「まさか。想像力逞しすぎだよ」

「そうかなあ……」

車椅子から身を乗り出し。加夏子は後ろを振り返ってみた。角を抜けた男の姿はもう見えなくなっていた。

ボーツと歩いていた北山が立ち止まる。

車椅子。盲目の少年。

まさか。

坂の途中でガバツと振り返る。
驚いた鳩が数匹、空に舞い上がった。

（続く）

第九十章

第九十章

小さいが品良く纏められた庭園を抜けた所が目当ての旅館であった。玄関までの道には小砂利が敷いてあり、やっと坂道から解放されたばかりの殉はもうひと汗かかされる羽目となった。

「ねえジュン、聞こえてる？あと少しよ」

「…ハアハア…も…もうダメ…」

「頑張つて、あとチョットだから」

青息吐息で何とか旅館の入口まで車椅子を運んだ殉は、精魂尽き果ててへたりこんでしまう。

「大丈夫？ 顔、青いよ」

「な、なんとか」

殉をいたわる加夏子の脇へ老人がやってきて、ここがそうじやよと声を掛けた。

「兄さん大丈夫かいのう」

「ワタシいつてきます。おじいさん、ジュンのこと見ててくれませんか」

「引き受けた、いつといで」

ホイールを回して玄関の引き戸まで行くと、手を伸ばして開けた戸口の中へ向かって加夏子は勢いよく叫んだ。

すみませーん！

ごめんくださあーい！！

途端に足音が響き、仲居風の中年女が顔を見せた。

「鈴木さまですね。ようこそいらつしゃいました…アラ御嬢様ですが、係の者が伺っている筈ですのにとんだ失礼を…今、人を呼びますので暫くお待ち下さい…チョット！誰かおらんね！」

「あ、アノ、ワタシ鈴木じゃあないんですけど…」

「えっ？ 違うの？ じゃあ富沢さんとこの…」

「それもチガイマス、ワタシひとを捜しにきたんです、ここが実家だと聞いたので…」

「お客じゃないのかい！？なら裏口から来てくれんと困るわ…」

「何ですか。騒がしいですよ」

奥から和服姿の女性がゆつくりと歩み出てきた。

白いかすりの着物。高く結い上げた髪と凜とした佇まいが、光の強い目と相まって彼女こそこの女将だと見る者に教えていた。

ママに似てるな…

加夏子は少しの間、ポカンと彼女を見つめていた。

「お嬢さん。人を捜しているとおっしゃってましたね。娘の…恵美子の事かしら」

「そうです。でもどうして…」

「貴方で二人目ですよ。今日、あの子を訪ねてきたのは」
微笑んで女将は言った。

「お連れさんもういらつしゃるようですし、兎に角おあがりなさいなさあ」

女将は仲居に、車椅子を中へ挙げるように言うと、裾を返して奥へと歩き出した。

（続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4038d/>

灯舞 -akarimai-

2010年10月17日03時23分発行